２０１９年３月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前回の審議会での答申を受け「２０１９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０１９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編成計画」について説明があった。次に、甲府放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、ヤマナシ・クエスト「ひとモノガタリ　育てる。いっしょに育つ。～卓球指導者・平野真理子の指導法～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、４月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
副委員長　　奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
委　　員　　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
杉山　弘子（アサヤ食品(株)代表取締役社長）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜ヤマナシ・クエスト「ひとモノガタリ　育てる。いっしょに育つ。
～卓球指導者・平野真理子の指導法～」(総合　１月１８日(金)放送)について＞

○　昨今、スポーツの指導者のあり方が問われている中で、タイムリーな話題だった。今回の番組のように、優しく楽しく指導して、選手たちが結果を出しているということは大変すばらしい。「楽しくなくてはいけない」、「個性に応じた育て方や叱るポイント」、「選手を怒るのは自分自身の不甲斐なさに怒っている」、「自分だけで

はなく、複数で指導する」そして、「待つ」など、平野さんの指導のポイントが分かりやすく伝えられていた。ただ、指導者として「待つ」「楽しくやる」という中では、葛藤もあるのではないだろうか。指導は楽しいだけではないはずで、そこをどう乗り越えたのか、そのあたりをもっと知りたかった。番組でそうしたところも取り上げられれば、他の指導する立場の人にとっても励みやヒントになったのではないか。取材する側である番組ディレクターに対して、平野さんのほうから距離を縮めてくれたという点は、指導者として一番大事な、相手との距離を縮めるというところを目の当たりにさせていただき、大変共感できた。

（ＮＨＫ側）

もちろん平野さんの中にも悩みがありながら指導していたと思うが、教えている子どもや保護者の前では、あまりそういうところは見せず、いつも明るく笑顔で指導していた。取材する中では、そういう部分も見えてはくるが、子どもたちの前では指導者として全うしていらっしゃった。

○　番組の冒頭に社会人２年目のディレクターが登場したことが斬新で、「平野さんの話ではなかったのか」と、よい意味で引き込まれた。平野さんの指導法は、「監督やコーチが決めたことにただ従うのではなく、自分の意志でやることが大事」、「親に言われて進んだ道では本人が頑張れない」、「指導は複数でやる」といったものであり、単にスポーツだけでなく、経営者やさまざまな分野の指導者にとってもためになると感じた。番組では平野美宇さんの妹の亜子さんと同じクラブの一朗さんがそれぞれ抱えている課題とそれを克服するために平野さんがどう寄り添っているかが丁寧に描かれていた。一朗さんが泣いて顔を伏せているところに「現実を見なければいけない」と指導する場面で「それを受け止められる子どもだからしている」という話があり、きめ細かな指導に感銘を受けた。全般的にすばらしい番組だったが、ディレクターの成長についても取り上げたのであれば回収してほしかった。そうでなければ、指導者と亜子さんと一朗さんに絞るぐらいでないとこの時間では伝えられないのでないかと感じた。逆にディレクターの成長も含め、もう少し長く取り上げても十分によい番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

「ヤマナシ・クエスト」よりも２分長い全国放送版では最後にディレクターの成長を少し付け加えたが、「ヤマナシ・クエスト」だけをご覧になった視聴者にはやや伝わりづらかったかもしれない。

○　ひと事ではないという気持ちで番組を見た。冒頭でパワハラに関連する映像とことばがたくさん出てきて心が締め付けられる思いがした。学ぶことがたくさんある番組で、平野さんのことばをメモしていたら２０個ぐらいになった。自分が子どもと向き合う際に、こういう子育ての仕方がとてもよいと学ばせていただいた。経営者や指導者だけでなく、子育てをしている親にもぜひ見てほしい番組だと思った。子どもの虐待を含め、子育てが社会問題になっている今だからこそ、とてもよい番組だったという印象を受けた。

○　平野さんのようにそれぞれの個性に合った指導をすると、子どもは柔軟に受け止めて、確実にステップアップしていくことが番組を見て分かった。短い時間の中でも、子どもの表情がよく捉えられており、成長が感じられる番組で大変よかった。一方で、冒頭のパワハラの話題は導入として必要なかったのではないか。また、子どもと比べると大人の成長度は小さいので、ディレクターの話も取り上げなくてもよかったのではないかと思った。

○　私自身、パワハラと指導の違いを考え続けている中、ディレクターの目を通して、卓球の指導にスポットを当ててそのことを見せてくれたのはよかった。平野さんが指導する卓球教室に片道３時間もかけて通う子どもがいることや、その卓球教室から年間１０人以上の全国大会出場者が出ることに驚くとともに、その秘密を知りたいと思った。のびのび楽しく練習することを第一にして、コーチに言いにくいスポーツ特有の雰囲気をなくそうとする努力、亜子さんへの丁寧なグループ指導、心の揺れが課題の一朗さんに本質を指摘する指導、仲間へ一生懸命応援ができない人間性への指導など、それぞれなるほどと思った。「怒ったら負け。怒るということは指導者として力がないから。手を打って楽しく待つ。一緒に育つ」ということばも深く心に染みた。パワハラと指導の違いについて、時にはとげのようなことばでも相手の成長を願い、その思いがしっかりと相手に伝わっていれば違ったものになると分かった。今回は平野さんが語ることばを通して番組のテーマを受け取ることができたが、ディレクターの成長はよく分からなかった。今回の番組作りを通してどのようなことを学んだのか、どう成長したのかを映し出したらよかったのではないか。

○　最近、さまざまなＮＨＫの番組を見ていて、若手のディレクターや企画者が担当した番組についてみずから前面に出て、企画の主旨や制作の意図などを伝えることで、視聴者にとって制作者の思いやねらいがよくわかり、また親近感もわくのではないかと考えることがあった。そうした中で、この番組を視聴したのだが、パワハ

ラといった今日的なテーマを取り上げていて、ディレクターの思いと、卓球の指導という２つの軸があった点がよかった。平野さんによる、「のびのび正しくやる」、「自分の意志が入っているだけで楽しくなる」といったことばは大変示唆に富むものがあった。キャラクターとそのことばや行動にも、飾り気や気負いがなく、自然に視聴者を引き込むので好感が持て、メッセージも素直に受け止められた。悩んでいるディレクターに平野さんがことばをかけるシーンも大変リアルで、よかったのではないか。そういう意味で、素材がすばらしく良質なドキュメンタリーという印象を持った。また平野さんが教え子の一朗さんについて話す場面の直後にカメラを振ると、ちょうど彼の練習風景が描かれていたり、一朗さんが試合に負けて涙がこぼれるシーンがアップで捉えられるていたりするなど、カメラワークがよかったと思う。一朗さんが、負けてもあきらめない、焦らないと、指導をしっかり受け止めている点もラストに向けて印象的なシーンであった。一方、冒頭でパワハラの問題提起などがあったにも関わらず、番組の中では十分な答えがなかった点は疑問に思った。例えば、平野さんの指導法などについて、コーチングの専門家や心理学者などの客観的なコメントを入れることによって、パワハラと指導の違いなどが、うまくまとめられたりするのではないかと感じた。パワハラと指導の違いは実際多くの会社で問題になっているので、いろいろなヒントがちりばめられたよい番組であった。

（ＮＨＫ側）

冒頭で問題提起している以上はまとめなければという思いは制作者としても持っていたので、平野さんの指導法を丁寧に紹介することの一つ一つの総体がその答えであるという思いで番組を構成したつもりだ。専門家のコメントで価値付けするとすごく分かりやすくなるとは思うが、今回は人間を描くドキュメンタリーというジャンルの中で制作した。

○　パワハラと指導の境界線について話題になっている中タイムリーな企画だった。冒頭の部分はやや重く感じたが、「個性」、「のびのび」、「楽しく」といったキーワードがよく分かる内容だった。「子ども自身の意志が入ることが大切」というのは、自己実現のための具体的な目標設定をするということで、ビジネスマネージメントでもよく使われる手法なので、それを導入した教育手法は見事だった。社会ではメンタル強化が大きなカギにもなっているが、番組でも、勝負よりも「がんばり」を重視し、一朗さんという一人の生徒を題材に全員を指導し、レベルアップにつなげるというのは全員の個性を知らなくてはできないことで、短時間で本当によく描けていたと思う。最後のディレクターが成長したかどうかの部分はもう少し時

間をかけて伝えてほしかった。

○　パワハラと指導の境界線とは何か、その答えはどこにあるのかと思いながら番組を見た。平野さんのことばの端々にいくつかそのヒントがあったように思う。なかでも「親に言われて進んだ道では本人が頑張れない」ということばは印象的だった。「主体的な子ども自身の学びは、深い学びに展開する」ということばのとおり、その精神を指導の中に具体的に取り入れ、子どもたちの個性に合った適切な指導法を常に考えていることがよく分かった。自分だけの力を過信せず、チームで子どもを指導するという話があったが、子育てにも通じることだと思った。「種をまき、水をあげ、時間がかかるがきっと芽が出てくるだろう、待つ時間が楽しい」とまで言える平野さんには心底感心した。

○　番組の冒頭でも紹介されたが、昨年来さまざまなスポーツ指導者によるパワハラ問題がニュースなどで報道され、社会問題にまでなった。番組はその問題に警鐘を鳴らすと同時に指導者はこうあるべきでないかという一つの手本を示した、タイムリーなものだった。失敗だけを取り上げて怒る指導者が多い中、負けた試合の中からよい点を見つけ、褒めてあげる平野さんの指導は大変すばらしかったと思う。「育てる。いっしょに育つ」というタイトルのとおりの指導法だった。ディレクターに厳しい中にも優しくアドバイスしていたこともとても印象に残ったので、時間の関係でディレクターの成長部分があまり描かれなかったのは残念だった。全国放送もされたということなので、多くの指導的立場の人たち、社会人が番組を見て、指導者や上司の命令ではなく、自ら楽しんで練習や仕事に取り組むということを実践してほしいと思える大変よい番組だった。ただ、途中で平野さんが買い物する場面は、あまり必要なかった気がした。

（ＮＨＫ側）

ディレクターの成長物語になってしまわないように、主人公はあくまでも平野さんであり、その指導法のすばらしさ、奥深さを多角的に描くためにディレクターとのやりとりの部分も入れ込んだというねらいもあった。

○　平野さんの指導の中でも特に何でも言える場所づくり、本人の自発的な気持ちを引き出す指導が心に残った。一人一人の個性に応じた向き合い方、自分だけで抱え込まず、他の人の経験、力も借り指導する、そのような環境であれば子どもはその子らしさを生かしながら可能性がどんどん広がると思った。選手、子どもたちだけでなく、２年目のディレクターのサイドストーリーも印象的だった。ドキュメンタ

リー、特に子ども、障害のある方の取材は細部まで気を使うことが多いと思う。「精いっぱいやっているがアップアップ、迷惑をかけないように気にしているけれども気がつかないところでかけている」と平野さんに指導を受ける姿は弱点をさらけ出した分だけ、視聴者により共感を生んだのではないか。これから新入社員が増える時期で、子育てに悩む親だけでなく、フレッシュマンたちにも勇気を与えてくれるだろう。ディレクターの勇気にも拍手を送りたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月３日(日)のＮＨＫスペシャル「“黒い津波”知られざる実像」を見た。科学的根拠に基づく内容で「黒い津波」自体が被害をさらに大きくしたということを実験を交えて明らかにする内容だった。海底にある油、重金属の粒子のようなものがヘドロとなり波に含まれ、衝撃波が普通の水よりも２倍以上あったという事実や、波の力が強く、引き込む力も大きいこと、「津波肺」ということばも番組で理解することができた。８年が経過したからこそ、検証して放送できる内容だったと思う。

○　３月８日(金)の首都圏情報　ネタドリ！「映像記録　首都圏３．１１　震災８年目の防災は」は帰宅困難時にどうすればいいのか、液状化や毎日の防災、食品の備蓄といった、身近な話題で構成されていてよかった。日々の生活の中で何に注意したらよいのか、もう一度振り返り、自分の生活面を見直す意味でも重要な番組だと思った。

○　東日本大震災については、大変手厚く伝えていたが、その中でも、３月８日(金)の２画面ドキュメンタリー「無人の町から８年～福島県浪江町～」(総合 後 10:00～10:43)を見た。2011 年と 2019 年の８年の今昔を２画面で対比させる番組で、何が変わって、何が変わらないのか、同じアングルで比較しており、「明日へつなげよう」や「復興サポート」とはまた異なったインパクトのある番組だった。アナウンサーのナレーションがなくても、映像だけで十分伝わる内容で、かつ重い内容でもあった。2011 年の映像では、遺体がある場所を示す赤い旗などは衝撃的だったし、2011 年以前の平和な時代の「新日本紀行」の映像も織り込みながら、被災前、被災時、現在と３時代の変化も伝えられていた。金魚の映像も印象的で、「生きるかな、生かしてあげたい、生き延びてくれる」というコメントもずっしりと重かった。今回で終わらせることなく、同じアングルで数年おきに継続して記録して資料として保存してほしい。津波から東京電力福島第一原子力発電所の事故、安全神話の崩壊へという大きな流れを捉えた番組で、人々の記憶を風化させずにとどめていく試

みとして、映像の持つ力をいかした、歴史に学ぶという視点でも教訓となり得る番組だった。

（ＮＨＫ側）

２画面ドキュメンタリー「無人の町から８年～福島県浪江町～」の撮影は８年前に取材したディレクターが今回もう一度取材している。

○　３月９日(土)のＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」を見た。原発事故の現場が緊迫しているのは想像できたが、番組ではその周りにいる医師たちの緊迫した様子が描かれていたのが印象的だった。原発事故がどうやって起きたのか、今回の番組で医師たちの目線から見ることで改めて思い出した。東日本大震災が起こった当時は、原発事故の現場に派遣された医師たちも、まさかこのような悲惨な状況になっているとは思っていなかったと思う。番組では看護師の方々の話が出てこなかったが、医師のインタビューの中に看護師が泣き崩れていくという話があったので、自分たちも死んでしまうのでないかというぐらい医師や看護師たちの中にも緊迫した空気があったのだろうと伝わってきた。医師の心理状態や現場での出来事を時系列でリアルに見ることができ、とても意義のある番組だった。

○　ＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」を見た。現場で働く医療関係者の命がけの７日間は全く知らない事実で、関わった人々にそれぞれのドラマがあるとは理解していたが衝撃的な番組だった。あの７日間の経験がさまざまなことを変えて今につながっていることがよく分かった。

○　一連の東日本大震災に関する特集番組については、ＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」を始め、過去のさまざまな事実を発掘し、現状を伝えており、制作側の意図もよく分かった。そういう中で一番興味を持っていたのは、震災から８年を迎えた３月１１日(月)のゴールデンタイムにＮＨＫはどのような番組を放送するのかということだった。それがＮＨＫスペシャル「“震災タイムカプセル”　拝啓　二十歳の自分へ」であった。若者たちにとっては、震災によって人生が変わってしまい、いまだにいろいろ迷っていたり、過去に向き合えなかったりする若者もいる。そんな彼らが震災後８年たって新たな旅立ちをしていく様子を描き、過去から未来へ希望のようなものを感じられる番組で、それをＮＨＫが３月１１日のゴールデンタイムに放送したという点が大変よかった。

○　３月９日(土)のＥＴＶ特集「誰が命を救うのか　医師たちの原発事故」を見た。

東日本大震災関連番組が充実していたが、中でも息を詰め見入った番組だ。原発事故発生直後に福島に入った医師たち、彼らが撮った数千枚に及ぶ写真、映像とインタビューから構成されていた。近距離で被ばくした高齢者がバスで１０時間以上かけ、緊急避難をさせられ、避難先の建物に隔離、収容された。バス移動中も含め、６０人以上が緊急避難中に死亡という信じられない事実もあった。まさに命をかけて駆けつけた医師、消防士、自衛隊員は状況も分からず、前例もなく、現場で判断を迫られた。医療従事者自身が毎晩のように泣き崩れる壮絶な現場だった。原発事故が起きたときに現場でどんなことが起きていたのか、国が人命を優先しているとは決して思えない。よくぞ制作し、放送してくれたと思う。原発について考える上で何よりもこれまでの事実を知ることが重要なので、これからも意欲と勇気ある報道を切望する。

（ＮＨＫ側）

ＥＴＶ特集「誰が命を救うのか」は、原発事故の後に福島に急きょ向かうことになった放射能医学総合研究所、広島、長崎の放射能を専門とする医師たちの７日間を、彼らが撮った映像や写真とＮＨＫが発掘したさまざまな資料を照らし合わせて、追体験しようというものだった。原発事故によって何が起きているのか情報が全くなく、態勢も整わない中で彼らが体験し、彼らが判断したことを積み重ね、当時何が起こったのかを克明に記録し、残すことが最大の使命と考えて制作した。８年が経過し、当時の話をしてくれる方も出てきて、新たな資料を発見できたことで実現した。

○　３月１０日(日)に再放送された、未来塾特別編「鴻上尚史と高校生の被災地のリアルと」(Ｅテレ 前 0:00～0:49)は作家・演出家の鴻上尚史さんが大船渡高校の演劇部の指導をする内容で、劇のテーマは津波だった。鴻上さんが高校生だからと妥協するのでなく、対話を通じて何を表現したいのか、どういう思いだったのか、何に戸惑っているのか、といった話をしっかりと引き出し、生徒自身が感じていることを演じれば相手に伝わると言っていたのが印象的だった。若い人たちが自分の中で被災したことをどう解釈して、発信するのかがこれから大事なのだろうと思った。こういう形で、震災を取り上げ続けるのも意義のあることだと感じた。

○　３月９日(土)のドラマ“女川　いのちの坂道”(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:00～10:59)を見た。１２歳で被災し母を亡くした主人公が大人になり、故郷と再び向き合う設定や、ドローンで撮影した映像は新鮮だった。８年ぶりに実家に戻った主人公の女性

が、石碑の除幕式の最後に、おばあちゃんを背負って階段を上り石碑のもとまでたどり着くことで、これまでのわだかまりを払拭（ふっしょく）した姿に涙が止まらなかった。震災で大切な人を亡くした悲しみは８年たっても変わらないこと、命をかけて人々の命を救ってくれた人たちが今も抱えている懸念や課題があると気づかせてくれる番組だった。

そのほかにも東日本大震災の関連番組とニュースを意識的に見たが、番組内で「これから津波の映像が流れます」というテロップが出ることに配慮を感じた。また、ピョンチャンオリンピック・パラリンピックの出場選手による「花は咲く～ピョンチャンバージョン～」は今までで一番連帯感があり、メッセージが伝わってきた。

○　「いば６」は茨城県域のニュースだが、３月は東日本大震災から８年ということで連日特集を組んでいた。岩手県の仮設住宅から東京に来た目の見えない女性の話、福島県から茨城県に避難している方の話、看護師の卵を育てる元看護師の教師の話、災害に備え準備をする企業の話という具合に多彩な特集内容で、それぞれがとても勉強になり、大事なことを伝えていると思った。とても大事なことなので、今後も震災から９年、１０年と継続してほしい。　　昨年１１月２１日（水）の「ニュースウオッチ９」で、大学病院の「無給医」の問題について取り上げていた。医師不足のなか現場の医師が大変であるということで、社会でさまざまな議論がされている時期でもあり、注目して見ていた。医師不足の問題は今年２月、３月にも取り上げているが、社会的にどう解決すべきかという大事な問題を継続的に報じているＮＨＫの姿勢に感心した。ニュース報道として取り上げるのもよいが、大事な問題なので例えば「ＮＨＫスペシャル」などの大型番組で取り上げてもよいと思う。

○　２月１５日(金)のドキュメント７２時間「冬の東京　たい焼きエレジー」を楽しく見た。塾の帰りに母親と子どもが必ず立ち寄り、たい焼きを１個ずつ食べることを習慣にしているというほのぼのとした場面がとてもよかった。先日、そのお店に立ち寄ったところすごい行列ができていたので、あの親子は食べられるだろうかと心配になった。いずれは沈静化するかもしれないが、放送の影響力について深く考えさせられる出来事だった。放送番組を放送することが結果、あるいは現実に影響を与えてしまうことを放送に携わる方は当たり前のこととして自覚していると思うが、さらに自覚を深めて放送を続けてほしい。今回の番組についても店の名前は出さなくてもよかったのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

放送することで取材先の方にどのような影響があるのかに

ついては取材する側も深く考えており、相手方ともよく話し合って番組を制作している。公共放送が全国的に伝えることの重みは取材チーム皆がしっかりと胸に刻んでいるつもりだ。

○　２月２１日(木)の「ニュースウオッチ９」で北海道の地震のニュースを取り上げていた。画面の左下に英語サイトの案内と地域の地図が交互に出ていたが、外国人にも情報を伝える姿勢は大変よかった。地図では震源地の厚真町と出ていたが、その地域を知らない人にとっては厚真町がどこにあるのか分からない。例えば札幌、小樽、函館などの有名な都市を近くに表示し、そこから何キロぐらいということを地図上に示せばどこで地震が起きたのかが分かりやすいのではないかという気がした。北海道のどこかで地震が起きたと聞くと、全く関係ない地域に住む北海道の方にもつい電話してしまうことがあると思う。みんなが知人や親戚の安否を確認しようと電話をかけると、回線がパンクしかねないが、震源地をもっと分かりやすく表示して放送をすれば、自粛する人が増えるようになるのではないか。

（ＮＨＫ側）

逆Ｌ字画面で、左隅に地図を表示したので、スペースが小さく厚真町のところだけに絞った地図を出し続けた。北海道全体の地図と厚真町に焦点を絞った地図を入れ替えるなど、視聴者により分かりやすい放送を心がけたい。

○　３月２日(土)の「ＮＨＫのど自慢チャンピオン大会２０１９」を見た。全体の印象として若い出場者が大変多かった。全部で１３名の代表のうち６名が１０代、２名が２０代という構成だった。若い人が出るのはよいことではあるが、一方で、年配の方が機会を逃したのではないかと気になった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫのど自慢チャンピオン大会」はチャンピオンになった人たちから出場者を決めるので、たまたま若い人たちが多かったのだと思う。

（ＮＨＫ側）

毎回行われる予選会にはさまざまな年齢の方にご参加頂いている。

○　３月７日(木)の世界は欲しいモノにあふれている「世界に一つだけの宝石を探す

旅　タイ」を見た。もともと好きな番組で、毎回見ているが、今回特にテーマが宝石ということで、多くのバイヤーや金型職人がいる宝石の町が身近なこともあり興味深く視聴した。世界にひとつだけの宝石を探す旅ということで、珍しいレアストーンとして、バイカラーやカラーチェンジの宝石などが取り上げられていた。バイヤーの人がどのようなところで買い付けをしているのかなど、現場がリアルに見られて楽しめた。特にタイの街なかで、まるでビー玉のように本物の宝石を売り買いしている様子には驚いた。また宝石の採掘現場の模様も初めて映像で見ることができ、きれいな宝石になるのだと思うと興味深かった。この番組のテーマになる商材や、取材するバイヤーの方は、どうやって選んでいるのかが気になった。

（ＮＨＫ側）

この番組は世界紀行番組ではあるが、バイヤーという超一流を探し求める目利きの人の目線を通して、モノの背景にある歴史や文化などを描きたいというのがコンセプトであり、そのコンセプトに合うかどうかという点を重視して取材対象者を選んでいる。

○　３月１日(金)のとちスペ「知ってる？　とちぎの婚活事情」を見た。栃木県は大手企業の工場や研究所があり、男性が多く、未婚率が高いと言われている。こうした問題提起や、顔を隠した女性による本音トークなども織り交ぜながら、ディレクターがおそらく問題意識をもって取り組まれたのだと思う。ディレクターが画面に出てきて、企画の意図などを説明すると親近感がわくのではないかと感じた。地方の事情をよく伝えている番組であった。

○　連続テレビ小説「まんぷく」を毎日楽しく見ているが、３月で終わってしまうと多くの人が喪失感をもつだろうと感じている。ＮＨＫの番組は多くの人たちに影響を与えていると思うので、これからもよい番組を制作していってほしい。今後の「連続テレビ小説」にも期待している。

○　連続テレビ小説「まんぷく」を毎朝楽しみに見ている。ドラマに出てくる「まんぷくラーメン」を見ていると、モチーフになっているラーメンを食べたくなる。料理番組ではないが、新しいタイプの食欲をそそる番組だと思った。

○　土曜ドラマ「みかづき」は俳優の高橋一生さんと永作博美さんの演技がとてもよかった。塾を通して、家族愛、ラブストーリーなどがさまざま盛り込まれており、大変楽しめた番組だった。

○　３月４日(月)からの「きょうの料理」は春キャベツを特集しており、３月６日(水)のとことん味わう！春キャベツ「焦がし焼きキャベツの肉玉あんかけ」ではきじまりゅうたさんが料理を教えていた。きじまさんの話にはよいヒントやコツがたくさんあり、さらに知りたいと思って書店でテキストを購入した。ＮＨＫが放送だけでなく書籍やテキストを多数出版していることもありがたいと感じた。

○　最近「ＮＨＫニュース・防災アプリ」を重宝して使っているが、秋ころから始まった「サクサク経済Ｑ＆Ａ」が、金融や経済に関する話題を取り上げておりとてもよい。テレビだけではなくアプリでもよいコンテンツを作っていると感心した。

（ＮＨＫ側）

注目ニュースのポイントをＱ＆Ａで解説する「サクサク経済Ｑ＆Ａ」は「ＮＨＫニュース・防災アプリ」だけでなく、「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」にも掲載している。

○　３月３日(日)のＢＳ１スペシャル「老いてなお　花となる　第二章～俳優・織本順吉９２歳～」を見た。自分がやりたくても体がついてこないという、老いのジレンマが伝わって来るよい番組だった。人は自分の役割、生きがいが糧なのだと改めて教えてもらった。

○　２月２５日(月)のクローズアップ現代＋「“辺野古沖埋め立て”県民投票の舞台裏～移設問題の行方は～」、３月４日(月)の「“フェイクニュース”が外交官の命を奪った」、３月６日(水)の「車いすの天才ホーキングの遺言」、３月７日(木)の「今も１０万か所以上　除染ごみがなくならない」を見た。辺野古県民投票の舞台裏。フェイクニュースによる駐日外交官の自殺。ＡＩについてのホーキング氏の示唆に富んだ遺言。除染ごみ問題など、今まさに知っておきたいことに切り込んでいく視点が、すばらしいと思った。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で、製薬会社、食品会社、一部新聞社など、１８社に青酸カリの粉末と脅迫文が相次いで送りつけられた事件で、郵便ポストに封筒を投かんするイメージ映像はやりすぎでないかというご指摘を受けた。１月３０日(水)の「ＮＨＫニュース７」で使ったイメージ映像のことだと思う。製薬会社、食品会社などの映像は特定の恐れがあるため使用せ

ず、神田郵便局の消印だったという新しい情報を視聴者に分かりやすく伝えようということで封筒を投函するというイメージ映像を使用した。「イメージ映像」という字幕を付け、青みがかった映像に加工して伝えたが、今後は視聴者に与える印象を十分に考慮し、いっそう配慮した形で取材、制作を行いたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について報告があった。引き続き、「２０１９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、３月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
副委員長　奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　弘子（アサヤ食品(株)代表取締役社長）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜「平成３０年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案)」について-諮問->

○　それぞれの地域の特性に根ざした編集方針になっていたと思うが、ローカルだけではなく、関東広域での放送も心がけていただきたい。スポーツに関連して、女子サッカーについてもぜひ取り上げてほしい。女子サッカーはワールドカップで優勝するなど、世界レベルであるにも関わらず、国内の女子サッカーについて放送であまり取り上げられていないと感じている。公共放送としてＮＨＫ各局が女子サッ

カーを取り上げることで、幅広い活性化に繋げてほしい。

（ＮＨＫ側）

埼玉県域のＦＭの番組「日刊！さいたま～ず」では毎週金曜日にスポーツの話題をお伝えしている。今後もぜひ紹介し続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

長野県でも女子サッカーの長野パルセイロ・レディースは大変注目されており、企画などで取り上げている。引き続き県民の期待に応えていきたい。

○　「各局の重点事項」には地域の課題が掲載されており、地域放送局は、地域の課題解決のための番組を作ることも大切な役割の１つではないかと思う。しかし、地域放送局が番組を放送できる時間が少ないのでないかと感じた。地域の魅力をＰＲするためには、県民に伝えるだけでなく、地方から全国に発信する番組がもっと増えないと地域の課題を解決するところまでいかない気がする。そういった番組が増えると、結果的により多彩な情報が発信できるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

総合テレビやＢＳ１などには地域放送局が制作した番組を放送する枠がある。また、他の波でも地域発の話題を全国放送する番組がある。また、テレビだけでなくラジオやインターネットで地域の魅力をどう発信するのかについても併せて考えることが重要だと考えている。

○　関東甲信越地方全体の「基本方針」については、多様な課題に取り組むことが記載され、全体として各地域放送局がより深く視聴者と向き合い、視聴者に寄り添う姿勢が出ている編集計画になっていると思った。2018 年度をどう総括して、2019 年度の方針を作成したのかという説明があるとなお分かりやすいのではないか。また、例えば災害時などに地域のＮＨＫ以外の放送局との連携をどう考えているのかについては気になった。

（ＮＨＫ側）

今年度新潟局では、ともにテレビ放送開始から６０年を迎えた地元放送局とコラボ番組を制作した。それぞれのキャス

ターが相互に出演し、６０年間撮りためてきた映像アーカイブスを融通し合い、新潟の６０年を映像で振り返るという特集番組も放送した。また、災害時には港や道路に独自のロボットカメラを設置しているケーブルテレビと連携し、ＮＨＫだけではカバーしきれない地域の被害状況などを伝える際に協力していただいている。地域の放送局と協力し、県民にきめ細かい情報を提供したいと考えている。

○　東京オリンピック・パラリンピック関連の報道に重点を置くのは当然だが、福島県など被災地の復興も重要な課題である。建設現場でも被災地が取り残されているという実情があると聞くが、開発の負の側面よりも取り残された人たちの気持ちをきちんとすくい取る報道を続けてほしい。原発関連の問題についても賛成、反対ということだけではなく、事実を伝え続けてほしい。

○　「基本方針」には「首都直下地震に備えて、取材・制作体制の整備を着実に進めます」とあり、各放送局がおおむねひも付けされている。さいたま放送局は報道別館にサテライト機能があり、ＯＢ友の会などを使い、いろいろな訓練をしているそうだが、ほかの局は被災したときにどうするのかという視点が抜けているのではないかと思う。実際は考えているのだろうが、文言からは読み取れなかった。

（ＮＨＫ側）

　各放送局とも災害発生に備えていろいろな訓練を続けている。放送局から中継するだけでなく、実際に被害の起きている現場から映像を送ることができるスマートフォン中継も訓練している。放送センターの放送機能が停止することを想定した訓練も先日実施しており、文言の中にはないが、重要な課題だと認識している。災害への備えや訓練をしっかりと続けていきたいと考えている。

○　各放送局の編集計画についてはよく理解できた。各放送局はいずれもオリンピックに注目しさまざま発信していくのはもちろんだが、例えば前回の東京オリンピックのとき、東京を訪れる外国の人たちにも分かりやすいようにピクトグラムを使うことで、オリンピックが大成功に終わるとともに日本のおもてなしの心を伝えることができたと言われている。そういうすばらしい話を国内のどれだけの人が知っているのだろうか。選手や競技の話題はもちろんだが、オリンピックにまつわるさまざまな話、あまり表に出てこない感動秘話などに日本のおもてなし精神があらわれ

ていることも放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

東京オリンピック・パラリンピックについて、競技中継だけがうまくいけばいいとは決して思っていない。オリンピック・パラリンピックはあくまでもきっかけで、その後につなげていくことが大事だと考えている。共生社会を含めて、「２０１９年度国内放送番組編集の基本計画」にも記載させていただいているが、あらゆる波、放送を通じて私たちも伝えていきたい。

○　毎年、編集計画の説明を受けて、年を経て積み上がってきていることと、そうではないことがあると感じている。積み上がっていることは防災・減災である。千葉局と県内ＦＭ放送各局が、災害時の連携を見据えたプロジェクト「ＦＭラジオ防災プロジェクトちば」を設立したことや、各民放ＦＭ局と個別に「非常災害時のニュース利用に関する覚書」を締結したことは大変すばらしいと思っている。一方、県域向けテレビ放送がないということもあるのだろうが、都心部もある一方で、他の地方と同様、農村、漁村もある千葉県の一体感の形成、地域づくりについては、千葉局が持っている役割はまだ十分に果たしきれていないと感じている。都心と一緒になっていく部分と、そうではない部分がある。ぜひ留意していただきたい。

（ＮＨＫ側）

課題としては認識している。編集計画には「都市と地方の課題を併せ持つ千葉」をキーワードとして記載しているが、指摘は重く受け止め、来年度も取り組んでいきたい。

○　ＮＨＫの放送にはきちんとした基本方針があり、各放送局がそれにひも付いてそれぞれの地域の特徴も生かした上で具体化しているところがすばらしいと思った。基本がきちんとしているからこそぶれないのであり、老若男女がＮＨＫの番組を安心して見られることにつながっていると思う。きちんとしたネットワークのあるＮＨＫが地域の課題を取り上げる際、一つの課題に対して各地でどのように取り組んでいるのかをまとめた番組を作ってもよいのではないか。例えば地方都市の主要な駅や空港から目的地までの二次交通が課題になっているが、各地域がどのように取り組んでいるのかを全国的に取り上げる番組があると地方に住んでいる者にとって大変ありがたい。きちんとしたぶれないネットワークを持つＮＨＫには地方の課題を全国につないでいただきたい。

（ＮＨＫ側）

まだ数は少ないが、いろいろな取り組みをやっている。「明日へ　つなげよう　課題解決ドキュメント　ふるさとグングン！」は地域でやっている良い取り組みを全国に伝える番組だが、地域発の番組はこれまでにも放送してきた。さまざまな地域で同じような問題、課題があるというのは重要な指摘で、地域の問題を広域の課題と考えてどう結びつけるかはこれからも考えていきたい。

○　2019 年度は東京オリンピック・パラリンピックの準備期間で、気運を盛り上げるという話が各局からあったが、東京オリンピック・パラリンピックのレガシーをどう残すのかが重要だろうと思う。東京オリンピック・パラリンピックを取り上げる際には、単にスポーツということではなく、教育、福祉、共生社会、まちづくりなど、いろいろな話題につながる。さまざまな世代が見ることで今までとは違った視点にも気がつくような番組を作っていただきたい。広域連携の話もあったが、首都圏としての話題も取り上げつつ、横浜局として独自性を発揮できる体制も合わせて考えてほしい。

○　ＮＨＫには民放との関係性も考慮しつつ、インターネットにも引き続き力を入れてやってほしい。

（ＮＨＫ側）

地域放送サービスについては、限られた経営資源の中でできるだけのことをしようと取り組んでいる。首都圏の千葉局、横浜局、さいたま局の３局については、その地域の皆さんにとってどういう放送サービスをしたらよいのか引き続き考えていきたい。インターネットサービスについては放送の補完としての位置づけではあるが、公共放送から公共メディアへと取り組む中で、ニュース、番組をいつでもどこでもすぐに見ていただけるような環境をつくることも考えていきたい。

○　諮問いただいた「２０１９年度関東甲信越地方向け地域放送番組編集計画（案）」について、委員の皆さまの意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とする答申をしたいと思うが、異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

原案を可とする答申をいただき、ありがたく思う。いただいたご指摘とご意見を地域放送番組の編集に生かしていく。今後もよろしくお願いしたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２０日(日)の明日へ　つなげよう　未来塾「平成の最後に考えるぼくたちの憲法ってなんだろう？」を見た。若い人たちが憲法を考えるために自分自身で「憲法前文」を作るという企画だった。講師が作家の高橋源一郎さんで、いろいろな学部の大学生４人が岩手県大槌町吉里地区を訪ねて、被災した人から東日本大震災にどう対応したかを聞いていた。その経過もおもしろく、若者が自分で作る「憲法前文」も興味深いものだった。時間の都合で４人のうちの２人しか取り上げられなかったが、番組視聴後に番組ホームページに掲載されているのを見た。インターネットを見られない人もいるので、少しでも番組内で紹介できれば良かったと思う。新しいことを若者たちを交えて伝える興味深い番組だった。実際に取り組んだことを放送することでいろいろなヒントにつながると思うので、このような番組を今後も作っていただきたい。

○　１月２２日(火)の「ニュースウオッチ９」を見た。画面右下に二次元バーコードが出てきて、「ネット広告の闇」の特設サイトが案内され、その後の「クローズアップ現代＋」の内容が見られるようになっていた。また、翌日は九州大学の研究者死亡のニュースがあり、そこで案内された二次元バーコードは、「ＮＨＫ　ＮＥＷＳＷＥＢ」のＷＥＢ特集に遷移する仕組みになっていた。１月３１日(木)の「ＮＨＫニュース７」ではＮＨＫニュース・防災アプリにつながるようなものもあった。ニュース以外にも、例えば「あさイチ」などの情報番組でも、料理のレシピや、さまざまな情報に二次元バーコードでより簡単にアクセスできると視聴者にとって非常に便利ではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

二次元バーコードを出す基準は特にないが、ニュースや番

組を見て、視聴者が更に詳しく知りたい、もっと深く情報が欲しいと思ったときにホームページにコンテンツがある場合は誘導して見てもらうようにしている。今後もこういったサービスをできるだけ多く展開したいと考えている。

○　１月３０日(水)の「ニュース７」などで取り上げられた、青酸カリと見られる粉末と脅迫文が製薬会社や新聞社などに送りつけられたというニュースの中で、封筒の消印がすべて東京の同じ郵便局のものであったことを伝えるリポートがあった。その中で無地の封筒をポストの中に投函したように見えるイメージ映像が流れた。実際に投函したかどうかはっきりとは分からないが、そういうものを見て、模倣犯、愉快犯を誘発しないかと危惧した。演出としてやや過剰だったのでないか。

（ＮＨＫ側）　本当に投函したかどうかも含め、調べてからお答えする。

○　千葉県野田市の女児虐待事件について、２月８日(金)の首都圏情報　ネタどり！「なぜ助けられなかったのか　検証・千葉女児虐待事件」が急きょ放送された。丁寧な取材の積み重ねによって、その時点で分かっていることをしっかり伝えた番組だと思った。この事件に関しては今後も掘り下げが必要だ。子育てをしている方の中には、自分も周りから子どもを虐待していると見られていないだろうか、などと心配になる人もいるかもしれない。虐待防止の取り組みや、虐待された経験を乗り越えて同じような境遇の子どもたちをサポートしている人たちの取り組みを紹介するなど、もっと前向きな報道もあわせて続けてほしい。

○　千葉県野田市の女児虐待事件が連日報道されている。このニュースを繰り返し見るのが辛いという視聴者がいることを放送を出している側の皆さんにも受け止めてもらいたい。

○　２月１３日(水)の探検バクモン「山中教授とめぐる京都大学　ｉＰＳ細胞研究所」を見た。ｉＰＳ細胞とは何か、どうやって作るのか、医学への応用の現状などが分かりやすく紹介されていた。基礎研究がとても重要であり、研究の成果を実社会に役立てたいという山中教授の静かな覚悟を感じる番組でとてもよかった。ｉＰＳ細胞は何かという説明では図がとても分かりやすく、ｉＰＳ細胞を作るところでは太田光さんが実演したことが、どのようなことばで説明するよりも分かりやすかった。研究者が実際に苦労している姿が一般の人たちに伝わり、山中教授の熱意や覚悟が一貫して感じられるよい番組だった。

○　２月９日(土)のＢＳ１スペシャル「ボルトとダシャ　マンホールチルドレン２０年の軌跡」（ＢＳ１　後7:00～7:50、8:00～8:49)を見た。かつて家族でボルトとダシャの番組を見て衝撃を受けたことを思い出すとともに、２人の現状を知ることができてうれしく思った。今回この番組を見て、ボルトとダシャが厳しい境遇を乗り越えて、切ないぐらいに必死で頑張っている姿に心から感動した。二度の挫折でアルコール依存症になってしまったボルトを救った牧師に本当に感謝したくなった。また、あわせて２０年間に渡って２人を追い続けた番組スタッフにも大変感心した。

（ＮＨＫ側）

この番組は外部プロダクションのディレクターがずっとこだわって取材を続けてきたもので、今回も２０年になるタイミングでもう一度、彼らの今を描きたいという提案を受けて制作したものだ。ディレクターが彼らの人生を見つめ続けてきた、その思いが伝わったのだと思う。意見はぜひ制作担当者に伝えたい。

○　連続テレビ小説「まんぷく」を毎日見て感動している。先日ハワイに滞在した際にも、現地で「まんぷく」を見ることができて大変良かった。帰りの飛行機では、映画などが見られる機内サービスの中で、「チコちゃんに叱られる！」などのＮＨＫの番組も見ることができた。提供されている番組がどのように選ばれているのか気になった。

○　ＢＳ４Ｋ・ＢＳ８Ｋの普及について、その機能がいかに優れているかを宣伝するだけではなく、優れたコンテンツを見て、４Ｋ・８Ｋらしい映像や音声だと感じてもらうことが大事ではないか。ＳＮＳなどを活用して、コンテンツを愛する人たちから普及につなげてほしい。

○　最近さまざま展開されているインターネットでの動画配信サービスの中でＮＨＫオンデマンドをもっと気軽に見られるようになると、より多くの人に見てもらえるのではないか。

（ＮＨＫ側）

前回、運命のクロスヒストリー「徹底捜査　忠臣蔵」について頂いた質問にお答えする。番組の中で取り上げた吉良の家臣たちがなぜ助太刀に出てこられなかったのか、赤穂浪士を取り調べたときの仙石伯耆守久尚の衣装がかみしもなのは

本当なのか、吉良上野介の息子の左兵衛が事情聴取を受けているときの衣装が血まみれだったのは本当なのか、これらについてご質問頂いた。それぞれについて番組では、できるだけ史実に忠実に制作している。資料があるものは資料にのっとって取り上げ、資料がないものは専門家の助言に基づき、状況と矛盾しない可能性の高い解釈を採用して、番組を制作している。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１９年１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１８日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、前橋放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、ぐんまスペシャル「そうだ、湯治に行こう　極上！温泉王国ぐんま」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
副委員長　奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　弘子（アサヤ食品(株)代表取締役社長）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜ぐんまスペシャル「そうだ、湯治に行こう　極上！温泉王国ぐんま」
（総合　６月２９日(土)放送）について＞

○　番組を見て、群馬県には一軒宿の温泉がたくさんあることを初めて知った。沢渡温泉の「一浴玉の肌」というキャッチフレーズは温泉の魅力をひと言で表しておりすばらしいと感じた。温泉、食事、アクティビティーを組み合わせた１泊２日の「ごほうび湯治」が四万温泉全体を活性化していると感じるとともに、番組で紹介されたおかみの田村早代さんが周囲を巻き込んで開発した、ヘルシーで豪華な湯治懐石のエピソードから、物事をやるには１人の熱い思いがないとできないのでないかと思った。今回は四万温泉だったが、ほかの温泉地についても取り上げていってほし

い。なお、四万温泉の「ごほうび湯治」に２人の女性が子どもを連れて参加していたが、母親がヨガをやっているときに子どもをどこに預けたのかが気になった。子どもを持つ若い母親が知りたい情報をもう少し丁寧に紹介すればよりよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

「ごほうび湯治」のヨガは母親の近くに赤ちゃんがいる形でやっていたと聞いている。今後、同じような取り組みを番組で紹介する際は、母親たちが安心して参加できるように配慮していきたい。

○　四万温泉を初めて知ったが、１泊２日でこのようなよい企画をやっているのだと番組を通して知ることができた。夕方の４時から夜、そして翌朝にかけてを軸に、少し足を延ばしたところまで紹介されている構成も見やすかった。ヨガのあとに入浴すると、相乗効果でよりリラックスできるというのは女性にとっては興味深い情報で、これだけでも行ってみたくなった。最も興味を持ったのが沢渡温泉の共同浴場のところで、地元の人と観光客が温泉に入りながら会話をしたり、気に入って遠方から何回も来られる方がいるところがよかった。一点、入場料は毎日入る地元の人も同じなのかどうかが気になった。また、少し音楽が過剰だったのではないかと思った。テロップも多く画面がにぎやかで、一見すると見やすく長さを感じずに見られるのだが、せっかくすばらしい自然の中で滝の音が背景にあるのに、音楽が流れ続けていて滝の音がよく聞こえない場面があった。また地元の人のインタビューのシーンでも音楽が流れ続けていた。音楽を使うのであれば、ところどころでは逆になくしたほうが、互いに生かしあえるのではないか。

（ＮＨＫ側）

ＢＧＭについては、より若い人に温泉を親しみやすく見てほしいという思いもあり、今回のような形になった。意見は今後の番組制作に生かしたい。

○　群馬県にはさまざまな温泉があることが伝わったが、四万温泉の「ごほうび湯治」が軸になるはずが、ところどころで他の温泉の話題も紹介されたことで散漫な印象を受けた。また毎回テロップを入れるのではなく、メインのところだけに入れたほうがかえって伝わりやすいのではないか。女性をターゲットにした四万温泉のおかみたちの取り組みは実にすばらしかった。ただ、ヨガの間のお子さんのケアについてや、女性がアクセサリーをしたまま入浴されていたところはちょっと気になった。

全体として歴史の深みも感じさせるよい内容で、新たにこの地域に関心を持って実際に足を運ぶ人も増えるのではないか。

○　「そうだ、湯治へ行こう」というタイトルから鉄道会社のＣＭを連想したが、番組を見るとひと工夫があってよかった。入浴法、効能などの温泉についての深掘りもあり、群馬県民に親しまれている上毛かるたを挿入するなど、群馬ならではの番組づくりだったと思う。温泉の情報はもとより、旅館や共同浴場も紹介されており、「プロジェクトＸ」のような演出も楽しめた。グルメ、アクティビティーもあり、よくある温泉番組に比べて変化があったと思うので、ほかの温泉地もこの手法で取り上げられるのでないかと期待している。番組は群馬県域放送で、再放送もあったそうだが、関東広域で放送してもよかったと思われる。

（ＮＨＫ側）

この番組は「首都圏情報　ネタドリ！」というタイトルで東京都、千葉県、神奈川県、埼玉県内向けに同じ日の午後７時３０分から放送したほか、翌日の午前１０時５５分からは栃木県、茨木県も含む１都６県で放送した。

○　全体的にテンポよくいろいろな温泉が紹介されていて楽しく視聴したが、いくつか気になった点がある。四万温泉の「ごほうび湯治」をベースに番組を構成したと思うが、「ごほうび湯治」の部分がとても多く、もう少し現代の新しい湯治事情の部分を紹介した方がよかったのではないか。また、素朴な疑問として、ほかにも有名な温泉地がある中で、なぜ今回の温泉が選ばれたのか気になった。さらに、一軒宿の温泉が源泉を守っていることを説明するフリップのところで、「首都圏温泉」という表記はやや意味が分かりにくかった。番組では一軒宿の温泉だけが源泉を守っているように見えたが、実際には分湯などさまざまな守り方があるはずなので、紹介の仕方に工夫がほしかった。

○　今回の番組を見て、今まで行ったところは限られた数か所でしかないことが分かって楽しみが増えた。四万温泉のヨガ、ノルディックウォーキング、健康によい食事などはよく工夫されており、その努力が取り上げられたことはよかったと思う。温泉ライターの小暮淳さんが勧めるぬる湯の川古温泉や共同浴場も行ってみたいと思った。温泉マーク、温泉まんじゅうは群馬が発祥の地であることや上毛かるたなどが丁寧に紹介されており、素直に見ることができた。見るつもりのなかった人が何げなく見ても好感を持てたのでないか。群馬県の人たちが見たときに地元の魅力を再発見できる番組だと思った。

○　番組の中に出てきた御湯畑博士というキャラクターがユニークでおもしろかった。「プロジェクトＸ」のような開発秘話が盛り込まれたのも効果的だったと思う。中でも料理長が「懐石は手間の仕事」という名言を言っており、よい勉強になった。しかし、「プロジェクトＳ」のコーナー名の末尾が聞き取れず、文字も読みにくかったのは残念だった。有名な草津温泉、伊香保温泉だけでなく、川古温泉、沢渡温泉なども取り上げていたことに好感を持った。温泉ライターの小暮さんは人柄がよく、自然に必要な情報を紹介しており、適任だと感じた。一方で、番組の焦点がどこにあるのかがよく分からないとも感じた。３０分という短い情報番組の場合は、プレゼンテーションの手法が使えるのでないかと思う。例えば「テーマ１．ヘルスツーリズム」「テーマ２．一軒宿の温泉」「テーマ３．共同浴場での交流」などのテーマを設けるなど、もう少し工夫があるとなおよかった。

○　温泉というと昔ながらのイメージが強い中で、それを払拭（ふっしょく）するような新しい温泉の楽しみ方が紹介されていた。ぐんま大使の井森美幸さんのナレーションはとても自然で落ち着いており、御湯畑博士とのやりとりもよかった。「ごほうび湯治」とはどういうものなのか関心を持って視聴したが、番組のタッチや出演された方を含めて、女性向けの印象を持った。紹介された温泉は赤ちゃんと一緒に入れることが魅力的だと思う一方で、母親がヨガをしている間に子どもがどうしているのかについても取り上げてもらえれば、なおよかったのではないか。メインの四万温泉の話題が番組を通して続く中に、豆知識として、入浴法や湯治の歴史、上毛かるたの話題などさまざまな情報が盛り込まれており、全体として温泉のイメージを変えていく方向性は分かったが、やや盛り込みすぎた印象を受けた。群馬県内の温泉の約半分が一軒宿の温泉だということや、さまざまな温泉の紹介もあり、最初は女性向けの印象だったが、男性にとっても魅力ある内容になっていたと思った。

○　若い人はなじみがない湯治をテーマにした番組であったが、昔を懐かしく思い出しながら視聴した。３０分では難しいかもしれないが、ぐんま大使の井森さんを登場させるのであれば、単なるナレーターではなく、群馬県としてどうやって若い人たちや増加する外国人旅行者を呼び込むのか、といったことを取材して紹介するほうがふさわしかったのではないか。また、「プロジェクトＳ」のパートについては、インパクトはあったがＢＧＭが気になり内容に集中できなかったのが残念だった。

○　四万温泉には高級なイメージがあったが番組を見て四万温泉がどんなところで、どんな魅力があるのか分かった。四万温泉の新しい湯治を縦糸に、そこでのアク

ティビティー、他の温泉地を横糸にし、組み上げる構成がテンポよい番組となっていた。群馬県は東京都や埼玉県からも近く、そういう場所に温泉王国があることを強くアピールできていた。群馬の温泉地すべてを制覇したという温泉ライターの小暮さんのキャラクターが親しみやすく、心から群馬の温泉を愛してやまない感じが伝わってきた。放送が６月２９日(金)ということで、夏休みの計画を立てようと思っている視聴者にも参考になったと思う。冒頭でカヌー、カヤックをこいでいるシーンがあり、番組の中で紹介されるかと思ったが、特に何も触れられなかったことが気になった。四万温泉に「ごほうび湯治」に来た母親たちがヨガをしている間、赤ちゃんをどうしているのか疑問に思ったので、面倒をみてくれる方がいるのかどうか、情報が欲しかった。源泉蒸し風呂のパートで女性がネックレスを着用したままだったのも気になった。ナレーターの方のカラッとした明るいキャラクターは好きだが、ナレーションにやや聞き取りにくいところがあったのは残念だった。

＜放送番組一般について＞

○　１２月２８日(金)のＮＨＫスペシャル「女７人おひとりさま　みんなで一緒に暮らしたら」(総合 後 10:00～10:45)を見た。最近シェアハウスなどが話題になっているが、この番組を見て同じマンションにそれぞれ住んで、ときどき会うという形もあるのだと感じさせられた。日本は男女の平均寿命を比較すると女性のほうが長生きなので、大きな家に１人で住むよりは、番組で紹介されたように何かあったときのためにお互いに鍵を渡しているような暮らし方も実験的で興味深かった。

○　１月１３日(日)のＮＨＫスペシャル　東京ミラクル　第１集「美食の街　受け継がれる“築地の魂”」を見た。ドキュメンタリーとドラマで、歴史を深掘りしていくという趣旨のシリーズのようだが、その初回ということで興味深く見た。「築地が料理人を作る、育てる」、「利益よりも信頼」、「食べる人の満足を何よりも大切にする」という築地魂の３つの柱が番組を通して貫かれていた。築地が戦争直後から復興していく様子が映像とともに説得力をもって描かれており、ＮＨＫならではの番組だった。ナビゲーターの佐藤健さんやドラマパートの“じいちゃん”のキャラクターも分かりやすく安心して見ることができた。当時の貧しい人々や東京の様子をはじめ、外食産業がどのように復興してきたのかが当事者の証言などを通して伝わってきた。まだ移転したばかりなので難しいとは思うが、2018 年１０月以降、豊洲に移ってからの内容がややもの足りない印象があった。

（ＮＨＫ側）

2020年に向け、世界から東京が注目される中で、外国人が東京に驚き、ミラクルだと思うことを改めて深掘りしてみると日本人にとっても新たな驚き、気づきがあるのではないかということで「東京ミラクル」というシリーズを立ち上げた。日本には「美食の街」がいくつもあり、築地だけで語れるものではないが、今回は歴史的な背景を含めて築地をひもとく形にした。豊洲に移転したあとはあまり時間がたっていないこともあり、やや物足りなさを感じた方もいたかもしれないが、指摘は今後のシリーズに生かしていきたい。

○　１２月３０日(日)の運命のクロスヒストリー「徹底捜査　忠臣蔵」(総合 後9:00～9:59)を見た。刑事ドラマのように物的証拠、状況証拠などを積み重ねていく手法はほかの歴史番組と異なり、赤穂側だけでなく吉良側からも描くという演出は、ＮＨＫの歴史番組としては新鮮だった。科学的な実験もあって堅苦しい歴史番組にならず、エンターテインメントとしても楽しめたが、こうした手法はＢＳの歴史番組にもあり、やや既視感もあるので、今後さらに工夫してほしい。

○　運命のクロスヒストリー「徹底捜査　忠臣蔵」を見た。吉良邸の見取り図などから詳しく考察し、赤穂浪士の鎖かたびらなど万全の装束、夜間視界が利かない中、十文字槍を使って、１人に対して３人で前後から攻める戦法が有利だったことなどを紹介しており、大変画期的な内容だった。また吉良側からの視点も、これまでにない分析だったと感じた。ただ時代考証として３つの疑問が感じられた。吉良邸の長屋にいた家臣150人のうち100人は雨戸が開かないようにされ閉じ込められていたそうだが、数時間にわたって本当に出られなかったのか。また討ち入り後、大石内蔵助以下の赤穂浪士たちが自首したときに、大目付・仙石伯耆守がかみしもをつけていたとのことだが、わざわざ自首してきた相手にかみしもをつけていたのか、さらには上野介の息子の吉良左兵衛の取調べの場面で、彼の姿が血のついた寝巻き姿だった。本当にその日に着替える時間もなく取り調べが行われたのだろうか。

（ＮＨＫ側）

質問については調べて次回お答えする。

○　１２月３１日(月)の「第６９回ＮＨＫ紅白歌合戦」について、今回は家族全員で最後まで盛り上がって見ることができた。Ｅテレをはじめ、さまざまな番組のキャラクターが出演するなど、いろいろな世代が楽しめる番組になっていた。歌合戦な

のに、バラエティーの要素が強すぎるのでないかといった意見もあるかもしれないが、年末にいろいろな世代が一緒に見て楽しめる点においては、大きな成果があったのではないか。ただ、司会の４人の役割分担など課題を感じさせる点もあった。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」を生放送で見た知人たちが今年の紅白歌合戦は史上最高だったと盛り上がっていた。いきものがかりの『じょいふる』の振り付けがよかった」「椎名林檎と宮本浩次のコラボがよかった」「米津玄師がよかった」など、テレビを見ながら次々と盛り上がっていたようだ。放送から２週間たった今も録画視聴して振り返って一緒に盛り上がっており、幅広い世代がこれだけ盛り上がる番組はほかにないと改めて思わされた。

○　「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、大勢の出演者が舞台裏で見事に入れ代わっていたのだろうと想像しながら見た。ただ、１人の歌手に 100 人以上のダンサーが出演する演出では、じっくり落ち着いて歌を聴くことができず残念だった。

○　１月１２日(土)の土曜ドラマスペシャル「ベトナムのひかり～ボクが無償医療を始めた理由～」(総合　後 9:00～10:13)を見た。月の半分は日本でフリーの眼科医として働き、残りの半分はベトナムで無償医療を行う大阪出身の医師の実話に基づいたドラマだった。昨年、ベトナムとの外交関係樹立４５周年を迎え、出入国の管理法も改正されたが、今後増えてくるであろう外国人に対する意識の持ち方について、考えさせられる内容だった。「人は人を助けるようにできている」というセリフが胸に残り、ことばや文化、習慣などの違いを超えて、お互いに助け合うことの大切さが伝わるよい番組だった。

○　土曜ドラマスペシャル「ベトナムのひかり～ボクが無償医療を始めた理由～」は大変勇気をもらえるドラマだった。「人は人を助けるようにできている」ということばや、ベトナムと日本を行き来しながら１５年間で１万 5,000 人を失明から救った眼科医の実話は「連続テレビ小説」にもなりうると思った。主人公がホームレスを支えた父親と同じ道を歩んでいると振り返る映像は涙なしに見ることができなかった。

○　ＳＮＳなどが発達したことで自分の興味のある情報だけに偏ってしまい、人々が自分と違う意見を受け入れにくくなっていると感じている。そういう中で、テレビには世の中にいろいろな思いの人がいるということを伝える役割があると思う。１１月４日(日)の明日へ　つなげよう　未来塾「池上彰エネルギー街道をゆく！Ｆｕｋｕｓｈｉｍａから考える“ニッポンの未来”」でも、池上さんが６人の大学生た

ちと被災地を訪ねていたが、人々が抱えているさまざまな思いが、現地に行くことで浮かび上がり、現地の人と交流する様がよく描かれていた。一つのテーマについて、政治や福祉、経済、国際関係などいろいろな分野の専門家がそれぞれの立場から意見を出し合い、仮に答えが出なくても、いろいろな考え方があることを伝えられる番組ができないものだろうかと改めて感じた。

（ＮＨＫ側）

ＳＮＳなどで偏った意見が拡散してしまうことを取り上げた番組はこれまでも放送してきた。「明日へ　つなげよう」の「復興サポート」というシリーズでは、一つのテーマで専門家たちが語り合うこともある。ご意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１２月１６日(日)の目撃！にっぽん「左手がつむぐ希望のメロディー」を見た。番組では「第１回　ウィトゲンシュタイン記念　左手のピアノコンクール」を取り上げていた。戦争で右手をなくしたような人のための左手のピアノ曲が古くからあることは知っていたが、プロとアマチュアが垣根を越えて集まる類例のないコンクールですばらしかった。次回以降も継続して取り上げてほしいコンクールだと思った。

○　１２月２５日(火)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の特集「師走の風景　横浜　街かどピアノ」ではピアノを弾きに来る人たちが魅力的で見ていてほのぼのとした気持ちにさせられた。

○　１２月２７日(木)の「ほっとぐんま６４０」の「万引きをやめられない“窃盗症”治療の現場」では、万引き依存症の治療を推進する、全国でも数少ない病院の取り組みを知ることができた。

○　年末の忙しい生活実態の中で、１２月３０日(日)の大河ドラマ「西郷どん」総集編　第一章「薩摩」、第二章「再生」、第三章「革命」、第四章「天命」(総合 後 1:05～2:05、2:05～2:55、3:05～4:25、4:25～5:35)を見た。内容は間違いなくおもしろかったが、１２月３０日の午後帯に長時間テレビ番組を見続けるのは、やや難しいとも感じた。

○　１２月３１日(月)の「ゆく年くる年」(総合 後 11:45～１月１日(火)前 0:15)を見た。この番組を毎年見ることで心を落ち着かせ、次の年を迎えようと気持ちを切

り替えている。今回は特に草津からの中継を楽しみにしていた。１月に草津白根山が噴火してから草津の人たちは闘いの日々だったと想像するが、いつも頑張ってという思いだった。地元の人たちが光泉寺に参拝する姿を見て、2019 年は本当によい年になりますようにと願った。白根山が落ち着いている今、ＮＨＫが地元の人たちの声を番組で取り上げれば、「白根山は大丈夫だから草津へ行こう」と考える視聴者が増えて地域の活性化につながるのではないかと思った。

○　１月６日(日)の小さな旅「大地の恵み　あるがままに～栃木県　那須町～」では、自分も訪れたことがある鹿の湯のほか、冬でも放牧している乳牛の様子や家族経営している温泉宿が描かれておりよかった。

○　１月１８日(金)の「あさイチ」に村木厚子さんが出演していた。瀬戸内寂聴さんから、社会を動かす、社会にインパクトを与えるという点ではテレビは大事だと言われて出演を決めたと話していたが、村木さん自身もテレビの影響力を認めた上で、出演したのではないかと思った。

○　１２月２８日(金)のドキュランドへ　ようこそ！「タイタニック　新たな真実」を見た。サブタイトルどおり、タイタニックの沈没の原因となる新たな真実が判明したことに大きな感銘を受けた。タイタニックの研究者が、船体の写真に黒い影が写っていることを発見したことから、タイタニックが 1912 年にサウザンプトンを出港する前に石炭倉庫から出火しており、これが沈没の大きな原因ではないかと解き明かしていた。タイタニック沈没事故から 100 年以上がたった今、真相に迫ったすばらしい番組だった。

○　１月１日(火)のＥテレ放送開始６０年！「Ｅうた♪ココロの大冒険」(Ｅテレ 前 9:00～10:10)を見た。豪華な俳優と歌手が出演して、特に寺田心くん、清野菜名さんなどが好演していた。Ｅテレの過去の名曲をただ羅列するということではなく、ドラマ部分もストーリーがよく練られており、歌とドラマが関連付けられているすばらしい番組だった。

○　１月１日(火)の香川照之の昆虫すごいぜ！「お正月スペシャル　カマキリ先生☆冬の森で初暴れ」(Ｅテレ 後 6:00～6:44)を見た。香川さんとスタッフが番組を楽しんで作っていることが画面から伝わってきて、視聴者もその雰囲気を共有できるすばらしい番組だと感じた。一つの分野に情熱を持った芸能人を番組に起用するのはよいと思う。「香川照之の昆虫すごいぜ！」だけでなく「○○の○○すごいぜ！」のようなフォーマットがあってもよいのでないかと思った。

○　１月１日(火)の先人たちの底力　知恵泉「大新年会“改元”～いろいろあったね！歴代元号～」（Ｅテレ 後 10:00～10:59)を見た。過去には自然災害が発生すると元号を変えていたことや、「大化」からすべての元号を平均すると４～５年に１回の頻度で元号が変わっていたことなど、長い歴史の中でのことしの改元を位置づけており、興味深かった。ただ、今の３代目の店主と初代の店主とのやりとりは必要だったのか疑問に思った。

○　１２月２３日(日)の行くぜ！パラリンピック「ブラインドサッカー」（ＢＳ１ 後 7:00～7:49)を見た。これまで全く知らないスポーツだったが、番組を見てオリンピックだけでなく、パラリンピックにも注目しようと感じた。今後もパラリンピックを継続的に取り上げてほしい。

○　１２月３０日(日)のＢＳ１スペシャル「ロストフの死闘　日本ｖｓ．ベルギー知られざる物語」（ＢＳ１ 後 9:00～9:50、10:00～10:49)を見た。たった１４秒の出来事を 110 分かけて描いていたが、長さを全く感じさなかった。１４秒の中にあれだけ多くの思惑、行動、反応、駆け引きがあったことに大変驚いた。１秒という単位はあくまでも人間が決めた単位にすぎず、コンマ何秒でいろいろなことが起きているというところを改めて感じられるすばらしい番組だった。

○　１月１６日(水)の江戸あばんぎゃるど　第一回「アメリカ人が愛した日本美術」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。最近、海を渡った日本美術を扱った出版物や展覧会が話題になっているが、タイムリーな番組だったと思う。アメリカ人映画監督とＮＨＫが共同で制作したとのことで、日本の番組では全体を撮ってから細部にフォーカスすることが多いのに対して、今回は細部から全体に広げるカメラワークが採用されており、新鮮に感じられた。美術品流出の歴史だけでなく、欧米人が持つ日本美術へのまなざし、どのような美意識を持っていたのかを探った点などがすばらしかった。美術史を語る上で有名なフェノロサ、ビゲロー、岡倉天心などではなく、地質学者のフラーの話題から番組が始まったのも好感が持てた。第二回「ガラスを脱いだ日本美術」にも期待している。

○ ニュース、スポーツ番組などで画面左下にＳＮＳの投稿の表示をすることがある。若者には効果的かもしれないが、目がチカチカして余計な情報と感じることもあるので、ボタンを押せば消せるような技術があれば開発してほしい。

（ＮＨＫ側）

技術的には、データ放送の技術で画面にＳＮＳ情報を表示すれば、視聴者がオンオフを操作することは可能だと思われる。意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　１月１３日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「ナニコレ！？傘に化ける鳥」を見た。番組の中で「外からの光が水中で反射し魚を下から照らすので魚の影ができ、水面の上から水中を見ている鳥が魚を発見しやすい。」ということをフリップで説明していたが、屈折や反射の角度が正しいのか単純に疑問に思った。水中に光が入ると「屈折」するし、一般に入射角と反射角は同じ角度ではないのか。イメージとして示すのは良いが、科学番組という側面もあるのではないかと思うので正確に図解したほうがよいのではないか。

○　１月１４日(月)の「『蜜蜂と遠雷』若きピアニストたちの１８日」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後3:00～3:59)を見た。若きピアニストたちがピアノコンクールと向き合う「ひたむきさや真摯(しんし)さ」が出ていて、視聴後はすがすがしい気持ちになった。ピアノ王子と呼ばれた現在１９歳の牛田智大さんに密着し、予選から決勝へと勝ち進んでいく様子に、ほかの出場者、浜松の市民との関わりなども織り交ぜて番組は作られていた。牛田さんが途中で敗退するリスクと、その場合の構成はどの様になるのだろうとスリリングな気持ちにもさせられた。恩師であるピアニストの故・中村紘子さんとの思い出、練習風景、過去の映像なども効果的に使用されていて、短い時間でよく作り込まれていた。牛田さんが日本人ではこれまで最高の２位となったこと、今の１０代がプロコフィエフやラフマニノフを平気で弾きこなすことにも素直に感心した。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１２月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「ＮＨＫ経営計画（2018-2020 年度)」の修正についての説明があった。続いて、千葉放送局の取り組みと今後の予定について、さいたま放送局の取り組みと今後の予定についてを報告した。その後、ＦＭシアター「木更津花街草子」について説明があり､続いて､おはよう日本(枠内特集)「華やかに年齢重ねる　生涯現役アスリート！」､「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
副委員長　奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　弘子（アサヤ食品(株)代表取締役社長）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜ＦＭシアター「木更津花街草子」（ＦＭ　１１月２４日(土)放送）について＞

○　この番組は千葉県に残っている木更津芸者の物語だが現在、木更津ではこの題材が町おこしとして展開され、大きなよさこい祭りにもなっている。映像がないことはラジオになじみのある年配の人ならば豊かに想像できるが、若い人たちには意味も含め、大枠しか分からないのでないかと思った。若い女性が深い理解に立って芸者を職業として選び、両親も応援するという物語に好感を持った。スピード感のあ

る展開でおもしろかった。

○　最初に認知症の祖母が出てきて、現代の問題と木更津芸者の歴史を絡めた複雑な内容かと思ったが、町おこしを絡めながら、ストーリーや人間関係が分かりやすいドラマになっていてよかった。「木更津甚句」に郷愁が誘われ、静寂の中にも木更津の活気が感じられた。放送も夜間帯なのでじっくり聴くことができてよかったのではないか。朗読劇よりもはるかに奥行きがあり、想像力をかき立てられ、脳が活性化した。欲を言えば、背景の効果音をもう少し工夫し、最後の場面で甚句の一声があったほうが余韻を感じられてよかったのでないかと思った。

○　耳だけで聴くというラジオドラマに慣れておらず最初こそ、とっつきにくかったが、慣れてくると、構成も大変よくできていて楽しめた。実話がベースになっているということもすぐにインターネットの情報から分かり、さらに関心を持つことができた。花柳界も昔と違って、ひとつの日本の文化という切り口で捉えられていることが多いと感じている。今後もさまざまな形で地域の活性化と合わせて、日本文化という切り口で、日本人だけではなく、さまざまな人に興味を持ってもらうのはいいことだと思う。老人の介護や認知症であったり、駅前がシャッター通りになってしまっていることなど、地域の現状を織り込みながら、よく作られた番組だった。「木更津照るとも東京は曇れ」という「木更津甚句」のくだりがずっと頭に残っている。

○　音声だけの５０分番組を最後まで聴くことができるかという不安もあったが、始まった途端に引き込まれた。伝統文化を守る芸者の先輩たちとＳＮＳなどを使う若者たちが壁にぶつかる場面は人の心情を見事に描いていると思った。伝統文化を守りながら新しいものを発信し、世の中に伝えたいという思いに共感するとともに、いろいろと考えさせられる番組だった。同じようなことで壁にぶつかっている人たちが全国にたくさんいるのではないかと思われるので、いろいろなところで放送してほしい。

○　ラジオドラマを聴くのは初めてなので、最後まで集中して聴けるのか心配だったが、大変楽しめた。今後もラジオを聴きたいと素直に思える番組だった。昨今は、映像がすばらしければ番組の評価が高い風潮があるように思うが、役者の声だけで物語が進むラジオドラマは聴取者が自分だけのイメージ、想像力を膨らませることができて大変よいと思った。過去から現代につながる伝統文化がテーマとなっている作品であれば、今の若者にとっても楽しめるのではないか。

○　５０分のラジオドラマ番組は主にどういう人が聴くのだろうかと考えたが、一つは例えば病院に入院されている人や寝たきりの方などにとって、これはすごくおもしろい番組なのではないかと感じた。通常、車の中や仕事をしながら聞き流すようなラジオの番組とはまったく異なる聴取者になると思われる。病院などで音だけで、イヤホンで聴くという環境を想定するとこうしたラジオドラマも重要な意味を持っているのではないか。こういうコンテンツを積み重ねていくとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

この番組は特にターゲット層を決めている訳ではないが、長く放送している番組なので幅広い年齢層のファンがいると考えている。千葉局はラジオに力を入れており、何か新しい表現ができないかということでこの番組を制作した。

○　木更津芸者や「木更津甚句」のことは知らなかったが、この番組を聴いて興味が湧き、実際に木更津に行ってみたくなった。すばらしい脚本、出演者だった。ラジオは聴覚だけに自分の脳を集中できるので音楽と相性が良く、本と映画の間のようなメディアだと感じた。ラジオドラマをたくさんの方に聴いていただくためにもっと広報にも力を入れたらいいのではないか。テレビで紹介したり、ラジオの別の時間帯で周知するとさらによいのでないかと思った。

（ＮＨＫ側）

千葉県域で毎日放送している番組の中ではＰＲをしていた。また、千葉局のホームページなどでも告知した。

○　音楽、民謡、ストーリーもおもしろく、５０分間引き込まれた。実話が元になっているそうだが、どのあたりまでが実話なのかと気になった。木更津では、昔は芸者が冠婚葬祭に呼ばれていたとのことで、それだけ町民に寄り添っていたことに驚いた。そこで半玉をやっていた小春が木更津でとても頑張り、期待されていたのに、東京に嫁いだあとに差別を受けて自殺してしまったというストーリーにはショックを受けた。

○　いかに自分がふだん視覚に依存している生活をしているか、改めて反省させられる思いがした。５０分間、引き込まれ、ラジオドラマには最後まで聴かせる力があると思った。音で聴かせる、そこに注目させるという点では、ラジオのアナウンサーや出演者の方は、むしろテレビ以上にクオリティーが問われると感じた。もう一度ラジオ番組というものを見つめなおし、たとえば朝の連続テレビ小説などをラジオ

で聞いてみるとまた違った印象になるのかもしれない。また、ふだんあまりラジオを聴かない人にも、広報して誘導してほしい。ネクスト・ラジオにもあるように防災時にもすぐに聞けるように、身近なラジオを意識した宣伝なども工夫してほしい。

○　絵のない５０分間、最初は長いのではと心配したが、次第に物語に引き込まれて、一気に聴取した。以前、千葉を訪れた際に、「木更津甚句」を聴いて、「東京は曇れ」という意味がまったく分からなかったが、今回のラジオドラマを聴いて理解できた。木更津芸者を有名にするという場面で、臨場感を出すためなのか、後方から小さな音が聞こえていて、主人公の声がやや聞き取りにくかったのが気になった。また直後の会話の中でも後方に歌声が流れていて、会話よりもそちらに耳がいってしまった。

（ＮＨＫ側）

観光協会という設定で音作りをしたので、地元のラジオがかかっているという想定だった。今回番組を制作して、音だけで演出し、何かを伝えることがこんなにもハードルが高く、おもしろいものかと感じた。頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

＜ＮＨＫニュース　おはよう日本　枠内特集
「華やかに年齢を重ねる　生涯現役アスリート！」（総合　７月２１日(土)放送）
「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」
（総合　６月１４日(木)放送）について＞

○　「華やかに年齢を重ねる　生涯現役アスリート！」を見て「華麗に加齢する」ということばが心に残った。若い選手の活躍は美しくてすごいと思うが、年齢を理由にあきらめない高齢者たちの頑張る姿を見て励まされた。しかし、リポートするゲストの衣装は気になった。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」では、練習はもとより、１人暮らしで料理を作ることなど、ひとつひとつが涙ぐましく、五感の一つがなくてもいろいろなことができるということは多くの人に勇気を与えたと思う。

○　「華やかに年齢を重ねる　生涯現役アスリート！」を見て、高齢者に元気を与える番組だと思った。スポーツ人口を広げるという意味でもよい特集だったのではないか。ただ、取り上げたのがそのスポーツを長く続けてきたベテランアスリートば

かりだったので、初心者がこれからスポーツを始めたいと思えるような内容も今後の取り組みの中で考えていくとよいのではないかと思った。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」は、かつてパラリンピックに出場しメダルを期待されながらもその後スランプに陥ってしまった土屋実奈子選手が、同じ視覚障害のある牛窪多喜男さんという指導者に出会ったことで、内面から変わっていく姿がよく描かれていた。初心に返り、基本の重要性を訴えているところがよかった。不自由なこともある中で１人暮らしをして、競技だけでなく、私生活でも努力し自分を変えようとする姿には心を打たれた。アスリートだけでなく、現代に生きるすべての人が勇気づけられる特集で、大変よかった。

○　さいたま局の特集は、多メディア展開としてよくできていると思った。ホームページを活用していて、その趣旨がよく理解できた。ニュース番組の枠内特集だったこともあり、最初は中途半端な印象もあったが、番組の最後にホームページの紹介があり、そこに掲載されている動画を見ると、例えば縄跳びの縄が夏と冬で硬さが異なるので使い分けていることなどが、実によくわかった。また、「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」は、短い時間の中でも牛窪さんから丁寧に指導を受けている様子が描かれるとともに、ホームページの動画で、牛窪さんが視力を失い、子どもができて再び柔道を始めた経緯など背景が詳しく描かれ、より説得力があった。土屋選手の１人暮らしの様子や苦労している姿も詳しく表現されていた。パラリンピックの認知度が低いという話もあるが、こうして具体的な選手を丁寧に取り上げることで、その人を応援しようという輪が広がり、パラリンピックについても開催に向けて、盛り上がっていくのではないか。

○　「華やかに年齢を重ねる　生涯現役アスリート！」は、これから高齢化が進む日本にとってとても希望のある特集だったと思う。導入部分で７人のアスリートが登場したのに、番組内で紹介されない人がいるのはなぜだろうと疑問を持ったが、放送時間には限りがあるので、放送しきれない内容をホームページに掲載していると知って納得できた。番組ホームページではすべてのアスリートたちが紹介されていることを知って、ほかの人たちも見たいと思った。また、全盲の選手を取り上げ、パラリンピックを身近に感じられることはとてもすばらしいと思った。

（ＮＨＫ側）

オープニング映像は、コーナー全体をまとめて紹介するＶＴＲで、ホームページに５分版のほか、１分版と１５秒版を紹介している。今回の番組では１分版を放送した。

○　2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、健康的な高齢者を紹介する内容はよかったが、努力した一部の才能ある人の話にも見えてしまった。タレント２人との対決に時間をかけるよりも、シニアアスリートたちの日常生活をもう少し見せることで、普通に生活している人たちもスポーツを取り入れ健康に気をつけようと思えたのではないか。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」はとても分かりやすく、パフォーマンスできちんと結果を出すためには、日頃の生活から努力するべきだというメッセージも伝わり大変よかった。

○　マッスルというと男性のイメージが強いが、才木玲佳さんの腕の筋肉を見て素直にすごいと思い、今回のゲストの起用も納得できた。またおじいちゃん、おばあちゃんが力強いパスを出せることにも素直に感心した。埼玉県内だけでもあれだけ多くの高齢者が活躍しているのであれば、日本全国では相当たくさんいらっしゃるのだと思う。「さいたマッスル」のホームページを拝見したが、この取り組みを全国に広げて、全国の名物おじいちゃん、おばあちゃんが並んでいたら、ＳＮＳなどで広く拡散されるのではないかと思った。全国選手権などもっと全国で見られるような仕掛けを考えてもおもしろいと思った。

（ＮＨＫ側）

今回は埼玉だけだったが、もう少し広域での取り組みとして番組化するなど、いただいた意見を参考に今後の番組制作に生かしていきたい。

○　「華麗に加齢する」というのはよいキャッチフレーズだと思った。各プレイヤーをキャッチフレーズ付きで派手なナレーションをつけて紹介するのはおもしろかった。サッカーのＰＫ対決はシュートがすごくて良かったが、縄跳び、バスケットボールはすごさがあまり伝わらず残念だった。対決はサッカーだけにして、その分ほかのことに時間を使ったほうがよかったのでないかと思った。縄跳びでは日ごろの努力まで掘り下げていたところがよかったが、バスケットボールの４人組については、みんなでどのように頑張ってきたのかを伝えるとよかったのでないかと思う。番組最後でさいたま局のホームページで詳細な動画を見られるという紹介も新鮮で、すばらしかった。ゲストには対決だけでなく、シニアアスリートのすごさをうまく伝えることを重視してほしかった。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」は、同じ視覚障害者の指導者に出会ったことが復調のきっかけになったということがよく伝わってきた。１人暮らしで得た自信が大事だというところもよく分かり、短い時間だったが、とても内容の濃い、すばらしい番組だと思った。2020 年の大会に向けて、継続的に取り上げてほしいと思った。

○　埼玉県内だけで７０歳以上のシニアリーグの選手が 110 人もいることや縄跳びが得意な鈴木勝巳さんの跳躍力には驚いた。タレント２人とシニアアスリートの対決については、分かりやすい比較もあったが、やや過剰な演出に感じられるところもあったので、その分ほかのことを掘り下げる時間にしたほうがもっと印象に残る特集になったのではないか。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」は５分間という短い特集ながら内容が濃くて引き込まれた。よい指導者に出会えるかどうかがいかに大事なことなのかと思った。土屋選手が料理をする場面で「炒め物をしているときに火が通ると水気が飛んだ音になる」と言っていたが、目が見えない代わりにほかの感覚が研ぎ澄まされるのだと驚いた。

○　さいたま局が県内向けのテレビ放送波を持っていない中で、ホームページと連動した取り組みを行い、それが若手の育成にもつながっているという話はよく分かった。今後番組を作るときに、ホームページとの連動がとても重要になってくるということを感じた。放送番組の時間は短くてもホームページ上でいつでも見られるという発信の仕方については、手ごたえなどがあれば教えてほしい。今回はシニアに着目したということだが、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックを子どもたちにも楽しんでもらうために、このシニアアスリートたちが子どもの頃どうだったのかも知ることが出来れば、さまざまな世代にとって身近に感じられたのではないか。「全盲の女子柔道選手　東京パラリンピックを目指す」の特集で、土屋選手が、一般の方と同じ道場で練習しているのを見て、パラリンピックを目指す選手の練習環境について考えさせられた。

○　「シニアリーグで 500 得点以上ゴールを決めている　７９歳の化け物ストライカー」という紹介コメントがあったが、朝の「おはよう日本」の中で、「化け物」という言い方がやや気になった。例えば「スーパー長寿ストライカー」や「長寿現役ストライカー」といった言い方の方がスマートで視聴者にも受け入れられやすかったのではないか。「化け物」という言い方は並みの人間とは思えない、すごい能力を持っているという言い方だったのだろうが、朝の番組の中では、違和感があった。

＜放送番組一般について＞

○　「チコちゃんに叱られる！」を毎週楽しく見ている。この番組の魅力は毎回新しい発見があることで、チコちゃんのリアクションにも感心している。チコちゃん劇場も

コメンテーターの先生方の回答も本当によいと思う。

○　１２月１日(土)の「あなたのやさしさを２０１８～ＮＨＫ歳末たすけあい～」(総合 後5:50～6:00)と１２月２日(日)の「あなたのやさしさを２０１８～ＮＨＫ海外たすけあい～」(総合 後4:50～5:00)を見た。「ＮＨＫ歳末たすけあい」が、施設で育った子どもが１８歳で自立する際の一時金として使われていることや、「ＮＨＫ海外たすけあい」が医療機器や薬などに使われていることも分かった。一人一人の小さな善意がこの取り組みを通して届くことを知って、うれしくなった。

○　「ＮＨＫオンデマンド」をよく利用している。「１００分ｄｅ名著」や「ＮＨＫスペシャル」などを時間のあるときにまとめて見ることができるのでありがたい。先日、舘ひろしさんと神田正輝さんが出演したプレミアムドラマ「クロスロード」を見たが、萩原健一さんが出演した土曜ドラマ「不惑のスクラム」と同じく、間もなく退職、もしくは退職後などの熟年世代を主人公にしたドラマは自分と重ねて考えることができ、とてもありがたい。

○　１１月２５日(日)の明日へ　つなげよう　復興サポート「みんなで描くふるさとの未来～熊本・南阿蘇村Ｐａｒｔ２～」を見た。今年は災害が多かったこともあり、熊本地震については番組で取り上げられる機会が少なくなったと感じていたが、今回の番組は大変よかった。これまでは、復興サポーターが他の地域での成功事例を紹介し、被災地に導入するという番組が多かったが、今回は単にアドバイスを受け入れるのではなく、住民たちがみずから積極的に議論に参加する様子が紹介され、さまざまな立場の人が協力する姿がとても丁寧に描かれていた。ワークショップに参加した小学生が「自分たちを止めているのは自分たちだ。甘い。動け。」と発言したのが心に染みた。南阿蘇村だけでなく、日本全国の大人たちに向けたことばに思えた。

○　１１月２６日(月)のファミリーヒストリー「ＳＡＭ（ＴＲＦ）～医師の家系に生まれて　亡き父の思い」を見たが、ＳＡＭさんが生まれた病院でのエピソードなど詳細な情報をよく調べており、感心した。

○　日産のゴーン前会長逮捕のニュースを興味深く見た。ＮＨＫでもすぐに特集を組むなど、迅速に手厚く報道されていたと感じている。１２月２日(日)のＮＨＫスペシャル「平成史スクープドキュメント　第２回　バブル　終わらない精算～山一証券破綻の深層～」も、日本の企業文化、組織文化のいまでも変わらない体質に迫る内容だった。

○　１１月３０日(金)の秋篠宮さまの記者会見に関する報道の中で、秋篠宮さまの発言は天皇の代替わりに伴って行われる大嘗祭について、眞子さまについて、そして自分が皇位継承の第一順位になることについて話が及んでいたが、ＮＨＫでは秋篠宮さまの肉声が使われた部分は、眞子さまについて述べられたところだけだったと思う。いろいろ議論もあると思うが、重要だったのは大嘗祭の部分ではないのかと疑問に思った。

○　１２月１５日(土)の土曜ドラマスペシャル「炎上弁護人」(総合 後 9:00～10:13)を見た。インターネット上での悪意や嫉妬が渦巻く中で、被害にあった人を助ける弁護士が主人公のドラマということで、多くの新聞のテレビ欄でも詳しく紹介されていたが、これだけ取り上げられるのは珍しいと思った。現代的で興味深いテーマを取り扱ったドラマだった。

○　「まいにちすくすく」「きょうの料理」「きょうの料理ビギナーズ」をよく見るが、母親たちのためになっている番組だと思う。料理のレシピを詳しく知りたいときは、テキストも参照できるので助かっている人もいると思う。これからもＥテレは母親たちに寄り添ったチャンネルであってほしい。

○　１１月１６日(金)のヤマナシ・クエスト「おめでとうございます！山梨です♪第２弾」は、一般の人たちのアイデアから生まれた企画だというところがおもしろく、山梨にどれだけの人を呼び込めるのか興味を持って見た。番組の中で、「文化」「体験」「地域ならでは」「首都圏から近い」「移住」などのキーワードがすべて自然な形で取り入れられていたのは好感が持てた。ただ、都内からツアーに参加して山梨を訪れるのが若者、山梨で迎えるのが高齢者という構図が当たり前のような感じで番組が制作されていたので、それぞれ幅広い年代の人に参加してもらったほうがいいのではないかと思った。

○　最近イギリスのロックバンド「クイーン」関連の番組が多く放送されているが、現在公開中の映画を見て、関心を持った視聴者にとってタイムリーな編成だと感じている。

○　昨今テレビ離れという話を聞くが、ＮＨＫだけの問題ではないと思う。千葉局のラジオの取り組みでも、災害時の民放ＦＭ局との連携について紹介されていたが、大変よい試みだと思う。他の民放局の番組と相互に乗り入れたり、あるいは再放送するなど、各局の事情もそれぞれあろうが、そういうことを考える時代になってき

ているのではないか。

○　１２月１４日(金)の茨城スペシャル「聖火のキセキ　茨城」を見た。円谷幸吉さんの実業団時代の後輩で生涯現役のマラソンランナーにはとても感銘を受けたので、全国放送でも取り上げてもらえるとよいと思った。

○　「Ｅテレ０６５５」と「Ｅテレ２３５５」を楽しく見ている。本当にすばらしい内容を長年続けていることに敬意を表したい。「Ｅテレ０６５５」には「ＡはＢでＣになる」という歌があるが、教条的にならずに物事を伝えるという今のＥテレの在り方を実現しているすばらしい作品だと思う。また、「ねこねこ５５」には「平井さんと猫」というコーナーがあるが、気象予報士の平井信行さんが画面を指し示す棒を使うとネコが追いかけるというもので、チャーミングでよいと思う。「ｔｏｉ　ｔｏｉ　ｔｏｉ！（トイトイトイ）　くもりのち晴れ編」というデーモン閣下の歌にも平井さんが出ているが、とても元気になる歌詞と曲がすばらしい。「Ｅテレ０６５５」と「Ｅテレ２３５５」をつなげ、１２月３１日(月)に「年越しをご一緒にスペシャル２０１８－２０１９」（Ｅテレ 後 11:45～1 月 1 日(火)前 0:10)を放送するということで、とても期待している。

○　１２月１５日(土)のＥＴＶ特集「アイヌらしく　人間らしく～北海道１５０年家族の肖像」と１２月１６日(日)のＮＨＫスペシャル「アウラ　未知のイゾラド最後のひとり」は、本当によく取材された番組で感動した。

○　「ハートネットＴＶ」は震災から立ち上がろうとしている人たちのことを取り上げたり、障害者雇用の問題でも事業者、雇用される人双方にとってよい結果をもたらした事例を取り上げており、感心している。特に１２月１９日(水)のハートネットＴＶ　第５３回ＮＨＫ障害福祉賞「過去の出来事から得たもの　高橋和明さん」は、脳性まひが原因で障害がある兄を持つ高橋さんが、子ども時代から抱えていた葛藤を手記にまとめ、母親に渡すという話題を取り上げていて心に残った。高橋さんがスタジオで手記を読んで泣いている母親を見て、母親の本当の思いに気付かされた場面には心打たれた。高橋さんの家族がお互いをそれぞれ思いやる姿が捉えられていて大変すばらしかった。

○　連続テレビ小説「まんぷく」や土曜時代ドラマ「ぬけまいる～女三人伊勢参り～」などのドラマを楽しく見ている。

○　１２月１３日(木)のろんぶ～ん　＃９「仕掛学」、１２月２０日(木)の＃１０「感

動」を見た。学者が書くさまざまな堅苦しい論文を世の中のためになるように、また生活に生かせるように解説されているのが大変おもしかった。「仕掛学」では、なかなか気づかない社会の課題を少し別の切り口で見るとうまく解決するといった内容で、大変興味深かった。こういう視点はさまざまな社会の中で使えるものだと感じ、新たな気づきを得られる番組であった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１１月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１６日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、宇都宮放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、とちスペ「松村邦洋の栃木歴史紀行　足利の絵師　田崎草雲」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜とちスペ「松村邦洋の栃木歴史紀行　足利の絵師　田崎草雲」
（総合　７月２７日(金)放送）について＞

○　田崎草雲は地元ではある程度の年齢の方までは知られていると思うが、若い人はどこまで知っているかはわからない。この番組はいろいろな人に改めて足利のことを知ってもらうきっかけになったのではないかと思う。２７分という時間の中で田崎草雲という人物に焦点を当てており、構成もよくできていたのではないか。「西郷どん」という大河ドラマの放送をきっかけに地元の著名人を掘り起こしていて、地域密着のコンセプトが感じられた。草雲が８０歳で描いたといわれる「富嶽図」についての松

村邦洋さんの感想は、自らも絵を描く人ならではの内容だった。横山大観や司馬遼太郎などの話は改めて知る部分もあった。横山大観に「俺は死ぬまでこんな絵は描けない」と言わせたのはすごいと思った。一方で、西郷隆盛を描いた「富士見西郷図屏風」は、白馬にまたがっているナポレオンを模しているように思う。なぜ草雲が富士をのぞむモチーフの中で、フランスのナポレオンをイメージして西郷を描いたのか、そのあたりをもう少し掘り下げてほしかった。また裕福な町民の多かった足利という町で結成された自警団のパートでは、スナイドル銃の紹介があったが、もっと詳しく説明があったほうが良かった。画面右上のスーパーが読みづらかったが、番組全体としてはよく取材されていて草雲の人となりが描かれていた。

○　「富士見西郷図屏風」についてはかなりダイナミックで荒々しく、私の知っている草雲とはだいぶ画風が異なっており、かなり驚いた。「西郷どん」から入ってあの屏風につなげるという構成は引き付けられた。晩年から若いころにさかのぼり、こうした絵を描くに至る幕末から明治まで紹介されていて分かりやすかった。松村さんが鶏卵水を飲む部分などもコラム的な位置付けで良かったのではないか。足利学校ではタイムリーな元号の話題がさらっと解説されたり、文化財保護の側面から彼の文化人としての生きざまも紹介されるなど、実に幅広く取り上げられていた。ただ、彼の郷土の業績を子どもに副読本で教えているという部分では、実際に教えられる側の子どもの声、草雲がどのように子どもたちの心に入っているのかなども聞いてもらえるとさらに良かった。

○　最近の視聴番組の中では一番よかったのではないかと思う。ただ鶏卵水は必要だったのか、なぜ一気飲みだったのかが気になった。軽い雰囲気を入れようとしたのだろうが、番組に引き込まれていたのでそのまま引っ張っていってほしかった。また、足利学校の説明が結構長かったが、全国的にも有名なので県民の方は知っているのではないか。草雲のエピソードにもう少しクローズアップしたほうがよかったのでないかと思った。地域の話題とそれほど有名でない偉人を紹介しており、地域の歴史をきちんと見るという点で、全般的にすごくよくできた番組と感じた。

（ＮＨＫ側）

　鶏卵水のエピソードについてはいろいろと意見があると感じているが、松村さんらしさをどう出すのかという議論をする中で、草雲が酒飲みだったという人柄を出せないかと考えて入れた。

○　番組全体としては楽しませていただいた。彼が描いた絵だけではなく人柄や、さま

ざまな思いとの関係性がわかり、改めて興味を引かれた。特に印象に残ったのが４２歳で亡くなった妻の絵で、まるでおばあさんのようにやつれていて、大変驚いた。時代的なものもあるだろうが、草雲の妻への後悔の思いも込められていたのであろう。そして生まれ変わることを誓ったにもかかわらず、酒を断つのも１か月でやめてしまい、また飲み始めたというエピソードは、草雲のお酒に弱かった人柄が表れていて興味が持てた。鶏卵水のエピソードも親しみが持てておもしろかった。前半は絵師としての草雲が描かれ、後半が人柄、さらには武士としての草雲に焦点が当たっていたように思う。足利学校の資料を売るという話になったときに、切腹してでも、命をかけてでも守ろうとしたことからも、彼が足利の地や人々を愛していることが伝わってきた。だからこそ、展示館も地元の人の力で維持されていることにもつながっているのであろう。ただ右上のスーパー、特に赤字が見えにくかった。この番組に限らず、何かに焦点を当てるときには、もっと削らないといけない情報もあるのではないか。

○　田崎草雲という人物をそれほど知らなかったが、西郷隆盛、司馬遼太郎、横山大観など皆が知っている人を通して紹介することでより身近に感じられた。絵師として活動する一方で、自警団を作り地域を守ったことや足利学校が今日ある理由にも草雲が深く関わっていたことなどがよく分かった。ただし、地域を紹介する番組に対してよく感じられることだが、観光情報誌に載っているような通り一遍の情報を取り上げるだけではなく、その地域の放送局だからこその強みを生かし、違った角度から魅力や課題を伝えてほしいとも感じた。大事なことは、視聴者が制作者の熱意、ねらいを番組から感じることができるかだと思う。どこにターゲットを置き、どんなことを伝えたいのか、そのねらいが実現できたかを放送後に検証するプロセスも大事ではないかと思った。また、案内役のタレントには、視聴者が共感しやすいコメントや、理解を深められるような役割を期待したかった。

（ＮＨＫ側）

ターゲットや番組のねらいがはっきりしないといった指摘を頂いたが、それぞれの場面をどういう意図で作ったのか、一つ一つ検証を重ねて次の番組にも生かしていきたい。

○　歴史が苦手な人でも楽しめる番組だと思った。全国的には草雲はあまり知られていないと思うので、この番組を見れば人となりが分かると思う。鶏卵水の場面なども、若い人たちに興味を持って見られるのではないか。栃木県の人は知っているのかもしれないが、足利学校がどこにあるのか場所をテロップなどで見せれば実際に訪れたいと思う人が増えて、地域の活性化につながるのではないかと感じた。

○　このようなすばらしい画家が栃木にいたことは知らなかったのでよい勉強になった。草雲の富士山の絵に対して横山大観が「俺は死ぬまでこんな絵は描けない」と評価したというエピソードには大変驚いた。また、自警団を創設したエピソードなどは、単なる絵師ではない草雲の一面を浮き彫りにしていてよかった。説明する方たちの解説も分かりやすく興味深かったので、２７分ではもの足りず、もっと掘り下げてもよいのではないかと思った。一方で、案内役の松村さんは絵が得意で、歴史マニアということだったが、番組の中でそのよさが生かしきれていなかったことは残念だった。

○　田崎草雲の人となりから、彼の描いた絵画のことなど、全体として彼の人生のダイジェストが実によく分かった。武士でもあり、絵師でもあり、また郷土愛あふれる文化人でもあり、さらには自警団を作るなど活動家の面もあり、大変多面的な人物であったことが伝わり、田崎草雲という人物の懐の深さを感じさせた。また番組が進む中でいくつか彼が描いた絵画が出てきたが、その描かれた背景が分かりやすく解説されていた。「富士見西郷図屏風」では足利のあたりからも富士山を望遠鏡で見ながら描いたというエピソードが紹介され、富士山には馴染みのある関東南部の人間にとっても親しみが増した。松村さんは歴史マニアでもあるということで、どのような解説が聞けるのか楽しみにしていたが、過去の大河ドラマのモノマネなどは、誰かが受けの役割をするともっと良かったのではないか。館長さんや元学芸員の方、さらには足利の事務所の方たちの丁寧な解説は一般の方にとっても大変分かりやすかった。明治維新のときなど、こういった人たちの力で郷土の大切な宝が守り抜かれ、子どもたちにもしっかりと伝わっていることが大変重要なことだと思った。

○　私は草雲を初めて知ったが、松村さんが草雲美術館の館長から説明を受けた「富士見西郷図屏風」を見た途端にアルプスを越えるナポレオンを思い浮かべた。ナポレオンと同じ帽子で西洋の軍服を着て、鼻の高い西洋人のようであり、草雲はナポレオンの絵を見ていた可能性が高いと思われるが、逆に西郷さんの顔は見たことがなかったのでないか。見ていればあのような顔にはならなかったのでないかという気がしたが、そのあたりをもう少し掘り下げればよかったと思う。今回の番組は内容が盛りだくさんだったが、２７分で収めるのであれば、一番のポイントである「富士見西郷図屏風」を掘り下げたほうが集中できたという気がする。

○　番組では江戸の武士であった草雲が足利へ行った理由に触れられていなかったように思う。足利に登場した後、さまざまな地域への貢献が生まれるが、なぜ足利だったのかが冒頭から引っかかり、番組の最後まで疑問として残り続けた。新政府軍につくという決断をする助言をしたということで、草雲はそれまでの経緯にとらわれることなく、先を展望して何が必要なことかを考えた人だと思った。新政府軍につくかつ

かないかという決断では、地方都市はそれまでの体制につくという主張が強かったと考えられるが、地域の人々に足利学校が培ってきた学問の素養があったことで、新政府軍につくという決断を生み出した文化背景があったのではないかとも思った。幕末はいろいろな物語、エピソードがあり、その背景にさまざまな思想があるので、とてもおもしろい時期であると感じた。草雲は生活が楽になる錦絵をあえて描かなかったそうだが、武士のプライドを持ち、かつ新政府軍につくという決断の背景にどんな価値観があったのかに触れるとおもしろくなったと思う。また、歴史的な題材を扱うときには、視聴者の理解が深まるようなキャスティングを期待したい。

（ＮＨＫ側）

今回は栃木県域の放送だったが、田崎草雲はドラマチックな生き方をしているので、今後は全国に向けても発信していきたいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　「クローズアップ現代＋」が今の時代の動きをとらえた内容が続いていて、目が離せない。１１月１日(木)に「“リサイクル破綻”どう解決？～脱プラスチック社会への模索～」を見た。以前にも同じテーマを取り上げているが、いろいろなところで伝えられることで人々の意識も変わってくるのではないか。

○　１１月１２日(月)のクローズアップ現代＋「暴言に土下座！　深刻化するカスタマーハラスメント」を見た。労働組合が現場に行ったアンケートをもとに、カスタマーハラスメントの実態を明らかにし、解決の方策を考える番組だった。紹介された事例は、会社経営に携わる方にとっては、過去に何度も味わったものばかりだったと思うが、一つ一つに正面から対処し、会社や社員の実力をつけるしかないと感じた。ゲストの厚切りジェイソンさんの発言から、日本とアメリカの違いがよく分かり、非常に新鮮だった。「クローズアップ現代＋」は世の中の隠れた課題、問題を取り上げ、多くの人たちに伝えており、大変意義がある番組だ。時間が限られていたので難しかったと思うが、役所や学校現場などでも悪質なクレームが寄せられることが多いのではないかと思うので、ぜひ第２弾、第３弾も制作してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

ハラスメントの問題はさまざまな局面で取り上げてきたが、アンケート調査の結果から新しい切り口で取り上げられるの

ではないかということで今回改めて放送した。反響も大変大きかったので、引き続き取材を続けていきたい。

○　１０月２５日(木)の「いば６」で鹿島アントラーズがＡＦＣチャンピオンズリーグ２０１８の決勝第１戦に勝ったことを大きく取り上げた際のスーパーの文字が間違っており大変残念だった。ＮＨＫには正しい日本語を啓もうする公共放送としての使命があると思うので、ぜひ正しい日本語で伝えてほしい。

○　１０月２６日(金)の茨城スペシャル「検証『原子力発祥の地』はいま」を見た。国内で最も原子力関連施設が多い茨城県ならではの課題について、検証というタイトル通り、廃炉か、再稼働かという二項対立にせずしっかり取り上げていた。事故時の住民避難における渋滞の課題や、被ばく線量を下げるための放射線の知識、原子力対応人材の不足などの問題をよく伝えていたと思う。今後も継続的に取り上げてもらいたい。

○　１１月２日(金)のとちスペ「あなたが選ぶとちぎの名場面」を見た。宇都宮放送局開局７５周年ということで、栃木県のさまざまな思い出を紹介する番組だった。栃木県でも国体があったり、東北新幹線が開通したり、そうしたさまざまな出来事の中から視聴者が選んだベストテンを紹介していた。身近にいる人たちにとっても、大変懐かしく見ることができただけではなく、ＮＨＫが放送してきた映像はいろいろな意味で資産であり、財産でもあると感じた。１０月１６日(火)のニュースでもキログラム原器の話題が取り上げられていたが、やはりＮＨＫの番組には、そのときどきの時代や文化を切り取って記録するという使命があると改めて感じさせられた。

○　１０月２日(日)の日曜美術館「刀って美しい」、１０月２５日(木)の英雄たちの選択スペシャル「ニッポンを斬る！歴史を創った名刀たち」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後8:00～9:59)、１１月７日(水)の歴史秘話ヒストリア「その切れ味は鋭く、美しく　日本人と刀 千年の物語」を見た。「英雄たちの選択」は名刀にスポットを当て、「日曜美術館」は鑑賞法を紹介し、さらに「歴史秘話ヒストリア」は刀剣史や作刀技法が紹介されていて、歴史番組ならではのさまざまな切り口で取り上げていた。特に、刀剣に詳しい佐野美術館館長の渡邉妙子さんをゲストに迎えたのはよかったと思う。ただターゲットの刀剣女子を意識しすぎたため、いささか騒いでいるだけといった印象もあった。また京都で開催されていた展覧会についてのコメントが、いずれも同じような内容だったのは残念だった。

○　１１月３日(土)の助けて！きわめびと「知識がなくても大丈夫！美術館を１０倍楽

しむ方法」を見た。美術館を１０倍楽しむ方法を紹介しており、敷居の高い美術館を気楽に楽しむ方法のヒントが紹介されていて、大人向けに作られた美術入門番組だった。「美術の知識がなくても楽しめる、正解はない、自由に楽しんだ方がいい」という、最初から入りやすい内容だった。解説者のアートライターの藤田令伊さんと小野塚康之アナウンサーのやりとりも軽妙で、制作側スタッフの努力が感じられる内容であった。

○　１１月７日(水)の歴史秘話ヒストリア「その切れ味は鋭く、美しく　日本人と刀 千年の物語」では日本刀を扱っていた。当初は天皇や都を守るという目的から、やがて武士が使う武器になり、さらに平和な世の中になると美術品となっていく。その一連の過程から刀の鑑賞の仕方まで、大変分かりやすかった。番組全般として、日本刀をあまり知らない人向けの内容ではあったが、刀の歴史と美術品としての鑑賞入門として優れた内容だった。番組を見て、刀はいわゆる茶器と大変似ているところがあると感じた。それぞれ熱い炎の中で焼かれるものであり、茶器についても秀吉のころは大変高価な贈答品として使われたという点もよく似ている。茶器と同様に、日本刀は日本文化のひとつの側面を表していると感じた。海外の人に日本文化を紹介し理解してもらうのにも役立つ番組であった。

○　１１月４日(日)の明日へ　つなげよう「未来塾　池上彰　エネルギー街道をゆく！Ｆｕｋｕｓｈｉｍａから考える“ニッポンの未来”」は学生たちを福島に連れていって、そこでいろいろなものを見せて、学生たちの声を聞くという番組だった。どういうふうにそのことを感じているか、答えを出すのではなく、語らせるといういい内容だった。

○　１１月４日(日)の目撃！にっぽん「記憶と向きあう～作家・柳美里と高校生～」は、福島に住んでいる柳美里さんが高校生たちに演劇を通して表現させるという取り組みを紹介しており、非常に意義のあることだと感じた。

○　１１月１１日(日)の目撃にっぽん「再出発の町　少年と町の人たちの半年」で少年院を出た子どもたちが社会へ旅立つための準備をする国の施設を紹介していたが、少年たちの多くが顔を隠していたのに、１名だけ名前は仮名だが顔が出ていた。本人が了承していたのだろうが、ちょっと不安にもなってしまった。少年の顔出しについてはどのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

基本的には少年法の趣旨を生かして、将来に影響を与えない

ように十分配慮している。今回の少年については放送のときにはすでに２０歳を過ぎており、ご本人、保護観察官と慎重に協議をした結果、顔出しをして放送した。

○　１１月４日(日)のＮＨＫスペシャル「メジャーリーガー　大谷翔平～自ら語る　挑戦の１年～」を見た。撮りためた映像が多く、作り込まれており大変見応えがあった。大越健介さんによるインタビューもよかったと思う。また、インタビューのなかで「質」ということばを何回か使っており、そのことばを大事にしていることが印象的だった。大谷選手は才能があり、多少の波はあったとしても活躍した１年だと思っていたが、実は不調な時期があっても、悩みに一つ一つ真摯（しんし）に向き合って乗り越えてきた１年だったことがよく分かる丁寧な作りだった。「球場メシ」のフォントは「サラメシ」と同じものだったので、分かる人には分かるポイントも楽しめた。

○　１１月１３日(火)のグッと！スポーツ「女子バスケットボール　渡嘉敷来夢」を見た。何人もの人があちこちで違うことを言って、渡嘉敷選手が聖徳太子のように何を言っていたのかを当てていたところがよかった。バスケットボール選手はかなり後ろまで見えるというか、感覚で分かるのだが、そのことも紹介すればもう少しおもしろくなったと思う。

○　１１月１日(木)に再放送していたハートネットＴＶ「母親たちの原発事故～“消えない不安”の日々～」を見た。自主避難したお母さんたちが、結局その土地でなじめずにまた福島に帰ってくる事例を紹介していたが、出て行ってしまった人と残った人との間にも亀裂が起きている。震災から７年経過してまた新たな問題が起きていることを改めて感じた。

○　「にほんごであそぼ」を毎週楽しく視聴している。　１１月５日(月)から１１月９日(金)には「スペシャルコンサートｉｎ出雲」を放送していたが、出演者が大変豪華なメンバーだった。そして宮沢賢治の「風の又三郎」の詩を狂言、文楽、歌舞伎、鹿児島方言、オペラ、ロックなどで同じことばを違う表現で披露していて、同じことばでもこんなに違う表現があるのだということを、楽しみながら見せてくれた。ぜひ続けていってほしい。

○　子育てをしている母親たちから、子育てに関する正しい情報を得たくても、情報があふれていて困っているという話をよく聞く。Ｅテレにはいろいろな番組があり、子育てに関するさまざまなヒントや答えが得られて、大変助かっている。例えば、「ラジオ体操」のように、出産直後の母親向けに「骨盤矯正体操」の番組が毎日あれば若

い世代にも見てもらえるのではないか。また、離乳食がワンパターン化して困っている母親向けに、味付けのちょっとした工夫を紹介する「離乳食の料理番組」なども興味を持って見てもらえるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

骨盤矯正、離乳食などについては「あさイチ」や「すくすく子育て」などの番組で取り上げているが、それに特化した番組はないので、いただいた意見は今後の参考にさせて頂く。

○　Ｅテレは子育て家庭がＮＨＫを見るきっかけになっており、その役割は大変大きいと感じている。子育て支援でも、妊娠期からの切れ目のない支援が言われている。働き方との調整バランス、パートナーの関わりが今さまざまな点で話題になっている。一方では虐待の問題も含めて厳しい社会問題もある中で、子育ての最初のスタートのところは大変重要だと考えている。子どもを持ちたいという夫婦をもう少し早い段階から応援するような番組が増えるといい。

○　１１月１日(木)の「開局まで１か月　これが４Ｋ８Ｋだ」を見た。１２月１日はもうすぐだが、ハイビジョン放送と４Ｋ８Ｋ放送の違いなどを分かりやすく紹介していた。４Ｋは世界的な取り組みになっているようだが、さらに先端技術の８Ｋの開発については、今後、どのようにＮＨＫは展開していくのかについて教えていただきたい。また新聞記事などでは、まだまだ４Ｋ８Ｋ放送の周知が十分ではないことなどが報じられていた。視聴の方法も含め、４Ｋ８Ｋの普及促進に努めてほしい。

○　「ＮＨＫ杯フィギュアスケート」を見た。レジェンドオンアイスなどもあり、歴代のそうそうたるスケーターによるアイスショーなどもありとても楽しく見た。来年からスポーツのさまざまな大きな大会もあるので、４Ｋは家庭でもっと見られる時代に向けて、さらに８Ｋについては各地の放送局やパブリックビューイングなどでもぜひ取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

８Ｋの美術コンテンツではフランスでルーブル美術館と一緒に取り組んでいる。美術館で展示できる絵画は限られているが、展示できない絵画も８Ｋで撮影してご覧いただくサービスを共同で実施している。音楽コンテンツでもさまざまなヨーロッパの最高の演奏を撮影して臨場感を味わっていただきたいと考えている。スポーツも詳細に見られるので、これ

まで私たちが経験してこなかった手法も開発したいと考えている。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けても８Ｋの中継を計画している。また、放送以外でも医療や災害の分野で活用できるのでないかと考えている。

（ＮＨＫ側）

４Ｋ８Ｋの視聴方法が十分に周知されていないことは理解している。テレビで周知することと同時に放送事業者やメーカーが参加するＡ－ＰＡＢなどと連携し、家電量販店や電気工事店に向けた講習会という形でお客様に視聴方法を詳しく伝えられるような活動も並行して行っている。

○　８Ｋでルーブル美術館の絵画を見たが、「モナリザ」の顔をアップにすると亀裂がすごく入っており、このまま見せると逆効果ではないかとさえ思った。

（ＮＨＫ側）

「モナリザ」の背景もぼんやりとしか見えていなかった部分に何が描いてあるのかなど、いろいろなことが分かってくる。夢を砕いてはいけないかもしれないが、ルーブル美術館も事実は事実として捉え、どういう対処をするかも含めてきちんと撮影しようということになった。見えすぎるということはあるかもしれないが、普段見せられないものを見せられるという利点を感じて、８Ｋ撮影を希望する美術館がほかにもある。この分野については進めてよいのではないかと考えている。

○　私は絵を見ることが大好きなので、そういう番組をやっていただくことは結構だと思う。

○　１０月３１日(水)の１００分ｄｅ名著　モンゴメリ“赤毛のアン”　第４回「宝物は足元にある！」を見た。人生の幸せとは何かということを考えさせられるよい番組だった。私は「赤毛のアン」がハッピーエンドで終わると思っていたが、単なるハッピーエンドでなく、悲しいことがあったことで主人公が本当の幸せに気づくというストーリーで、大人にこそ読んでほしい名著と思った。物語を朗読した上白石萌音さんの落ち着いた話し方、普段目にするアニメとは違う、動きのほとんどない切り絵のようなアニメが作品を紹介するのによく合っており、それがこの番組を

すばらしいものにしたと感じた。

○　１１月１１日(日)のクラシック音楽館「Ｎ響第１８９　５回定期公演」を見た。曲はマーラー作曲の「交響曲第１番　ニ長調“巨人”」で、指揮者は９１歳のヘルベルト・ブロムシュテットさんだった。マーラーの「巨人」は明るい曲というイメージがあったが、ブロムシュテットさんの練習風景とともにユダヤ人のとても悲しい物語の説明を聞いて理解が深まった。曲の中身も紹介しておりとてもよかったと思う。

○　連続テレビ小説「まんぷく」やＢＳの番組はとてもおもしろい。朝に仕事をしながら見ているが、思わず手が止まってしまうよい番組がある。

○　１０月２０日(土)のＢＳ１スペシャル「羽生善治と“ＡＩ世代”～絶対王者に挑んだ若手棋士たち～」を見た。羽生竜王が豊島将之八段との戦いの後に「おもしろくない将棋を指してしまった」と話していて、羽生竜王の思わぬ一面がかいま見えてよかった。番組の中で「豊島は宿敵・羽生を倒し」というナレーションがあったが、羽生竜王と豊島八段では実績的に差があるので、宿敵という表現には違和感を覚えた。

○　ＮＨＫの番組でＵＲＬをお知らせする際に「http://」と表示していた番組を見たが、セキュリティの観点からも「https://」で始まるＵＲＬをお知らせしたほうが望ましいのではないかと思った。

○　発達障害キャンペーンアニメシリーズ“ふつうってなんだろう？”を見た。発達障害の子どもや大人の問題についてわずか２分だが継続的に取り上げており、ＮＨＫならではの取り組みだと思った。

○　「書にきく禅語」は、銀座のど真ん中で扇子に書家が静かに禅語を書くなど、禅のエッセンスを一流の書家が書にするわずか３分の番組だが、ＮＨＫにしか制作できない番組だと思う。ただ、語りはもう少し淡々としていてもいいのではないかと思った。

○　今日はジャンルごとに整理した感想を述べたい。

　まずニュースについて申し上げたい。ＮＨＫの番組を時計代わりにしている人がいるが、ニュースはその典型的な存在だろうと思う。昨今、災害報道については首都圏地域偏重から地域情報の取り扱いが増えてきたと感じている。同時に機会をとらえた防災、減災に関する啓もう的な番組も増えてきたように思う。被災地からや

や遠い地域にいる視聴者に向けた情報の出し方は試行錯誤の段階にあると思うが、そのような挑戦、試行錯誤を続けていただきたい。特にニュースに関しては公平、公正、適宜、適切な報道の姿勢を貫いてほしい。

ドラマについても、「連続テレビ小説」「大河ドラマ」は決まった曜日の決まった時間に放送されるので、時計代わり、一つの生活のリズムを刻む番組としての機能を提供しているのでないかと思う。いずれの番組も自分と関わりのある地域、事柄が含まれたときに興味、関心を高める機能があるとするならば、制作現場では各地から「当地を取り上げてほしい」という要望も多くあると思う。そういう地域とのつながり、さまざまな切り口での題材を取り上げていただくとよいと思う。

「ＮＨＫスペシャル」等の大型番組には感心させられる。長期にわたる取材に支えられた見応えのある番組作り、タイムリーな放送、ＮＨＫでなければできない番組だと思う。変化する社会環境の中で記録として残すべきものを残し、アーカイブスをしっかりと整えてそれをうまく活用することも含め、ＮＨＫならではの大型番組を制作してほしい。時事問題などについては「クローズアップ現代＋」のような番組でしっかりとＮＨＫの中に映像や情報を蓄えていくことを大いに期待したい。

技術についてだが、３年半ぐらい前に見た番組でドローンを活用した映像があった。今でこそ当たり前のように使われているが、当時はドローンが一般普及していないときだったと記憶している。ＮＨＫが深海や極地で鮮明な映像を記録することのできる技術開発に取り組んでいることを知るにつれ、４Ｋ８Ｋも含め、新たな撮影、放送技術の開発はＮＨＫの大きな使命だと理解するようになった。研究開発の資金をしっかりと確保して、質のよい番組を支える技術を実現してほしいと思う。また、「ニュースチェック１１」の「ニュースのヨミ子」がこれからどう成長するのかと興味を持って見ているが、人間でなければ伝えられない表現もあると思う。アナウンサーの人材育成を切に願う。

バラエティー番組についてだが、「チコちゃんに叱られる！」など、ＮＨＫでは実験的な取り組みが行われる領域だと思って見てきた。視聴者に見てもらわなければ始まらないという前提はあるだろうが、ＮＨＫらしさがあるバラエティー番組の開発に取り組んでほしいと思う。

県域放送については、各放送局が地域の活性化を支援する番組、取り組みが最近確実に増えてきたと思う。制作される番組の質に関しては新人が経験を積むための番組づくりがされていることもやむをえない現実だろうと思う。番組制作の機会を増やすことにより、よい人材の育成ができるような環境整備をしていただきたいと思う。

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックでは山梨県がフランスのキャンプ地を提供するが、甲府放送局では「Ｎｅｗｓかいドキ」のなかで簡単なフランス語講座を毎週１回放送している。東京オリンピック・パラリンピックに向けて地域を

活性化する一つの取り組みだろうと思う。そのような取り組みが各地で行われていると想像するが、各地方局における番組づくりの回数を増やしていただきたいと思う。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で出された、９月３０日（日）の大河ドラマ「西郷どん」休止に伴う番組変更の周知に関する質問についてお答えする。当日の放送では「西郷どん」をお休みにする旨のお断りを午後８時と８時１７分過ぎに２回スーパーで行い、同時にホームページ等でも周知したが、その時点では翌週の同じ時間に放送する旨のお知らせは行わなかった。直前に休止を決めたため、翌週に送っても問題がないかどうか確認した上で、翌日の午後５時に公表した。公表に当たっては、放送の番組宣伝などでの告知、ホームページ、ＳＮＳでの告知を行ったが、指摘も踏まえ、より丁寧な周知に努めたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

２０１８年１０月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１９日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、水戸放送局の取り組みと今後の予定について中原水戸放送局長から報告した。その後、「茨城スペシャル　茨城ＭＩＣＨＩ知るべ～いばらきの“道”で新発見！～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　　原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
委　　員　　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）

（主な発言）

＜茨城スペシャル「茨城ＭＩＣＨＩ知るべ～いばらきの“道”で新発見！～」
（総合　５月１日(火)放送）について＞

○　茨城県内各地にこれほど多くの魅力的な場所があり、人物がいることを改めて知ったが、３０分の番組に盛りだくさんの内容で、見終わったあとに印象が薄れてしまったのは残念だった。また、テロップや音楽が多く使われており、落ち着かない印象を受けた。番組では、石切山脈とお弁当の自動販売機の部分が印象的だった。石切山脈で造り酒屋をしている女性の「石切山脈で取れる御影石が町を支え、湧き出る水が地域を潤わせて、まるで命の水なんです」ということばが心に残った。「歴史の道」のコーナーでは県北の棚倉街道で東京五輪にあわせて旧里見村独自の聖火リレーが行われたと紹介され、連続テレビ小説「ひよっこ」を思い出した。お弁当

の自動販売機の話はとても心に残り、お弁当をどんな方がどのように作っているのか知りたくなった。

○　先日、「地域ブランド調査 2018」で、茨城県が連続最下位というニュースを見たが、あまり気にせず、いろいろな情報を発信することが大事だろうと思う。番組の冒頭、茨城県の道の総延長が６万キロで「とてつもない距離」とナレーションしていたが、「地球一周半」など何かと比較して紹介するとよりすごさが伝わったと思う。今回取り上げられた国道５０号線、５１号線を車で通ったことがあるが、知らないことや気づかなかったことがたくさんあった。一本の道沿いに、歴史や産業の秘密を探るという内容で、剣持幸恵リポーターの語りも親しみがあってほのぼのとした番組だった。自分の身の回りや日常の暮らしの中に知らないことや気づかないことが意外に多いということを改めて感じた。大型連休に出かけてみたいと思えるような番組を目指したそうだが、取り扱っている素材が大切だと思う。番組を視聴した後、実際に石切山脈と造り酒屋に行ってみたが、いずれも“物語”のある良いところを選ばれたと思う。今後も、放送後に訪れる人を想定して素材を選び、良い情報を伝えていってほしい。

○　地元の人でさえ知らないその地域の魅力を紹介することは、地域のブランド化の第一歩だと思う。こういう番組がもっと増えればよいと思った。圧倒的に印象に残ったのは 300 円弁当の話題だった。恐らく作ってすぐのものを入れているのだろうから、自動販売機で売る必要はなく、対面販売すればいいように思ってしまうが、あえて古い自動販売機の中に入れて売るところが茨城らしいほのぼのとしたところなのだと感じた。設置された昭和４７年から今までの歴史があの自動販売機にすべて詰まっているように思えたので、もう少し深掘りしてもおもしろかったのではないか。一方で、「地名＆名前探偵」の話題は、ほかの話題と系統が違っており、やや違和感があった。全体として、何か一つにテーマを絞ればもっと分かりやすかったのではないかと思った。こういった地域の知られざる魅力を発見する番組を茨城だけでなく全放送局でもっと放送してほしい。

○　列車や路線バスの旅番組はたくさんあるが、道に注目をし、取材していたことは新鮮に感じられた。旧里美村の佐川村長が東京五輪に合わせて村独自の聖火リレーを企画した話を見て、連続テレビ小説「ひよっこ」の聖火リレーのことを思い出した。市町村合併すると吸収された市町村の歴史が忘れ去られてしまいそうになるが、そういった話題を掘り起こし、地域の魅力が再発見できたのはよかった。お弁当の自動販売機の話題は、見ていてホッとし、心が温まった。地域向けのニュース番組「いば６」のコーナーをまとめた番組とのことではあったが、「地名＆名前探偵」

の話題は少し唐突に感じられた。

○　県内の国道にスポットをあて、知らない「未知」と「道」をかけたり、「知るべぇ」という方言も感じさせるタイトルで、地域の魅力を発見するいい取り組みだった。道というとある地点と地点をつなぐ線のことを言うのだと思う。この番組は線の中の点を１、２個しか取っていないが、もっと細かい点を丹念に一つずつ拾っていってほしかった。終点から始まったのであれば、県境を越えはするが起点まで追っていくとおもしろかったのではないか。テーマも５つに分かれていて、散漫な感じを受けたので、一つの国道を丹念に追っていってほしかった。今後も継続するのであれば、始点があって目的地があって、その間の名所や人物、名産品に触れていくのが本来の紀行番組のあり方ではないかと思った。

○　茨城の道の総延長が６万キロもあることや、石切山脈に年間で２万５千人も訪れることなどに驚き、御影石から湧き出る水で作った地酒がどのような味なのか気になった。一見簡易なビニールハウスしか見えないところに、500 匹ものコイがいて、中には 100 万円もするものがいたこと、本物のフクロウを見られるカフェにはうらやましさも感じた。地元の人しか知らない地域のいいところを、道を通して紹介していた点はよかった。リポーターの女性はよかったが、時折出てきたディレクターの男性の服装が少し気になった。タイトルどおり、映し出されるスポットはどれもおもしろそうで、実際に行ってみたいと思ったが、番組での取り上げ方がやや物足りなく、小さな真実をきちんと掘り下げて見る人を感動させるところまでには至らなかった点は残念だった。

○　番組のタイトルが「未知なるもの」と「道しるべ」、さらに茨城の「～べ」という方言の言い回しもかけていて、よいタイトルだった。「産業の道」、「歴史の道」などそれぞれの道の特徴がしっかり打ち出されていたので分かりやすく見られた。番組を通して、地元の人でもなかなか知らない魅力のあるスポットを知ることができたのはよかった。リポーターの剣持さんが、フレッシュで声のトーンも明るく、番組の魅力を引き出していた。テーマが盛りだくさんだったが、300 円弁当や発明家の飯塚伊賀七、さらには１０円で野菜を売っている男性など、もっと深掘りできる題材ばかりだと思った。特に、旧里美村の佐川村長が東京五輪に合わせて村独自の聖火リレーを企画したことなどはもっと深く掘り下げれば県外の人にもおもしろく見られ、かつ茨城の温かさも伝わったのではないか。また、市町村合併で複数の市町村が合併して一つの市や町になっても、文化は昔の古い市町村単位で残っていることが多いので、番組を作る上では合併前の視点も重要だと思った。たくさんの人に見てほしい番組なので、もっと広報にも力を入れてほしい。ある調査では、茨城県が地域ブランドの評価が最

下位になってしまったと聞いたので、ＮＨＫにはぜひ今後も地域の魅力を広く全国に発信してほしいと思った。

○　この番組は、茨城県外の人には分かりにくいところがいくつかあった。茨城県の道路の総延長が６万キロとのことだったが、何かと比較することで、すごさを伝えるコメントがあればよかったと思った。県内の地図が紹介されたが、メインで話題になっている地点以外の地名が表記されれば全体のイメージがつかめたのではないか。番組冒頭で国道５０号は水戸駅前が終点という紹介があり、番組最後では国道５１号の道路標識を見せて水戸駅前が終点と紹介していたが、「国道５０号も、国道５１号も、水戸駅前が終点です」と言ったほうが分かりやすかったのでないかという気がした。途中「地名＆名前探偵」という表示が出たが、「探偵」ということば自体がひそかに探るという意味なので、この場合は「調査」と言ったほうがよいのでないかと思った。久地楽という地名の謎については「クガジがなまってクジラになった」という説明が分かりやすくてよかった。

（ＮＨＫ側）

地域の何気ない話題の中に心温まる話や人情、懐かしい風景があるので、より多角的に茨城の魅力を県民の方はもちろん、県外の方にも伝わるような形で番組を制作したいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月６日(土)、７日(日)、１４日(日)に放送されたのＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド～資本主義の未来～」を見た。資本主義の意味や成り立ちについて分かりやすく伝えており、新聞を読んだり、ニュースに接する際に理解が深まるという意味で意義のある番組だと思った。司会者やゲストの選び方のほか、間に入る世界の実情を伝える映像や、スタジオでの模型を使った説明なども良かった。１０月６日(土)の第１集「お金が消える！？」では、それまでキャッシュレスに対して悪いイメージしかなかったが、人々が信頼するのは国なのか技術なのか時間なのかという通貨の問題を考えさせられた。１０月７日(土)の第２集「仕事がなくなる！？」では、ＡＩとロボットが出ていたが、経営者の孫正義さんと国立情報学研究所の新井紀子教授の対談がおもしろかった。　１０月１４日(日)の第３集「借金に潰される！？」では、ゲストの法政大学の水野和夫教授が、借金の歴史を研究しているということに驚いた。経済成長を考えるうえで、今は欲しいものが無くなっ

ているという話があり、その通りだと考えさせられた。また、多重債務の問題を考えるうえで、マレーシアのマハティール首相の「イスラム金融」が参考になると感じた。無理な貸し出しをせず、利子を取らない代わりに、融資先が抱えている問題の解決にも向き合うというもので、今後いろいろな意味で見直されるべき考え方だと思った。今回の３つの番組を見終わって、これから自分が何に価値を置いてどこに向かっていくのかという意識が重要なのだと考えさせられた。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を見た。さまざまな情報を入れて分かりやすく説明しようという努力が感じられ、見応えのある番組だった。一方で、銀行の信用創造や所得の再分配の問題など、いくつか欠けている部分、作り込めていなかった部分もあったと思う。また、孫さんなどゲストもすばらしかったが、第３集「借金に潰される！？」のゲストのコメントにはもう少し時間を取ってもらっても良かったのではないか。資本主義の限界や“成長信仰”の問題など、資本主義に対する考え方や持論をその分野の専門家であるゲストにもう少し語ってもらえていれば、よりおもしろい番組になったのではないか。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を含め、最近の「ＮＨＫスペシャル」や「ＥＴＶ特集」は多角的な視点からさまざまな話題を取り上げており、大変すばらしい。恐らく視聴者から批判的な声が届くこともあるだろうが、今の路線を崩さずに番組作りを続けてほしい。最近の雑誌や新聞などは、内容に偏りを感じることもあるが、ＮＨＫのように多角的な視点を示すことはメディアの重要な役割ではないかと思う。

○　ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」を見た。時間通貨の話題などが取り上げられ、若者世代にも見てもらいたい大変意義のある番組だった。特に第２集「仕事がなくなる！？」の孫さんと新井さんの議論は爆笑問題との掛け合いも含めて大変おもしろかった。全体的に分かりやすかったが、所得の再分配やベーシックインカムなど若い世代にとって重要な問題について、今後も番組で取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「マネー・ワールド」は、経済に起きているさまざまな現象を資本主義を長い歴史の座標軸に当てはめることで構造を理解してもらい、分かりやすく伝えるシリーズだった。司会に爆笑問題を起用し、多くの人に徹底的に分かりやすく伝える、経済エンターテインメントとして制作した。

○　７月１２日(木)の「いば６」で福島の原発事故の被害から逃れて茨城で頑張っている眼鏡店の方の話題が取り上げられたが、地域の住民をつなぐことも地域放送局の重要な役割だと思い、大変感銘を受けた。原発事故の被害から逃れた人々を取り上げることで、周りの人との関係性を作るのも地域放送局の役割だと感じた。

○　「首都圏情報　ネタドリ！」では、ここ最近茨城への移住者の話題が何度か取り上げられた。９月１４日(金)の「働き方の新潮流“脱都心ワーカー”」では、東京のＩＴ企業に所属しながら長野に移住した人や営業部門のオフィスごと茨城に移転してインターネットで東京の物件を取り扱う不動産会社などが取り上げられたが、これは東京への一極集中というこれまでの世の中の流れからの反転が始まっているということではないか。こうした層が増えてきているというのは、優れた着眼点だと感じた。

○　連続テレビ小説「まんぷく」が始まったが、安藤サクラさんの演技とテンポの良い物語を楽しく見ている。

○　連続テレビ小説「まんぷく」がスタートし、引き込まれるように毎日楽しく見ている。ただ、これまでの「連続テレビ小説」がオープニング映像に工夫を凝らしていたのに対し、「まんぷく」はわりとシンプルな映像だったので最初に見たときに少し拍子抜けした。

○　ドラマ１０「透明なゆりかご」は大変すばらしいドラマだった。ＢＳ時代劇「雲霧仁左衛門」、土曜時代ドラマ「赤ひげ」を含めて、ＮＨＫでないと出来ない上質なドラマ作りをしていると思う。「赤ひげ」は主役の中村蒼さんやヒロイン役の奈緒さんなど、若手俳優をうまく起用し、いいキャスティングをしている。ただ、「雲霧仁左衛門」の新シリーズは、池波正太郎が原案となってはいるが、今までとはテイストが少し違っていて残念だった。

○　９月２９日(土)に再放送された、ＥＴＶ特集「私は産みたかった～旧優生保護法の下で～」を見たが、この番組は大変な秀作だと思った。日本だけでなく、ナチス時代のドイツの話も取り上げられており、障害者の問題について深く考えさせられた。「障害を持って不幸だね」と思われることが不幸なんだという障害者の気持ちが心に残った。また、あるドイツ人の言った「世の中が平穏な時は問題ないが、世の中がギスギスしてくると、弱い立場の人たちを攻撃して差別していこうという風潮になることが怖い」という言葉は現代にも通じると感じた。

○　１０月６日(土)に再放送された、ＥＴＶ特集「カノン～家族のしらべ～」を見た。水戸放送局が担当されたそうだが、大変よく作られていて感動した。

○　９月３０日(日)の新世代が解く！ニッポンのジレンマ「世代論のジレンマ大研究」(Ｅテレ 前 0:00～1:00)を見た。最初はタイトルどおり世代論の話だったが、個人の趣向が多様化し、その重要性が叫ばれる時代において、世代論はもはや無効かもしれないということで番組が終了した。急速に社会が変わる中で、若者や子どもの世代に親世代が経験から教えられることが少なくなっていると感じた。

○１０月１０日(水)ねほりんぱほりん「マッチングアプリにハマる人」を見た。若い人はＳＮＳ上で会話しながらこの番組を見ているそうだが、ＮＨＫでこのような番組をやっていることに驚いた。マッチングアプリにハマる人も最終的にはちゃんとした恋人ができてハッピーエンドだったという印象だが、きわどい内容を扱った番組でどのような制作意図があるのだろうかと思った。

（ＮＨＫ側）

「ねほりんぱほりん」については、知りたいことを率直に全部聞こうという姿勢が結果的にきわどくなっていることもあると理解していただければと思う。

（ＮＨＫ側）

テレビに映りたくない人や、事情があって撮影が難しい人の生き方を紹介する新しい手法が「ねほりんぱほりん」であり、広い意味ではある種のドキュメンタリーと言えるのではないか。

○　１０月４日(木)のザ･プロファイラー～夢と野望の人生～「皇女　和宮」を見た。ファッションなどの観点から和宮を取り上げ、再現ドラマを交えるなど、堅苦しくなく気楽に見ることができた。歴史番組として一般の視聴者には良かったと思うが、一方で、プロファイラーというタイトルが付いているにも関わらず、単なる人物伝になってしまったのではないかとも感じた。スタジオでのやりとりも従来から知られていることばかりで、もっと知られざる事実や専門家ならではの解説がほしかった。それに比べて、１０月１８日(木)の「前田利家　はみ出し者の出世術」の回は、俳優や漫画家、お笑い芸人などゲストがバラエティー豊かで、司会の岡田准一さんを含めて、それぞれ独自の意見や見方が伺え、興味深く見た。今後もスタジオトー

クで内容が深まるようなコメントができるゲストの人選に期待したい。

○　１０月６日(土)のＡＩ育成お笑いバトル　師匠×弟子「＃１」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後11:45～7 日(日)前 0:59)を見た。番組では、お笑い芸人がＡＩにお笑いのセンスを学ばせて育成し、ＡＩ同士を競わせていた。ＡＩについて、どこか怖さを感じていたが、人間がうまく活用できるヒントをおもしろく見せていた番組だった。

○　台風や北海道胆振東部地震など、ここ最近災害が頻発しているので、仕方がないのかもしれないが、災害報道がやや過剰ではないかと感じた。台風報道を見て、進路にあたっている地域のイベントがほぼ中止になることが多いが、ＮＨＫや気象庁に蓄積された過去の台風情報を元にした経験則から、それぞれの地域に対してどの程度の警戒が必要なのか、もっと詳細に伝えることができるのではないか。例えば、風の予報で、何メートルから何メートルと色分けした図が表示されるが、もう少し詳しく解説をしてもらうだけでも、かなり詳細な情報を伝えられると思う。

（ＮＨＫ側）

公共放送の使命として、災害報道においては最悪のケースを想定し、減災・防災を第一に考えて注意・警戒を呼びかけている。細かい地域の風雨の状況や、その地域でイベントが問題なく実施出来るかどうかなどの詳細な状況を個々に伝えるのはなかなか難しく、どうしても被害を少しでも抑え、最悪のケースを免れることを第一に考えた報道になる。意見は参考にさせていただくが、そういった公共放送の使命があることはご理解いただきたい。

（ＮＨＫ側）

今後、地域の詳細な情報を県単位で伝えることも検討したい。

○　北海道胆振東部地震の災害報道では、Ｌ字画面で英語のテロップが出るようになっていて感心した。地震発生時に北海道を観光で訪れていた外国人は、ことばも分からず、情報を得るのにかなり苦労していたとの話も聞いたので大変いいことだと思った。

（ＮＨＫ側）

北海道胆振東部地震が発生した当初、道庁の窓口も少なく、

外国人観光客になかなか情報が伝わりにくい状況だったので、Ｌ字画面上で台風情報を英語で伝え、国際放送を配信しているホームページに誘導する２次元バーコードを一定の間隔で表示し、情報が伝わるようにした。「ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮ」は日本国内からもアプリで視聴できるので、外国人観光客にも情報を届けられたと思う。

○　「チコちゃんに叱られる！」は、我が家、親族、会社で大きな話題になっている。乱暴な言葉づかいや、一面的な見解がこんなにも人気になるのはなぜなのかと不思議に思っていたが、９月２７日(木)の「植物に学ぶ生存戦略　話す人・山田孝之」(Ｅテレ 後 11:00～11:30)を見て、Ｅテレのこれまでのイメージが変わり、「チコちゃんに叱られる！」に通じる魅力を感じた。チコちゃんと同じように、一面的な見解ではあったが、なぜか引き込まれた。また、「今夜も生でさだまさし」にも同じように引き込まれる。３つの番組は、自分の考えをしっかり主張することの大切さを伝えているのではないかと感じた。そして違う意見や考えがあることへの配慮もなされていて、クレームを避ける意味でも、いろいろな意見を尊重するという意味でも感心させられた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとして、３０代、４０代の人たちがＮＨＫの番組だけでなく、そもそもテレビを見ないことにとても強い危機感を持っている。今よりもっと幅広い世代にＮＨＫの番組を見てもらうことが大事だということで、「チコちゃんに叱られる！」や「植物に学ぶ生存戦略」のように少しユニークな番組も制作している。

（ＮＨＫ側）

とにかく幅広い世代に見てもらえるような見せ方、伝え方を考えて番組を制作している。「チコちゃんに叱られる！」も身近で起こる素朴な疑問を取り上げた番組だが、徹底的になぜなのかを調べ真実に近づこうとする姿勢はＮＨＫが今まで培ってきたものだ。それをテレビだけでなく、インターネットも含めて、幅広い世代にどうすれば伝わるかを考えている。

（ＮＨＫ側）

同じ情報を伝えるにしても、どういう番組ならば多くの人

に一番見てもらえるのかということを考え、出てきた形が「チコちゃんに叱られる！」や「植物に学ぶ生存戦略」だと考えている。

○　テレビを含めてメディア自体に閉塞感がある中でＮＨＫがやっている取り組みやチャレンジは重要なことだと思う。新聞、テレビ、ラジオ、雑誌などのメディアにほとんど触れない人がいる中で、果敢に挑戦していると思った。ＮＨＫにしかできないことはたくさんあると思うのでぜひ頑張ってもらいたい。

○　「デザインあ展」に行ったが、子どもといっしょに楽しめる刺激を受ける内容だった。体験型のイベントはＥテレの番組と大変親和性が高く、そのほかの番組でも展開できるのではないかと思った。「デザインあ」は多くの人に好評な番組だと思うが、番組の歌の歌詞の中で一点気になることがある。「てん　せん　めん」という曲の歌詞の中で、「めん　はじっこは　せん」「せん　はじっこは　てん」と表現しているが、点の集合が線、線の集合が面と伝えたほうが分かりやすいのではないか。

○　今年度前期の「将棋フォーカス」は、破天荒な棋士の佐藤紳哉七段を講師に起用しており、「佐藤紳哉のエンジョイ将棋」のコーナーを子どもと一緒に大変楽しく見ていた。後期から別の講師に変わってしまったが、ぜひまた佐藤七段を番組に起用してほしい。

○　ＦＭ放送を車の中で聴くことが多いが、他局が横並びでポップスや洋楽を放送する中、ＮＨＫはクラシックを中心に落ち着いた番組を放送していて、独自性を発揮した貴重な存在となっている。

○　大河ドラマ「西郷どん」を見ているが、台風２４号のニュースを放送した影響で９月３０日(日)の放送が中止になった。１０月６日(土)の再放送の時間も別の番組を放送していた。放送日変更の案内はどの程度行ったのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ「西郷どん」の休止については、午後８時にテレビ画面にスーパーでお知らせをした。番組変更については、ホームページやＳＮＳなどでも、できるだけ幅広くお知らせするようにしている。詳しいことは確認した上でお答えする。

○　ホームページやＳＮＳで幅広く周知することは大事だと思うが、「大河ドラマ」の視聴者の年齢層を考えるとテレビでもっと手厚く情報を伝えてほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年９月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２１日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、横浜放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、平成３０年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、平成３１年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。

続いて、「Ｒ１３４／湘南の約束～神奈川発地域ドラマ～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）

（主な発言）

＜「平成３０年度後半期の国内放送番組の編成」および
「平成３１年度の番組改定」について＞

○　若い人たちにも番組を見てもらうことはとてもよいことだと思うが、タイトルを短縮して詰めすぎることが多く、かえって分かりにくくしている面もあるのではないか。若い人にはそのほうがいいのかもしれないが、年配者からはこういう意見があるということは大事にしてほしい。

（ＮＨＫ側）

短い番組タイトルでインパクトを与えたいのか、分かりやすさを取るのか、両方の考え方があると思っているので、番組ごとにそれぞれ見極めながら進めたい。

○　ラジオについてはどのように分析しているのか。

（ＮＨＫ側）

ラジオでも聴取率調査を実施しており、長期的な傾向を分析しているが、母数が少なく数字としては変化が見えにくいところがあるので、「らじる★らじる」の訪問者数なども参考にしている。

○　地方局のローカルニュースは主に午後６時台に放送しているが、知っている人やイベントが取り上げられると身近に感じられ、ＮＨＫを見るきっかけにもなると思う。現役世代は午後６時台のニュースを見ることはなかなか難しいので、同じ内容を午後８時半か８時４５分ぐらいから再度放送すると若年層、現役世代にも見てもらえるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

午後８時４５分の「首都圏ニュース８４５」は関東地方向けのニュースで、現役世代が関心のありそうな話題を取り上げている。

（ＮＨＫ側）

現役世代や、１０代、２０代のテレビをあまり見ない、そもそもテレビを持っていない方たちにもＮＨＫのコンテンツに触れてもらうためには、今のテレビ放送だけでは限界があるだろうと考えている。ＮＨＫではインターネットを利用した放送番組の同時配信および見逃し配信ができないか検討している。

○　今の学生はテレビをほとんど見ておらず、新聞も取っていないのが現状なのではないか。メディア環境がずいぶんと変わってきたと感じている。そういった若者にも番組が届くように考えてほしい。

○　インターネットの同時配信とあわせて見逃し配信の話が出たが、大河ドラマ「西郷どん」を見たいと思っていても、本放送、再放送ともつい見逃してしまうことがある。また、これまで見ていなかった人が「西郷どん」の評判などを耳にして、これまでのストーリーを知りたいと思っても知ることができない。年末には総集編が放送されているが、途中の段階でもこれまでの総集編のような番組を放送することも検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ「西郷どん」は３回ほどさまざまな企画を織り交ぜた特集番組を放送したが、折りを見てストーリーを振り返る特集番組なども検討していきたい。

＜Ｒ１３４／湘南の約束～神奈川発地域ドラマ～
（ＢＳプレミアム　６月２７日(金)放送）について＞

○　初見ではストーリーを追うのがやや大変だったが、３回程見ると奥深く、フランス映画のように心に迫ってくるものがあるドラマだった。外国籍の方が多いなど神奈川県ならではの地域性も描きながら、第三者が関係することで、認知症の家族や兄弟の葛藤など家族の課題が解決していく様がおもしろかった。また、人間関係を深めたり、難しいことと向き合うことを避けてしまう傾向があると思っていた若者が、ドラマの中で、他人との関わりを持つことで解決法を見つけていったりする様子を見て、若者たちはむしろこういう巻き込まれ方を求めているのではないかとも感じさせられた。湘南を舞台に、昔ながらの漁港の風景と若者がサーフィンをしている風景がそれぞれ描かれ、新旧どちらの魅力も感じられるドラマだった。一方で、主人公の洸太が抱える兄弟の葛藤についてはもう少し丁寧に描いてもよかったのではないかと思った。

○　地域ドラマはその地域の魅力を全国に発信するものだと思っている。その視聴者は、そこに昔から住んでいる人、今も昔も住んだことの無い人、今住んでいる人、かつて住んでいた人に分かれるが、それぞれ感じ方が違うと思われる。しかし、その地域にゆかりの無い人に向けて説明しすぎるとドラマの味わいが失われてしまうので、バランスが難しいと感じた。その地域を全く知らない人は実際に行ってみたくなり、地元の人は地域の良さを再発見できるようなドラマを、これからも制作し続けてほしい。今回は登場人物の思いが伝わるドラマだったが、風や波の音、ヨッ

トのマストにあたるワイヤーの音、トンビの鳴き声などの音響効果には感心させられた。特に地元の人には懐かしく感じられたのではないか。ジャズのスタンダード曲が流れる感じも心地よく、音楽もすばらしかった。

○　３回見たが、どこか素朴さが感じられるドラマだった。１回目は、指輪を盗んだ負い目から年配の外国人女性・マリアの思いを仕方なく実現していく中で、現実から逃げていた自分を取り戻す若者の物語として見た。２回目は、マリアが探していた写真の場所が自分にとっても思い出の場所だと気づき、自分一人では行けなかった場所に行くことで、５年間の空白を埋めることができたという若者の成長物語として見た。３回目は、江の島、鎌倉、七里ヶ浜などの景色やその場で暮らす人たちの会話や交流など、地域らしさを楽しみながら見た。主人公の洸太が葛藤を乗り越えて、弟との絆を取り戻したところが大変よかった。社会や地域の課題をテーマに番組を作る場合、たいていはドキュメンタリーになると思っていたが、ドラマで描くのもよいものだと思った。

（ＮＨＫ側）

今回は湘南を舞台にドラマを制作するにあたり、湘南ならではの風景をなるべく多く見せることで、見る人にいろいろなことを感じてもらいたいと思った。

○　プロローグの鎌倉の海が暗い映像だったのに対して後半からきれいな青色になり、「海は心の鏡だから」「変わったのは、あなたの心よ」というマリアのことばが響く効果的な演出だったと思う。湘南にゆかりのある人をさりげなく登場させたのは憎い演出だと思ったが、洸太がお金もないのにバーへ行くところや、マリアの孫娘が突然現れる場面など、途中の説明がないとつじつまが合わないところがあったのは残念だった。また、主人公にはつらい過去があり、その場所に行きたくないことは後で分かるが、なぜ江の島に向かうのに七里ヶ浜からずっと歩くのか、「Ｒ１３４」というタイトルと演出上仕方がないのかもしれないが、あまりにも冗長過ぎて不自然に思った。また、洸太がマリアを鎌倉の名所に連れて行くが、思い出の場所が分かっているのならば最初に連れて行くべきではないかと矛盾を感じた。洸太の変わっていく姿はよく描けていたが、洸太と弟、マリアと夫、それぞれの約束の部分をもう少し丁寧に描くことでより味わい深いドラマになったのではないか。

（ＮＨＫ側）

マリアは亡き夫にバイクで湘南を案内してもらう約束をしていたため、バイクなど乗り物には乗りたくないという思いが

あった。彼女が歩くことにこだわったところにそういった思いを込めたつもりだ。また、今回ドラマの中では、音楽や登場人物の心情にあわせていろいろな名所を取り込みたかったので順番にはこだわらなかった。

○　国道 134 号線沿いの湘南ならではの景色を楽しめた。1 時間という限られた時間の中で、マリアと夫、洸太と弟を絡めるために、ストーリー展開に多少無理があったが、ほとんどの場面に海があり、不思議とリアリティーを感じることが出来た。マリア役の女優の自然体でチャーミングな演技にも引き込まれた。また、海というと青空を想像しがちだが、今回は曇り空から物語が始まったのがかえってよかった。画面の右下に地名を紹介していたことも分かりやすくてよかった。最後に洸太とマリアが漁港の人たちと触れ合うのを見て、今回のドラマはさまざまな人々との出会いで主人公が変わっていく姿に重きを置いていると思い、やはり人を育てるのは人と自然ではないかと感じさせられた。

○　地域ドラマには地域の魅力を紹介する役割があると思うのでそういう意味ではよい取り組みだと思った。三浦大輔さん、池田エライザさん、ベッキーさん、石原良純さんなど、豪華なキャストを出演させたのはとてもよいことだと思う。地元の風景と、よく知っている出演者が一緒に映っているとその地域の方にとても喜ばれるのではないか。湘南の名所を右下の字幕で紹介したのは、湘南についてよく知らない人たちにＰＲする意味では、観光案内的な説明にならないギリギリのところだったかと思う。映像のせいか、昭和の古い印象を持ち、あえてねらっているのかと不思議に思いながら見始めたが、スマートフォンで英語を翻訳させて会話する場面があり、最初の違和感はなくなった。葉山町のＳＮＳが出た場面は、やや唐突な印象を受けた。

○　１時間の番組は見るのが大変なこともあるが、今回のドラマは展開が気になって途中からどんどん引き込まれた。洸太が最後に弟とキャッチボールする約束を果たし、ドラマはハッピーエンドで終わり、心温まるロードムービーとして楽しめた。バーの店長役の三浦さんやワカメ漁師役の石原さん、逗子の浜辺にいた女性役のベッキーさんの起用は視聴者にとってドラマを身近なものにしていたと思う。前半では、洸太とマリアがお互いに日本語と英語が理解出来なかったのに、終盤で、洸太がマリアの夫に変装し、急に発音もよく英語でマリアに話しかけたのもあまり気にならなかった。洸太が変装したジャックを本物とするために不可欠な演出だと理解できた。

○　全国の視聴者に江の島から葉山までの道のりについてどのくらいの距離なのか、どういうニュアンスでこの物語が成り立つのかといったことが、どの程度伝わるのか疑問に思った。ただ、マリア役の女優の存在はこのドラマにいろいろな効果をもたらしていたと思う。頻繁に日本語字幕が入ったが、日本人の俳優ならば気恥ずかしくて言えないことも字幕で見せることで、見ている人の目に焼き付ける効果があったのでないかと感じた。マリアと洸太がバイクで走る場面には違和感があった。マリアが青春時代にもう一度戻るという意味ではもっと徹底的にプレーバックしたほうがよかったのではないか。その一方で、今回のような演出のほうがいろいろな見方ができるとも思えた。キャッチボールをキーワードに信頼と絆を表現したのは、昭和のやや古い感覚ではないかと気になった。

（ＮＨＫ側）

幼いころにキャッチボールの約束が果たせなかったことが物語の一つの要素になっている。幼いときに大好きだった兄と弟の関係に戻る、時計の針がそこから再び動き出すセレモニーとしてキャッチボールの場面を入れた。

○　地域の思いがこもったドラマであることはよく分かった。地域局の役割はいろいろあると思う。災害時の取材や情報発信する役割を含めて、今後はさまざまな人が複数の役割を担っていくことが求められているのではないか。地域局から発信されるさまざまなニュースや番組の品質をできるだけ均等に維持して向上させていくためには、各放送局がいろいろな経験を積んでいくことが大切ではないか。それがＮＨＫの全国の地域局のレベルアップにもつながると思う。地域ドラマはそうした手段の一つになるのではないか。

＜放送番組一般について＞

○　８月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「“駅の子”の闘い～語り始めた戦争孤児～」を見たが、実際に体験した方の言葉は非常に重みがあると感じた。

○　８月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「ノモンハン　責任なき戦い」を見た。100歳を超えた方の取材もなされ、当時を生きた証人が高齢になっていく中で取材する苦労も感じさせられた。また、日本の資料だけでなく、当時のソ連の映像資料なども丁寧に発掘し、今になって検証されたことも出てきていた。非常に無謀な計画や

責任の所在のなさのもと、太平洋戦争に突入していった流れや位置付けがよく分かった。どこに責任があったのか掘り下げるのは難しいだろうが、多方面から検証する必要性を改めて感じさせられた。生きている方々の証言がどんどん取材しにくくなっている中で、これからもＮＨＫの役割が重要になってきていると感じた。

○　ＮＨＫスペシャル「ノモンハン　責任なき戦い」を見た。番組をきっかけに、昔読んだノモンハンに関する本を改めて読み、番組への理解がより深まった。敗戦に至る日本軍の組織的な要因、教育や新聞・メディアの問題などを語り継いで過去から学ぶことは多いので、今後もこうした番組を続けていってほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「ノモンハン　責任なき戦い」、９月２日(日)のＮＨＫスペシャル「未解決事件Ｆｉｌｅ．０７　警察庁長官狙撃事件　ドキュメンタリー」、９月８日(土)のＮＨＫスペシャル「未解決事件Ｆｉｌｅ．０７　警察庁長官狙撃事件　ドラマ　容疑者Ｎと刑事の１５年」(総合 後 9:00～10:30)は丹念な取材をしていてすばらしかった。

○　ＮＨＫスペシャル「未解決事件　警察庁長官狙撃事件　ドキュメンタリー」、「ドラマ　容疑者Ｎと刑事の１５年」はドキュメンタリーとドラマが連携しており、よい取り組みだったと思う。ドキュメンタリーだけでも事件について十分振り返ることができたが、ドラマを見ることで、この事件に初めて触れる人でもその全体像がよく分かったのではないか。今後もドキュメンタリーとドラマが連携した番組づくりを続けてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「未解決事件　警察庁長官狙撃事件　ドキュメンタリー」、「ドラマ　容疑者Ｎと刑事の１５年」を見た。先日、オウム真理教の元幹部の死刑が執行され、どこか割り切れない嫌な気持ちを抱えながら番組を見たこともあって、衝撃を受けた。財務省の公文書書き換え事件や他の省庁のさまざまな問題、上場企業の検査データの書き換えなどが続いているが、大きな組織が正しく運営されていないのではないかという怖さを改めて感じた。ドラマでは地道に努力する主人公の刑事、同じチームで捜査していた同僚の一生懸命な様子に救われたが、未解決事件とはいえ、何らかの希望につながるような番組であればなおよかった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「未解決事件　警察庁長官狙撃事件」はドキュメンタリーと実録ドラマで２回に渡って放送した。未解決に終わった経緯に最大限迫り、現状と深まる謎の部分を

ドキュメンタリーと実録ドラマで伝えた。今後こうした番組を制作する際には、視聴者にどういったメッセージを紡ぎ出せるのかといった視点も考慮して番組を制作していきたい。

○　７月２２日(日)の明日へ　つなげよう　復興サポート「放射能汚染からのふるさと再生～福島・浜通り」を見た。福島県浪江町、富岡町、飯舘村、南相馬市の住民たちが、地域の再生について話し合う様子を取り上げた番組だった。暮らしをどう再建すればよいのか、過疎は日本全体の問題でもあるので関心を持って見たが、地域の活性化と高齢化への支援がマッチした取り組みが紹介されていてよかった。一人一人が役割を認識し、生きがいを見つけ、住民同士でつながることの大切さや、自分たちが出来ることに気づき、行動を起こすことの重要さに気づかされた。こういったことが各自治体で議論され、課題を抽出したことが今後どのような取り組みに生かされるのか、継続して検証してほしい。

○　８月１５日(水)から３日間放送された、とちぎ６４０シリーズ「終戦７３年　戦争を語り継ぐ」を見た。９０歳の保育士の方による戦時中の教育の話、ハンガリーから亡命してきた男性の平和への思い、被爆者の方が高齢になった被爆者の会を解散した話などが紹介された。中でも保育士の方は当時の子どもたちの詩や作文を紹介しており、戦争を知らない世代によい企画だと思った。

○　８月２６日(日)の目撃！にっぽん「配属先は“応援団”？　～鷺宮製作所　新人たちの夏～」を見た。都市対抗野球で応援団に強制的に参加させられる新入社員の物語で、いまだにそんなことがあるのかと驚いた。エンジニアとして入社した人が応援団に入り、週３日、昼休みも練習させられ、理不尽さが彼らの表情にも表れていたが、最後は相手チームの２万人の応援団に対抗して、応援団として奮闘する姿が描かれていた。やりたくないことにもチャレンジすることで、仕事においても難しい問題に直面したときに乗り越える力を身につけることが大切だといったメッセージが伝わってきた。丁寧に取材されており、日曜日の朝に見るのにふさわしいよい番組だった。

○　８月２９日(水)の歴史秘話ヒストリア「武田信玄“甲陽軍鑑”が語る真実」を見た。番組の画面右上にその場面のサマリーを伝えるような文章が出ていたが、番組の内容を理解し、歴史的事実を把握するのに大変役立った。番組では、後世の人による創作ではないかと言われていた「甲陽軍鑑」について、歴史学者ではなく、国語学者が日葡辞典と照らし合わせることで、それが戦国時代に書かれたものであることを特定していったエピソードや、信玄の家臣が「甲陽軍鑑」を残すことに人生

をささげたことなどが紹介され、大変興味深かった。武田信玄は死んでしまったが、その生きた証しを残そうとした人たちのおかげで、現代に生きる私たちが信玄に思いをはせることが出来るのは大変すばらしいことだと思った。今後もこのように歴史上の人物にまつわる知られざる話などを取り上げた番組を制作してほしい。

○　９月２０日(木)の「いば６」を見た。自民党総裁選の結果を報じる中で文字に間違いがあり残念だった。ＮＨＫを信頼して見ているので、ぜひ今後はそのようなことがないように気をつけてほしい。

（ＮＨＫ側）

夕方の情報番組では編集責任者をはじめ、複数で確認をしているが改めて徹底するよう伝える。

○　「首都圏ネットワーク」の枠内企画「ストップ詐欺被害！私はだまされない」はとてもよくできていると思う。著作権上難しいのかもしれないが、銀行など公の場で流すことはできないのだろうか。

○　８月２２日(水)のスペシャルドラマ「太陽を愛したひと～１９６４　あの日のパラリンピック～」(総合　後 9:00～11:10)を見た。非常によかったが、７０分ではもったいないと感じた。主人公の医師・中村裕さんがイギリスから帰ってパラリンピック開催にたどり着くまでがドラマの中心だったが「太陽の家」を作る過程において、実業家の立石一真さんとの話は企業の社会的責任を考える上でも、もっと丁寧に描いてもよかったのではないかと感じた。

○　ドラマ１０「透明なゆりかご」を見た。妊娠、出産、産後と、それぞれドラマがあると思うが、番組を見て、子どもが無事に産まれることそのものが奇跡なのだと改めて感じている。今は少子化が問題になっているが、一方で人工中絶するケースも多く、その背景にさまざまな理由があることがドラマでも丁寧に描かれていた。それでもあまり重くならないのは、主人公・アオイの素直でまっすぐな視点で深いテーマを軽やかに表現しているからではないか。中高生、現役世代も含めて、若い世代への番組視聴にもつながっているのではないか。

○　「透明なゆりかご」は、現代の社会問題に切り込みながら、命の尊さを自然に考えさせられるよい番組だと思った。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」がいよいよクライマックスになり、毎日目が離

せない。多くの人は「連続テレビ小説」を見て、主人公やその周りの人たちの一生懸命に生きる姿に共感し、励まされていると思う。９月１９日(水)の「あさイチ」冒頭の“朝ドラ受け”で涙ぐむキャスターを見て、自分も同じ気持ちだったのでとても好感が持てた。

○　８月３日(金)の「なつやすみ　博物館で“にっぽん”びじゅチューン！」(Ｅテレ前 9:40～10:00)を見た。井上涼さんが緩いトークをしながら、歌とアニメを織り交ぜてさまざまな美術を紹介するユニークな番組で楽しめた。番組が博物館と連携し、実際に博物館を訪ねた井上さんが参加型展示を体験するなど、本来は子どもを対象にした番組だが、大人も楽しめる内容だった。博物館はおもしろいというメッセージが素直に伝わってきて、好感が持てた。

○　８月４日(土)のＥＴＶ特集　シリーズ　アメリカと被爆者　第１回「シュモーさんを探して」を見た。アメリカ人のフロイド・シュモーさんが原爆で家を失った被爆者のために家を建てるプロジェクトを計画し実行する過程で、日米のボランティアを巻き込んで活動したことを当時の写真や音声、証言で描いており、番組に引き込まれた。シュモーさんは第１次世界大戦の兵役を拒否して、赤十字のボランティアとしてフランス難民の家を建てた経験から、広島の家プロジェクトを思いついたということだった。番組ではシュモーさんに影響を受けた人が思い出を語っていたが、みな良い顔をしており説得力があった。危機の時に人が人のためにどうやって立ち上がることができるのかということを具体的に示しており、希望が持てるよい番組だった。

○　８月６日(月)～８日(水)の「Ｑ～こどものための哲学」(Ｅテレ 前 9:00～9:15、9:15～9:30)を見た。子ども向けだが、声を担当している出演者や音楽、歌もよく、大人も楽しめるもので大変すばらしかった。ただ、番組名が「Ｑ」という一文字なので、家族で話題にしやすいようにもう少し工夫してほしい。

○　８月１３日(月)のミミクリーズ「なぜちきゅうはまるい？」を見た。全く解説を挟まず、自分で考えさせる番組のコンセプトがすばらしいといつも思っていたが、この回は夏休みだからなのか、総合指導の方が最後に出てきて「球の体積の公式“身の上に心配あ～るの３乗”を覚えたかな」と唐突に話しており、いつものミミクリーズの良さが生かされず残念に思った。

○　９月２日(日)のクラシック音楽館「ＭＡＲＯ’ｓセレクション　Ｎ響　伝説の名演奏」を見た。1986 年に放送された、スメタナ作曲の交響詩「わが祖国」の名演

奏に聞き入っていたのだが、曲が終わる前にふと画面を見ると右上に「スタメナ作曲」と表記されていて驚いた。さらに曲のタイトル字幕も「わが祖国から交響詩モルダウ」となっており、実際は「交響詩わが祖国からモルダウ」ではないのか。番組の途中で、作曲者名を訂正するお詫びの文言が表示されたがそれもかなり時間がたってからだったので、演奏そのものは大変すばらしかっただけに、残念だった。今後はこのようなことのないように徹底してほしい。

（ＮＨＫ側）

作曲家の字幕を間違えたことは大変申し訳なく思っている。
確認を徹底し、再発防止に努める。

○　７月３１日(火)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「桑田と清原　ＫＫ伝説～甲子園が熱狂した夏」を見た。今年は夏の高校野球１００回記念の年で、清原和博さんと桑田真澄さんに関する番組が民放を含めていろいろと放送されたが、この番組は桑田さんが１人で茨城県の高校を訪れたエピソードなど、あまり知られていない話がちりばめられており、すばらしかった。一方で、より人生経験を積んだ方の司会やナレーション起用を検討してもよかったのではないか。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年７月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、ザ・ディレクソン「ｉｎ　山梨」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　原　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）
委　員　岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
小野　訓啓（(株)めぶきフィナンシャルグループ取締役）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
仁衡　琢磨（ペンギンシステム(株)代表取締役社長）
宮田麻一美（万座温泉日進舘女将）

（主な発言）

＜ザ・ディレクソン「ｉｎ　山梨」（ＢＳ１　６月２日(土)放送）について＞

○　とても楽しく拝見した。地域社会への貢献という点で、視聴者のみなさんとともに番組を作るという視点がよかった。いろいろなグループがいろいろなアイデアを出したが、「おめでとうございます。山梨です♪」は、全員福引きで一等賞が当たるということなので、当たった人は大変うれしかっただろうと思う。地元の方は、周りから見ればとてもいいところを知っているのに、謙虚なせいか埋もれがちなところが本当にあるのだと感じた。若い人たちを受け入れて継承していく神楽の話などを見て、観光スポットを紹介するだけではなく、人に焦点を当てていくことが大事なのだと考えさせられた。優勝しなかったアイデアも地域の放送では紹介したとのことだが、こ

れをきっかけに番組が盛り上がり、裾野が広がっていくといいのではないかと感じた。今後、ＮＨＫが視聴者と共に楽しんで番組が作れればいい結果になるのではないか。ぜひ各地の取り組みを歌合戦のように一挙に見られればいいと感じた。

○　とても楽しく拝見した。若者のテレビ離れというＮＨＫの課題と、人口減少という地域住民の課題を同時に解決する新たな企画で、心ある企業と心ある市民の真の共同事業だと感じた。住民と企業がよい町にしたいという思いを持って、それぞれのスキルを全力で提供したからこそ今回の番組ができたのだと思う。優勝した企画「おめでとうございます。山梨です♪」が番組として実現するまでのテンポがよかった。番組で実施したツアー内容も充実しており、山梨をしっかりとアピールできていたと思う。視聴者の一人としてミステリーツアーを楽しく見ることができ、自分も行ってみたいと感じた。タレントを進行役に起用し、ツアーのスポット一つ一つを、人を中心に丁寧に描いたことで、ＮＨＫの価値を地域の人に知らせることができたのではないか。視聴者がこの企画に真剣に参画していたこと、番組を作るプロセスを視聴者の目線で丁寧に追っていたこともよかった。

（ＮＨＫ側）

どのようにして若年層との接点を持つかということはＮＨＫ全体の課題だが、この企画を通して、地域の人と共同作業することが重要であると学ぶことができた。甲府放送局では、「ハートプラザ」を地域の方に楽しんでいただく場所にしようという取り組みや、地域のために活動をしている方々と今後も常時コミュニケーションできるような取り組みを始めることも考えている。「共に作る」というのは「ザ・ディレクソン」のコンセプトだが、甲府放送局でもそのように、地域の方々と共に地域放送を作っていきたい。

（ＮＨＫ側）

新潟放送局で「ザ・ディレクソン」を実施した際の参加者とは継続的なつながりができている。優勝した企画以外も「新潟ニュース６１０」でミニ企画として実現させ、アイデアを考案したグループの方々にもスタジオに来ていただき、視聴者から好評を頂いた。そのような継続的なつながりによって、視聴者が地域の放送局に何を求めているのか、職員が考えるきっかけを頂けていると感じている。

（ＮＨＫ側）

多様な地域社会への貢献は経営計画の重点方針であり、地域にとって役に立つＮＨＫでありたいと考えている。これまでも、番組やニュースを放送するだけでなく、もっと地域の活性化に寄与できないかと取り組んできた。全国の各放送局は地域によって文化の背景や経済状態などそれぞれ違いがあり、さまざまな番組のトライアルを行っている。この番組を出発点とし、各放送局で独自の取り組みもしていきたい。

○　この番組は地域活性化の起爆剤になるのでないかと思い楽しく拝見した。地域住民が地域の魅力をもう一度見つめ直すところがすばらしく、参加者も若者が多くてバラエティーに富んでいた。参加者の中にはメキシコ人の留学生やドイツ人の夫妻もいたが、神楽など日本独特の行事を見たときに、自分の国との違いや文化的な比較なども聞けたら、さらに内容が深まったと思う。また、番組で選ばれた「山梨地域おこし協力隊」がより番組づくりに参加することがあればもっとおもしろかったのではないかと思った。

○　行政ではなく、ＮＨＫが「山梨の週末の人口を２倍にしよう！」という企画を立てたことはよいことだ。５時間の企画会議の末優勝した「おめでとうございます。山梨です♪」は、企画の中身とタイトルがとてもよかった。番組のターゲットである若い人たちと向き合うシリーズになるように感じた。企画のコンペを行うことで視聴者を多く参加させたこと、山梨の隠れた魅力を都会の若者に紹介できたことはよかったと思う。ただ、エンディングの反省会はなくてもよかったのではないか。それよりも、ツアーの参加者が喜んで帰る場面があったほうがよかった。「ザ・ディレクソン」というタイトルには、どんな意味が込められているのか。

（ＮＨＫ側）

番組の「ディレクター」と、アイデアとマラソンをかけた「アイデアソン」という造語をかけて、「ディレクソン」というタイトルをつけた。視聴者と一緒にものを作るというニュアンスも込めている。若者にＮＨＫを身近に感じてもらうということが企画の出発点でもあり、ＮＨＫが視聴者のアイデアを本気で番組にしてくれるということを示すのは、そのためによいことかと考える。また、ＮＨＫが場を提供することで参加者同士横のつながりもでき、その出会いが地域活性化の次のアイデアにもつながっていけばよいと思う。

○　今回の山梨の回に加えて４月１４日(土)、２１日(土)に放送した、使えるテレビザ・ディレクソン「新潟」(前後編)の回も視聴したが、採用される企画によってドラマや旅番組などさまざまなジャンルがあるのがおもしろく感じられた。落選した企画のアイデアもうまく取り入れて番組が作られていたのもよかった。しかし、導入部のアイデアソンの発祥についての詳しい説明は不要ではないかと思う。それよりも地域に密着してその独自性を取り上げた番組であるということのほうが大切ではないか。また、２５分という放送時間は短く、番組が盛り上がり、参加者のパーソナリティも見えてきたところで終わってしまったのは残念だった。この番組が長く続くことを期待している。

○　番組を見て、ＮＨＫもずいぶんおもしろいことをやっていると感じた。企画会議の５時間で、あれだけちゃんとしたものがアウトプットできていることがすばらしいと思う。以前、宇都宮放送局でも開局７０周年を記念して栃木発地域ドラマを作っていたが、地域放送局もさらにステップアップしていると感じた。この番組では、アイデアを形にするプロセスが丁寧に作られているところがとても印象的だった。地方創生では「産官学金労言」とよく言われるが、「言」が地方のマスメディアだと思う。このような番組は地方創生にも役に立つと感じた。メンバーの交流が番組放送後も続いていることもすばらしいと思う。この番組でできたものが一つの種になり、そこから新しい芽が出て木が育つようなことをそれぞれの地域放送局でやることが大切だと感じた。

○　楽しく視聴した。番組を見て、自分の地元ならばどういうところをウリにするだろうかと考えた。都心に憧れて地域から離れていく傾向のある若者が、地元愛を深めるきっかけにもなるのでないかと感じた。企画会議では若者たちの意見が多かったが、地元から一歩も外へ出ず、その県で生まれ育った高齢者もたくさんいると思う。そういった人たちの意見を若者たちが聞き、その県のよいところをさらに知ることも大切ではないかと思った。例えば、「山梨の週末の人口を２倍にしよう！」というテーマを７０歳以上の高齢者が聞いたときにどういう意見を持つのだろうかと考えた。今回はあえて若者だけを参加者として集めたのか。

（ＮＨＫ側）

地域によって抱える課題も違うため、その回のテーマにふさわしい人を集めている。また、アイデアソンに親和性のある人たちは３０～４０代ぐらいなのではないかと考えている。ずっと地元で暮らしてきた高齢者にも参加してもらうとよい

のではないかという意見もあるが、テーマや企画ごとに適切に検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

今回番組内のツアーで取り上げた棚田や農業、神楽を営んでいたのは、その地域を支えている６０～７０代の方々だ。今後は企画会議の参加者として高齢者の方を選出することも含め、新たな企画を考えていきたい。

○　視聴者参加番組としておもしろいと思った。潜在的な魅力を掘り起こす、地域性のある、個性のある番組として評価したいと思う。番組では定番の温泉、フルーツだけでなく、知られざるスポットも紹介されたので、恐らく山梨県民も知らなかったのでないかと思う。４月に放送された新潟の回では、反面教師として新潟の魅力を見直すという手法がおもしろかった。最後にさりげなく新潟の特産物をＰＲする構成もよく、新潟県民が誇りを持てる内容だと思った。一方で、どちらの回も選ばれる企画が最初から分かってしまい残念だった。今後全国の放送局に広げていくということなので、番組で出たアイデアは単発で終わらせず、次の番組でも生かしていってほしいと思った。

○　前代未聞の旅番組として、山梨の知らない部分をたくさん知ることができ、非常に楽しく拝見した。単にいい番組を作るためならばＮＨＫのディレクターが作ればいいわけであり、地域からの意見を吸い上げ、活性化するという点で非常におもしろい取り組みだと感じた。ただひとつ疑問を感じたのは、アイデアソンが地域を活性化するためのものなのか、番組を作るためのものなのかよくわからなかったことだ。テーマが山梨の週末人口を２倍にするというもので、無料の当たりくじをＮＨＫが乱発するのかと思ってしまった。実際には企画が始まると、それほど多くの人にツアーが当たったわけではないので、目的達成のためには当たった人が自ら山梨の魅力を発信する仕組みを作るなど工夫がほしかった。一方、地域を活性化するためのアイデアソンだとすれば、企画会議の場で相当多くのアイデアが出たはずなので、それをもっと生かす工夫がほしく、いずれにしても番組にする難しさを感じさせられた。しかし、４月の新潟の回では、アイデアソンの部分と番組どちらも新潟県民には納得できる内容だったと思う。新潟県民を元気にするというテーマに合っており、かなりとっぴなドラマではあったが、新潟の県民性が全国の視聴者に伝わったのではないか。どちらの回も楽しい番組ではあったが、アイデアを形にするおもしろさだけでなく、例えば２番目のアイデアをどう取り上げるかなど、アイデアソンのアウトプットの手法をもう少し考えると、さらに地域を活性化する活動、プロジェクトになるのではないか。

○　まず番組そのものについては、出てきたアイデアが絵葉書的ではなくてよかった。山梨では都市部への人口流出の半分以上が２０代女性と言われている。その理由を聞くと山梨には刺激的な場所、興味のある仕事がないそうである。それを知りながらこの番組を見ると、魅力がないのならば作ればいいという提起をされたように感じた。現状をみて嘆くのではなく、欲しいものを作るきっかけを紹介するのが、地域放送局の果たす役割ではないかと感じさせる大変意義のある番組であった。途中、限界集落のところでさりげなく平家の落人が集まって村を作ったというコメントがあったが、他にもそういう集落があると思うので、歴史的なストーリーをもう少し組み込めば、さらによかったのではないか。今後も、今回参加された方のネットワークを活用した番組つくりをぜひ期待したい。

（ＮＨＫ側）

今年度は全国１１局でイベントを開催し、番組を制作する予定だ。これまで参加した地域の人たちを集め、全国大会のようなことを開催するなど、参加者との継続的なつながりを模索し、地域の視聴者から必要とされるサービスをどう実現するかについてこれからも考えたいと思う。

＜放送番組一般について＞

○　西日本豪雨災害の報道を見た。ずっと青い枠が付いた形の報道が続いていたが、それをやめるタイミングについては取り決めがあるのか。またさまざまな災害を乗り越えて報道を続けていく中、今回新たに課題になったようなことはあるのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今回は、特別警報が１１の府県に出たという広範囲の災害で、どこで何が起きるかわからないという、取材体制や放送の体制について人の配置も含めて非常に大きな課題が残った。今回の豪雨災害報道についてはよく検証し、いかに災害を少なく減災できるか、防災につなげていくかこれから検討していきたい。その中で、やはり地域に住んでいる人たちは地域の放送局のアナウンサーの呼びかけに敏感に反応していただけるのではないか、地域放送の役割を改めて考えていきたい。

○　今回の報道でも、各地域放送局のアナウンサーが出てきて伝えていた。現地の視聴者にとっては、見慣れたアナウンサーが伝えてくれて心強かったのではないか。

○　気になっている報道が二つある。一つは西日本豪雨災害の報道について、被害の原因を行政など誰かのせいにしたくなるような報道が多く、復興のために努力している方々が報われないように感じている。被災者や支援者にとって本当に必要な情報を報道すべきではないか。体育館が使えないため終業式ができない、ボランティアが少ないといった負の面を強調するように感じられる報道には違和感を覚える。被災地でも知恵や工夫、思いやりで課題を乗り越えていることももっと報道してほしい。もう一つは熱中症の報道について、死亡者の数や、エアコンのある部屋に居ること、運動を控えることといった消極的な対処方法ばかりが報道されている。どうすれば子どもたちが部活を続けられるのか、もっと暑い国ではどう対処しているかなども報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

西日本豪雨災害では、避難所で生活している人たちにとって役立つ情報や注意喚起などを積極的に提供したいと考えている。熱中症対策では、十数年ぶりに４０度を記録する異常気象の中で、ＮＨＫも新しい報道のスタイルを考えなければならないと思う。熱中症で亡くなる方がこれだけ多いということは一つの災害ととらえ、注意喚起するということを何よりも重視している。指摘していただいたような受け止め方もあると重く受け止め、今後の報道の参考にする。

○　災害報道は公共放送の重大なミッションだと思う。今回の西日本豪雨災害の報道の中から好印象だったこととこれから考えたいことをお話ししたい。広島、岡山、九州などでは大雨特別警報が出ており、災害報道をずっと見ていた。倉敷の伊藤香織市長へのインタビューは、アナウンサーが「災害対策で忙しいところ申し訳ないですが」と最初に言って始まるほど、慌ただしい雰囲気の中でのものであったが、市長からは行方不明の方、救助を待っている人たちに「これからも夜を徹しやりますから、安心してください」という呼びかけがあり、事実を伝える以外にも被災者側からすると心強かっただろうと感じた。

○　６月２６日(火)の「首都圏ネットワーク」で「親の精神疾患　悩む子を支える」という特集があった。双極性障害の父親を持つ姉妹の話から始まり、自殺願望のあ

る父親に気を使い生活している姿に、ネグレクトなどとは違う親子関係を知らされ、見入ってしまった。親の精神疾患は子どもにとっても悲劇だが、偏見の怖さからなかなか外に訴えることができない。いつまでも苦労を抱えたままであり、親と自分自身の不安を訴える場所もない二重苦であることがよく分かった。このテーマは「クローズアップ現代＋」などでもっと深堀りしてもよい内容だと思った。

○　６月２６日(火)の「首都圏ネットワーク」で「いまどこに？　東京湾のクジラを探せ」を見た。体当たりの取材で、田所拓也キャスターが波の高い東京湾に小型船で出て、東京湾内で目撃情報のあったクジラを取材していた。番組キャスター自らが取材した点も、原稿を読むだけでない、人間性が見えてよかった。キャスターによるリポート、取材はどんどん入れるべきでないかと思った。

○　首都圏ネットワークで放送している「ストップ詐欺被害！私はだまされない」を毎回見ている。７月１８日(水)の「むすコール」「むすメール」のキャンペーンにはとても感心し、家族がつながり直すとてもよい方法だと感じた。放送を重ねていくことでさまざまな知恵が生まれるのだと思った。

○　６月１３日(水)の歴史秘話ヒストリア「“戦国最弱”小田氏治がゆく」を見た。戦国最弱の武将が茨城県にいたとは知らなかった。

○　６月２９日(金)の茨城スペシャル「“超絶技”だけで終わらせない～体操・宮地秀享～」はすばらしかった。都市圏ではなく地方に居住し、活躍している世界レベルのアスリートを各局が取り上げることはとても意義があることだと思う。

○　７月１日(日)のＮＨＫスペシャル　大江戸　第３集「不屈の復興！！町人が闘った“大火の都”」を見た。江戸時代、265 年間に大火が８９回、およそ３年に一度大火があったという江戸の町が、そのたびに拡大してにぎわいを増していった秘密を解き明かす内容で、非常に引き込まれた。６万人が亡くなったという 1650 年の明暦の大火の際には、それを検証し、町の中に防火地を設けるために、人々が郊外に大移動を行い、そこがまたにぎわうという構図など、防災という観点と江戸が拡大していく過程がＣＧを交えた映像で分かりやすく伝えられていてよかった。

○　７月１３日(金)のヤマナシ・クエスト「もっと知りたい富士山～“信仰”と“文化”を探る旅～」を見た。世界遺産になって５年を経た富士山を取り上げていた。番組の構造としては、４つの切り口で、地元の富士の湧水でできあがる池について、そして爆発時の溶岩でできた胎内樹型について、さらに富士講について、最後に登

山道が境内につながる浅間神社について、いずれも地元をよく知る人をガイドに紹介していた。ポイントが押さえられていてよかったと思うが、特に富士講については、富士山という文化遺産の構成資産として紹介されていたが、なぜ構成資産なのか、富士講がなぜ生まれ、どうして信仰が続いているのかといったストーリーにも触れてほしかった。また造詣の深い地元の方と番組の中で掛け合いができるようなキャスティングも考えてほしかった。７月２０日(金)に「地方病を撲滅せよ～山梨県民　不屈の１００年戦争～」と題し、通称「地方病」、正式には日本住血吸虫病という感染症を山梨県の医師や行政、住民たちが一丸となって撲滅したストーリーを取り上げるということだが、地域が一体となって、かつて感染症撲滅を成し遂げたことを、若い人たちにも改めて知らせるというのがよいと思った。最近の「ヤマナシ・クエスト」は、もう一度山梨を学びなおそうというタイトルが多く、今後も期待している。

○　７月１５日(日)のさわやか自然百景「北海道大学」を見た。番組の題名どおりに、自然豊かな大学構内のさまざまな花や樹木など、さわやかな自然を紹介していた。カラスがエゾリスを襲うところ、オシドリのつがいの仲むつまじい様子など、生き物たちの普段は目にすることのできない生態なども見られてよかった。地面に穴を掘り、巣を作るホクダイコハナバチを紹介していたが、「ホクダイ」とは北海道大学のことか説明がなかったので疑問に思った。また、冒頭にクラーク博士の胸像の映像にコメントがないのも気になった。

○　７月１９日(木)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中で和久田麻由子キャスターと高瀬耕造キャスターから熱中症の話があった。「ボランティアの方がたくさん来られていますが、本当に暑いですから体に気をつけてください。皆さんは一生懸命やっていますから無理をなさらないで下さい」といった趣旨のことを言われていた。それが自然で、温かい感じで話していたのが好印象だった。

大災害がこのところ続いていることを教訓にし、日本を災害からきちんと守る国にしようという計画を政府が策定している。その一つが「国土強靱化計画」だ。私たちはマスメディアで報道されないものはどうしても忘れてしまいがちなので、ＮＨＫの番組の中でもそういうものを検証してほしい。行政の動きだけでなく、私たちがどうすべきかということも含め、テーマとして取り上げてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

現場に意見は伝える。「国土強靱化計画」などの防災計画、治山・治水の計画などについて検証するような番組も今後検討したい。

○　「ハートネットＴＶ」で最近は特に社会的な問題をいろいろな角度から取り上げたシリーズが放送されている。７月１１日(水)の「遺族の葛藤～娘を殺した男からの手紙～」は小さな娘を殺された父親が加害者からの手紙を読むかどうかという、中身の濃い考えさせられる番組だった。また、６月２８日(木)の「北朝鮮　忘れられた“日本人妻”～その人生の断片を語る～」を見た。６月１２日には歴史的な米朝首脳会談があったが、番組ではその２日前にピョンヤンでフォトジャーナリストの林典子さんが北朝鮮に残された日本人妻たちがどんな思いで日本を離れ、何を支えに生きてきたのかを取材していた。８９歳の井出多喜子さんは５５年前に親から猛反対される中、北朝鮮に渡ったが、取材中も特に日本に帰りたいとはおっしゃっていなかった。しかし亡くなったと聞き、あらためて取材班が家を訪ねると、井出さんが亡くなる前に夫の横にお墓を作るのを嫌がり、最後に着物が着たいと言っていたと娘が語っていた。里帰り事業で一度だけ日本に帰ったときに同級生と担任の先生に会い、プレゼントされた着物を最後に着たいということだった。日本に帰りたいと言わなくても日本のことを思い続けている人たちがいる。歴史に翻弄され生きている人たちを丁寧に伝えていくことで考えさせられることがたくさんあると思った。

○　６月３０日(土)のスーパープレミアム「桐谷健太　熱帯の氷河キリマンジャロに挑む」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。旬の俳優が登山に挑む番組かと拝見したが、登山に至るまでの間が長く取り上げられ、さまざまな視点から示唆に富む内容であった。まずマサイ族の暮らしと自然との共生について番組の３分の１ぐらいが割かれていた。自然保護区の中で、人口が大幅に増えたマサイ族と、自然の動物たちとの共存という問題である。さらにキリマンジャロの氷河がどんどん溶けているという世界的な温暖化の問題や、キリマンジャロ登頂にあたっての気象情報を日本の気象予報士から得るという話題も紹介され、登山の前にさまざまな知識が得られて楽しめた。そして、いよいよ登山ということになったのだが、過酷な部分もあったが、例えば毎年どのぐらいの人が登頂しているのか紹介するなど、この登頂がどの程度大変なのかもう少しわかりやすく伝えてほしかった。番組のねらいがどこにあるのかやや疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

単なる冒険ものにはしたくないという桐谷さんの思いもあり、彼自身がキリマンジャロがどういう山かを理解する過程を大事にした結果、ご指摘のように少しねらいが明確に伝わらなかった面も、演出・構成上あったかもしれない。登頂がどれぐ

らい大変なのか、どのぐらいの人が登っているかなどの情報が十分でなかったという意見は担当者と共有したい。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」を子どもたちと楽しく見ている。おもしろいが、どこかで見たような話もあると感じる回もある。

Ｅテレの教育番組はすばらしい。「デザインあ」「ミミクリーズ」「おはなしのくに」「おはなしのくにクラシック」は、子どもたちが短い時間で楽しみながら各教科の素養を身につけられる。最近の教育番組は昔よりもよく工夫されており、大人も楽しく見ることができる。「Ｑ～こどものための哲学～」は、ＮＨＫならではの哲学を取り上げた内容が興味深く、今後も継続して放送してほしい。

○　自分の周りにいる若い人たちに聞くと、ＮＨＫは堅いイメージがあるが、「将棋フォーカス」など、さまざまな専門分野に特化した番組はおもしろいという。今の若者たちに最も人気のある職業はユーチューバーだそうなので、パソコンの使い方などを解説するユーチューバー講座の番組があれば若者たちも見るのではないか。日本の若者たちは、身近にスマートフォンやタブレットがあり、自分の世界がそこで完結していると感じる。そのような若者たちの興味を引くような題材を、専門分野に特化した番組で取り上げたら、ＮＨＫはもっと見られるのではないか。

○　７月６日(金)のニュース全般について申し上げたい。この日はオウム真理教の松本智津夫死刑囚らの死刑が執行された日だったが、「ニュース　シブ５時」「首都圏ネットワーク」「ＮＨＫニュース７」「ニュースウオッチ９」いずれも、西日本豪雨のニュースをトップで伝えていた。オウム真理教事件の一区切りでもあり、事件の重大性もあるが、現在進行形で、かつ人命、生活に直接関わるとして西日本豪雨災害を一番に取り上げたことは公共放送ＮＨＫのあり方として大いに評価したいと思う。一方で、福岡局のスタジオから男性アナウンサーが状況を報告したのだが、ひと言話すたびにうなずきながら話していたので、見ていて気になった。

（ＮＨＫ側）

ニュース報道は伝えるべきニュースが視聴者に届くように、余計な情報が伝わらないようにという育成をしており、指摘についてはきちんと伝える。豪雨災害では、それぞれの風土に寄り添った呼びかけを考えながら、命を守る情報を伝えるよう、きちんと指導していく。

○　豪雨の話が出たが、最近のテレビを見ていて、防災、減災は非常に大切だし、報道

しなくてはならないことだと思う一方で、ここ数日の熱中症に関する呼びかけについて、「命にかかわる危険な暑さ」という表現や、「不要不急の外出は避けるように」というコメントなども含めて、ここまで言う必要があるのかという印象も受けている。例えば、大雨の特別警報が出たときに、実際にどの程度の人たちが厳重に受け止めて避難をしたのか。熱中症については子どもや高齢者などにとっては命に関わる危険な状態ではあるが、やればやるほど、視聴者に意味合いが弱まって伝わってしまう可能性もある。特に今のようなネットやＳＮＳ社会の中で、注意喚起をしておかないとあとで何か言われるのではないかと、必要以上に多めになってしまうのではないか。気温３８度で、本当に命に関わる方もいるとは思うが、本当にハイキングやトレッキング、運動部は一切活動してはいけないのか。これはこれで複雑な問題をはらんでいると思う。

（ＮＨＫ側）

熱中症への注意喚起で命に関わるという表現を使ったのは初めてだ。それだけ気温の状況、熱中症で亡くなられた方、病院に搬送された人の多さを踏まえて報道しているが、いただいた意見も踏まえて検討していきたい。

○　熱中症報道に関連して、暑さで有名な山梨、群馬では、生活実感で申し上げると、「日本最高気温です、３８度です」といわれているが、実際に体感、あるいは生活場面での温度は４０度を超えることもある。標準値ということで観測地点での温度を知らせるということは大事だと思うが、もし命に関わるということを言われるのであれば、実際に体感される温度も標記したほうが説得力が高まるのではないか。気象観測地点の温度だけではなく情報をつけ加えることについても検討してほしい。

○　ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮを楽しく見ている。６月１３日(水)に放送されたＳｉｄｅ ｂｙ Ｓｉｄｅ「地元ハーブで安定経営を～カンボジア～」(ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮ 前 10:30～10:58)は、カンボジアに渡った日本人の女性医師がハーブティーなどを利用して現地ならではの医療を繰り広げる内容だった。

６月１５日(金)のＤｉｒｅｃｔＴａｌｋ「バーヴォ・ヤルヴィ　ＮＨＫ交響楽団首席指揮者」(ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮ 後 8:40～8:55)は、ＮＨＫ交響楽団の指揮者パーヴォ・ヤルヴィさんのインタビューが大変すばらしい内容だった。ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮは良質な番組が多いので、優れたものは日本語化し、国内向けに放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮと国内放送用の番組を相互に連携しながら放送するなど、取り組みを進めている。これからも一層進めていきたい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年６月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、１５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、長野放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、知るしん　信州を知るテレビ「地方議会“崩壊”」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　　山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員　　岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜知るしん　信州を知るテレビ「地方議会“崩壊”」
（総合　５月１８日(金)放送　長野県域）について＞

○　高齢化や過疎化の問題は小谷村だけの問題ではないと思われる。番組では小谷村の村議選で立候補者が少なく告示日の当日になって再選挙が避けられたという事例とともに、過疎化の問題や議員報酬の低さなど、地方議員のなり手不足の背景も分かりやすく説明していた。一方、飯綱町の政策サポーター制度は、子育て世代が地方政治に参加して身近な提言をすることができ、政治との距離が近くなるよい制度だと思った。このシステムは長野県内のほかの自治体にも参考になるのではないか。

○　「知るしん」は地域や社会の問題を提起した上で、先進事例を紹介しており、希

望につながるいい番組だと思う。今回も大事な問題を提起しているが、気づいたことをいくつか申し上げたい。１つ目は「地方議会“崩壊”」というテーマは、センセーショナルで飛びつきやすいが、全体から見て本当にそうだろうか。地方議員のなり手がいないというのは全国どこも同じで、どの地域も乗り越えているところを、どうしようもなくなっているという捉え方に違和感をもった。２つ目は、小谷村の議員のなり手がいなくて、告示日当日になって７４歳の方が立候補されたことを不幸のように捉えているが、社会から必要とされているということを肯定的に捉えることもできるのではないか。３つ目、飯綱町の議会改革は大変参考になった。政策サポーター制度や議会便りモニターなどは他の議会にも参考になる事例だった。４つ目、山梨学院大学の江藤俊昭教授が指摘していたことで、住民と議会と行政が一緒になって話し合う場を作っていくことや、女性や若者、移住者を巻き込んでいくことは、おそらく議会だけではなく、地方の町づくりにも大事な観点だと思っている。そこに高齢者も入れてもらうとなおよかった。

（ＮＨＫ側）

ご指摘は受け止める。小谷村の７４歳の女性は民宿を経営しており、体調の不安もあるため立候補を固辞されていたが、周りから立候補を勧められるなかで追い詰められていく姿を取り上げた。しかし、高齢の方が議員を続けなければならないことを多くの人に知っていただく中で、若い人の政治参加や新しい議会のあり方を考えるきっかけにしていただきたいと強く感じている。

○　地方では高齢化や人口減少、過疎化などで、地方議員のなり手不足が発生しており、定員割れや無投票が増えているということに非常に驚いた。首長選挙は対抗馬が不在で無投票ということはよく聞くが、議員選挙は再投票になるということまでは知らなかった。この番組は、地方議会の崩壊への警鐘を鳴らすものとして高く評価したい。小谷村の事例では、毎回無投票ということで、政策や行政の監視がなおざりにされているのではないかと感じた。議員報酬の増額や定数の見直し、土日夜間の開会など解決策はあると思うが、議員自体に魅力がないことには恐らく変わりがないと思われる。夜間や休日の開会という話があったが、実際にそのような事例があるのか、住民の傍聴者がいるのかなども取材してほしかった。その一方で、飯綱町の政策サポーター制度の導入は非常に画期的でいいと思った。住民の政治への関心を呼び戻す制度として一つの指標になりうると思う。国会や地方議会でも党利党略に沿った政治家が多い中、住民や議会、行政が一体化するという本来の民主主義のあり方としていい取り組みを紹介してくれた。なお、全国の町村議会議員の女

性比率は１割に満たないということだったが、過去には神奈川県大磯町議会で過半数が女性議員だということがニュースで取り上げられていたので、長野県だけではなく他県の事例も紹介すればよかったかと思う。

○　この問題は小谷村だけの問題ではないと感じた。現状における課題はかなり具体的に提示されており、人口およそ 3,000 人の村だそうだが、高齢化で、議員定数１０人のところ７人しか立候補がいないという事例から始まり、それを受けて安い議員報酬や定数の見直し、休日夜間の議会開催などの対策が挙げられていた。ゲストの江藤教授によると、そうした対策が何もなされていない自治体が３割以上もあるそうだ。そのような暗い話の一方で、飯綱町では、政策サポーター制度を取り入れるなど、市民の意向を議会に反映させることから政治参加の意識を高め、女性の参画を進めることにより、議員の輩出へとつなげるといった試みが取り上げられていた。地方の自治体なりに対策を考えていることはよくわかった。日本の総人口は年々減る一方で、高齢者の割合は増えているが、そういった人口の変化の影響をまともに受けているのが地方なのではないか。これは地方の自治体だけで解決できる問題ではなく、やはり国の問題として、大きく取り上げて、政治の力が働かないといけないと感じた。そういう意味でも、今回番組で長野から現状の問題点を具体的に提言してくれたことは大変よかったと思う。

○　番組を見て、地方議会の危機的な現状をよく把握することができた。都市と比較すると地方のほうが身近な政治に関心が高く、地区から議員を出す意味でも選挙に関心が高いことも事実であり、そのような姿こそ真の地方議会の姿だったのではないか。しかし小谷村の現状は魅力のない議会や議員のなり手不足といった問題が深刻化しており、住民自治の危機を感じた。一方で、飯綱町の政策サポーター制度の紹介は希望を与えるものであり、ほかの自治体に対して影響を与えられるような番組構成だったと思う。地方議会が危機にひんしていることは事実だが、議会を変える手掛かりになるという期待も持っている。番組の最後に「総力戦」という言葉があったように、若者、女性、移住者など、さまざまな人が参画できる新たな議会作りの展望も感じられる魅力的な番組だった。もっと若い人々の意見も紹介していればさらによかったと思う。

○　知らなかった事実が大変多く、長野だけでなく全国でも放送してほしい内容だと感じた。地方議会の現状がここまで危機的状況なのかと驚いた。地方議会の議員の月収額を具体的に数字として示されたことで、その大変さがよくわかった。これは議会の問題だけではなく、社会の仕組みの変化の問題にもつながっているのではないか。例えば、以前はよく機能していた子ども会などの自治会がどんどん機能しな

くなっている。また、今後高齢者が増え若者が減っていくことで問題が深刻化していくだろうと考えると、選挙の定員自体も狭い地域で１０人の議員を出し続けることが正しいことなのか、といったさまざまな問題提起をしてくれた番組だと思う。そんな中で、飯綱町の政策サポーター制度の例を取り上げたことは非常に意味のあることだ。議会に対する関心が低いのは「どうせ変わらないだろう」という思いからだろうが、実際に自分の意見によって変化があれば、住民の意識の持ち方も変わると思う。このような事例は、いかに若い人たちを地方自治に引き入れていくかということを考えるきっかけにもなると思うので、もっと放送してほしい。

○　番組全体としては、ＮＨＫらしく細やかに取材されていてわかりやすかった。スタジオでの解説部分も問題提起から対策までバランスよく紹介され、ゲストの江藤教授のコメントも分かりやすく、司会進行もスムーズで、とても興味深く見ることができた。ただ、取材部分のカメラの映像が一部揺れていたのがちょっと残念だった。これからもこのように地域に根付いた番組制作を続けていただければと思う。

（ＮＨＫ側）

　地方は課題が深刻であるがゆえに、人口が減少していく中でもそれを乗り越え、新しい姿を模索しているところもたくさんあるので、飯綱町の事例は希望が感じられるものであったと思う。このような話題を全国にどう広げるのか、今後も番組を通じ提示していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月２日(土)のＮＨＫスペシャル「ミッシングワーカー　働くことをあきらめて…」を見た。４０代、５０代で働けない人が増えているという実態が取り上げられていた。求職活動をしていないので失業者のリストにも入っていない、そうした非正規労働者が日本には 400 万人もいると伝えられていた。転職を繰り返したり、親の年金に依存するしかないなどの非正規労働者の劣悪な労働環境を訴えながら、解決の糸口を探る番組だった。

○　ＮＨＫスペシャル「ミッシングワーカー　働くことをあきらめて…」を見た。介護保険が行き渡る中で、８０代と５０代の親子がともに暮らす世帯が社会から孤立してしまう「8050 問題」を扱った内容だった。ミッシングワーカーの男性の「社会から見たら自分自身は透明人間のようなものだ」という発言には胸が痛んだ。人

とつながるということや、家族のあり方を問い直していかなければならないと感じる内容だった。問題の解決には地域の住民を巻き込んでいくことが大切であり、今回視聴番組となっていた「知るしん」の地方議会の話題にもつながる。もっと掘り下げていってほしい問題だ。

○　５月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃　労働力激減　そのとき何が」は、2050 年には日本の労働力が 3,500 万人も減るといわれている中で、そのときにどうなるか、高齢者や外国人労働者の問題、さらにはＡＩやロボットの代替策まで視野に入れながら、徹底ルポで迫っていた。

○　６月１０日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ大江戸　第２集「脅威の成長！！あきんどが花開かせた“商都”」を見た。今も続くかつお節問屋の古文書をひもとくという内容で、江戸時代の商人がどのように経済的な窮地を乗り切ってきたのかを興味深く見た。経済的な格差解消に取り組む組織「町会所」を作り、有事の際に貧しい人に食糧を分配する仕組みを作ったり、水路の設備をしたりしたのは、政府ではなく町人だった。このことこそ、江戸が生き残った肝だったのではないか。それは地域住民の協力が必要になるミッシングワーカーの問題にも通じるものがあり、現代の問題解決のヒントになるのではないかと感じた。

○　５月２６日(土)の逆・転・人・生「えん罪・奇跡の逆転無罪判決」(総合 後 9:00～9:49)を見た。無実の罪で警察に逮捕され 300 日も拘留された男性の過酷な取り調べを再現し、えん罪の恐ろしさをまざまざと描いていた。こういうえん罪は今でもあるのではないか。どうしてこんなことが起こるのかその不条理さに腹立たしさを感じさせられた。

○　５月２７日(日)の明日へ　つなげよう　証言記録「宮城県石巻市　希望をつなげ壁新聞」を見た。東日本大震災当時、大手の新聞社は素早く多くの情報を伝えたが、被災地の人々にとっては絶望しか伝わらない情報だった。それに対して、地元の新聞社は被災地の人々に希望を伝えようと、手書きの壁新聞を被災地に貼った。支援物資や電気の情報など、まさに地元の人たちが知りたいニュースを伝えたそうだ。大手と戦うのではなく地方紙にしかできないことを見つめた視点にも好感をもった。それは地域放送局に求められていることにもつながるように感じた。

○　５月２８日(月)のクローズアップ現代＋「“貧困暴力団”が新たな脅威に」を見た。暴力団の構成員の顔が映っていて驚いた。暴力団排除はよいことのように思っていたが、構成員ひとりひとりの人権も考えさせられる貴重な番組だった。ＮＨＫは再

放送を含め、出演している一般の人の顔や実名を放送に出すことに関して最も配慮している放送局だと思っている。虐待されている子どもの顔や暴力団の構成員の顔が放送に出ていたが、ＮＨＫの中でどのような基準があるのか。

（ＮＨＫ側）

子どもの顔を出すかどうかは、本人の同意を前提に基本的に保護者の方と、施設に入っている子どもの場合は施設の方と徹底的に話し合う。テレビに出ることは本人が思っている以上の反響があり、今はインターネットが発達した時代なので想像もできないようなことも起こりうる。そのようなリスクも含め、配慮を怠らないようにしている。その結果顔を出すということになっても、実際にはＮＨＫの判断で控える場合もある。

（ＮＨＫ側）

すべての取材は実名、顔出しが基本であり、例外的に本人の希望があった場合には匿名の取材をすることになる。また、匿名取材の場合にはその真実性をどう確認するのかという問題が発生することもある。取材に応じていただいた方の不利益にならないように、個別に検討している。

○　６月４日(月)のクローズアップ現代＋「アラフォー・クライシスⅡ」は見応えがあった。リスクを超えたクライシスという表現は非常にインパクトのあるタイトルだった。親と、親の介護で仕事を辞めたきょうだいを支えるため苦しい生活を強いられている男性のケースなどが取り上げられ、よく取材されていたと思う。また、ＡＩによる婚活があることや、人と人との交流が希薄になってＡＩによるマッチングが増えているということには驚いた。いずれも社会へ警鐘を鳴らすよい番組だったと思う。他の番組の特集でも幅広く取り上げるべき課題で、今回はいくつかのテーマを取り上げていたが、１本ずつテーマを絞って構成しても十分見応えがあったのではないか。

○　５月３０日(水)の歴史秘話ヒストリア「神と仏のゴチャマゼ千年　謎解き！ニッポンの信仰心」は、どこの地方にいっても神社とお寺がいっしょにあるところが多いが、その日本の信仰心の 1,000 年のルーツを探る番組であった。神と仏をごちゃまぜにした信仰が、日本の長い歴史とともに形成されてきた経緯が紹介されていて、大変興味深かった。

○　６月４日(月)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ただこどもたちのために　かこさとし最後の記録」を見た。死の７週間前から４週間にわたる取材で、本人や家族の了承なしにはできなかった番組だと思うので制作者には敬意を表したい。最初のナレーションで「追悼番組ではない、絵本作家として書き続けたプロフェッショナル精神と一人の絵本作家の記録」とあったが、まさにありのままの記録として感銘を受けた。かこさんの衰えない創作意欲の原点はどこにあるのか、なぜ描くのか、という視聴者の疑問に呼応する番組の構成は見事だった。子どもは隅々まで観察する最も厳しい読者であるとの思いから、数多くの小さな道具まで丹念に描くという姿勢もすばらしかった。番組では娘さんのインタビューがたびたび出てきたが、奥様の思いを知ることができなかったのは少し残念だった。ただ撮影しているだけのように見えてナレーションが必要でないほど、時間を追ってかこさんの生きざまが見えてくる、だんだん終末期が近づくさまが画面によく描かれていた。最後の最後まで子どもたちのために絵を描くという、まさにプロフェッショナルな生きざま、魂を見せつけられたと感じた。この番組の名実ともに真骨頂ではなかったかと思う。本当によい番組だった。

○　「又吉直樹のヘウレーカ！」は散歩しながら見つける不思議なことに迫るという切り口に興味を引かれる番組だ。６月６日(水)の「なぜアリは行列するのか？」では、アリの豊富な種類や生態に驚かされ、身近な小さな生きものに関心を持つきっかけになった。多くの子どもたちにも見てほしいと感じた。

○　６月１３日(水)のハートネットＴＶ「障害と心の傷と～見落とされた虐待～」を見た。障害児の親の多くが子どもを虐待してしまうのは、そうせざるをえない状況にあるのだと感じさせられる番組だった。そこに支援の手が加わり、状況が改善する兆しも描かれていてよかった。

○　６月１０日(日)のＢＳ１スペシャル「在宅死　“死に際の医療”２００日の記録」を見た。家で安らかに死にたいという患者の願いをいかにかなえられるか。新座市に勤務する小堀鷗一郎医師を中心としたチームが在宅訪問の「老老医療」に取り組む 200 日に丁寧に迫っていた。全盲の娘が末期の肺がんの父をみとるシーンはとても胸に迫るリアリティーがあった。また施設に入ることもできない苦労や、かなわない在宅死の現状など、ますます深刻になってくる老後や認知症などについての問題提起となっていた。これからも続けて問題提起してほしい。

○　６月１０日(日)の美の壺・選「旅を彩る　駅弁」を見た。この日のテーマは「旅を彩る駅弁」で、案内人の草刈正雄さんがまずバッグの中からいろいろな形の駅弁の入れ物を取り出していた。その中で新幹線の形をした駅弁の箱が多いことに驚い

た。新幹線型の弁当箱にもいろいろあって、Ｅ５型、Ｈ５型など新幹線の型について説明があり勉強になった。駅弁ライターの望月崇史さんが食べていた人気のイカめしの弁当のあめ色のイカがとてもおいしそうで、車窓の風景も自分が旅をしているように感じられてよかった。昭和４０年に発売されたという神戸駅の牛肉の駅弁にも驚かされた。また、草刈さんが横川のアプト式の説明をするところで長すぎて早送りするような演出は、草刈さんのお茶目さがよく出ていてよかった。最後に駅弁専門の掛け紙デザイナーを紹介していたが、お弁当の掛け紙も大変おもしろいものだと思った。草刈さんの演技と番組の内容が大変スマートないい番組だった。

○　６月１５日(金)に再放送された、美の小壺「煙突」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 前 10:25～10:30)を見た。美の壷のエッセンスを５分で紹介する番組だが、短時間に職人の技、情景なども含めて、うまくまとめられたすばらしい番組だった。他の回で「欄干」「富士山」などもあったが、いずれもすばらしく、短い時間の中で美しさと丁寧さが感じられる番組だった。

○　ニュース報道についてお話ししたい。このところ目黒で５歳の子どもが親から虐待を受けて亡くなった事件、看護師が連れ去られて殺害された事件、東海道新幹線内で起こった殺傷事件など、連日報道される悲惨なニュースに心を痛めている人は私だけではないと思う。ＮＨＫでは朝は３０分に一度くらいの割合でニュースが報道されるが、悲惨な事件のニュースは目にするたびにチャンネルを変えたいという思いに駆られる。子どもたちがこのようなニュースを何回も目にしてどのように思うのかと心配になる。犯行の動機や方法を何度も聞くことで、そういう事件は普通に起こることだと思ってしまうのではないだろうか。一度ニュースを見て深く心を痛めて、何かできることはないかと感じる人は多いと思う。お花を手向けるなど具体的に動いている人たちのことをもっと報道することで、その事件の受け取られ方も変化するのではないかと思っている。事件のことを家族や地域の人と話して地域をよくしていこうとする部分は報道されず、事件のことや政府が行う会議などの表面的なところだけが報道されることでマイナスの影響を与えることにならないだろうか。

（ＮＨＫ側）

　このところ悲惨な事件が相次いだ。朝のニュースを例に挙げて指摘いただいたが、朝は４時３０分から６時　３０分まで３０分ごとにニュースの放送枠があるので、同じニュースが流れていると思われることはあるかと思う。ＮＨＫは悲惨な事件をなくさなければならないという意図をもって伝えて

いる。放送に当たっては表現にも工夫しながら報道しているということはご理解いただきたい。事件の事実関係だけを見ているのではないかという指摘をいただいたが、６月１３日(水)の「ニュースウォッチ９」では、目黒の事件で５歳の女の子が住んでいたアパートに全国から大人が花を手向けに来たことを取り上げた。無念さを感じている大人たちの心情を伝えることで、事件の特異性や再発防止にプラスになるように報道しているが、いただいた意見は現場に伝える。

○　1980 年代の終わりぐらいからＮＨＫのメジャーリーグ中継を見ているが、ここ最近の「ワールドスポーツＭＬＢ」は、ＮＨＫがこれまでに培ってきたメジャーリーグ中継の歴史を積み上げられたすばらしい番組になっていると思う。野茂英雄さんや松井秀喜さんなどの日本人メジャーリーガーが活躍するようになった時代を経て、メジャーリーグで活躍されてきた方を解説者として起用し、その中でいろいろなエピソードを交え、わかりやすく解説されている。これからもそのような番組を続けてほしい。

このほか「ドキュメント７２時間」「ノーナレ」「サラメシ」「アナザーストーリーズ　運命の分岐点」「こころの時代～宗教・人生～」「ＴＯＫＹＯディープ！」「新日本風土記」「プレミアムカフェ」「小さな旅」「球辞苑～プロ野球が１００倍楽しくなるキーワードたち～」など、いずれも歴史をきちんと掘り起こし、日本の今を切り取り、多角的な視点で作り上げられたすばらしい番組になっていた。これからもニッチと王道を混ぜたような番組を作り続けていただきたい。

○　日曜美術館をよく見ているが、全国各地の美術館の企画の紹介がとても参考になる。取り上げられるのは美術館ばかりだが、文学館や図書館でもすばらしい企画展がたくさんあるので、ぜひ取り上げてほしい。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年５月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２５日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１０人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、平成２９年度関東甲信越地方放送番組の種別ごとの放送時間について説明があった。その後、首都圏情報ネタドリ！「わかった！首都圏の交通リスク“ドラレコ”ビッグデータ独自分析」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長	山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員	岩佐　十良（(株)自遊人代表取締役）
	大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
	岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
	奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
	斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
	杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
	野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
	原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜首都圏情報ネタドリ！
「わかった！首都圏の交通リスク“ドラレコ”ビッグデータ独自分析」
（総合　４月２０日(金)放送）について＞

○　この番組は、気楽に見ることができて、あっという間に終わってしまった感じがした。各自のドライブレコーダーのデータから、急ブレーキ多発地点を割り出し、どの場所が危険なのか容易に見つけられたことには驚いた。トンネルに入る時に無意識にブレーキをかけることや、区画整理された幅広い道路の交差点が危険である

ことが紹介され、改めて納得した。ドライブレコーダーのデータから自分の運転の特徴を知ることも安全運転するためには良いことだと思った。ドライブレコーダーは、いざという時に役立つものだと思っていたが、犯罪の予防などだけでなく、危険な箇所を割り出すなど、さまざまなことに活用できるのではないかとあらためて思った。ゲストが「事故を起こすよりも安い」と言っていたが、１つ５万円ほどという金額がもう少し安くなれば、取り付ける人がもっと増えるのではないか。

○　新潟の小学２年生の女児殺害事件の犯人逮捕にもドライブレコーダーの映像が役立ったと聞いたが、先日、警察から別の事件について「ドライブレコーダーが車についていたら情報提供をしてくれないか」という連絡があり、ドライブレコーダーがいろいろなところで使われていると気づいたばかりだったので大変興味深く見た。今回の番組では、ビッグデータとして活用され、分析して分かることがあるというメリットばかりが紹介されたが、データが一元管理され、さまざまなところで利用できるようになるとプライバシーの問題など考えた時に恐ろしさも感じた。また、「ネタドリ！」という番組名の由来を教えてほしい。番組中に「ネタドリ！」という音声が入るのがやや気になった。

（ＮＨＫ側）

「ネタドリ！」という番組タイトルには２つのメッセージを込めている。取材者がネタを取るという意味と、視聴者が番組を見て、ネタを取るという意味だ。「ネタドリ！」という音声が気になるという指摘については、入れるタイミングなどを今後検討したい。

○　３万件のビッグデータを基に解析する手法、取材した視点を高く評価したい。道路管理事務所の情報をうのみにせず、解析したデータを基に、横断歩道で実測していたが、そういう手間をかけて検証したからこそ番組には説得力があったと思う。ドライブレコーダーのデータを分析し、チェックし、そこから自分の運転を修正できるという流れがわかった。ドライブレコーダーは事故後の検証用だと思っていたが、事前の事故予防にも有効だとわかった。将来的には車の標準装備にするべきだと思う。ＡＩの力は非常に大きく、今後幅広く活用が期待できると思った。

○　ビッグデータを活用することにより、危険箇所の洗い出しができるなど、ドライブレコーダーのデータの活用が進んでいる実態について総合的に知ることができる番組だったと思う。事故多発地点には、道幅が狭いなど、それなりの理由があることが実証され、今後対策が進めやすくなる将来が見えた。高齢者ドライバーの危

険な運転が問題になっているが、高齢者ドライバーは経験も豊富で自分の運転に自信を持っている傾向があると思うので、運転結果をデータで示されることで修正すべきところを素直に認められるのではないか。運転の診断サービスに加えて、日々のナビゲーター的な役割ができればおもしろいのではないかと夢が広がったが、実験中に運転者の一時停止が不十分だったところがあり、今後個人が特定され交通違反と紐づけられると別の課題も出てくるかと思った。番組ではさまざまな示唆があり、プライバシーの問題について今後課題がある点を彷彿とさせる構成にもなっていたが、いろんな話題を取り上げたゆえに、やや焦点がぼやけてしまったところはあると思った。

○　ドライブレコーダーは事件・事故にあった際に役立つと思っていたが、番組を見て事故の予防にも有効なことがよくわかった。ドライブレコーダーの具体的な値段を紹介していたのも良かった。スピードを出してはいけないという意識はあったが、落としすぎてもいけないということがわかって自分の運転を省みるきっかけになるような番組だった。急ブレーキ、急ハンドルの発生は、時速３０キロ以下の低速時が６５％だと紹介されたのも具体的で、今後注意しようと思った。高齢者ドライバーの問題について、一概に年齢で区切って免許を返納するのではなく、ドライブレコーダーで安全に運転しているかどうか診断するのはいいアイデアだと思う。

○　高齢者ドライバーの話題は興味深く見た。高齢者ドライバーの運転傾向をドライブレコーダーの映像から探ろうとする横浜市の取り組みによって、高齢者ドライバーの安全運転への意識が高まったことが紹介されていた。高齢化が急速に進む中で高齢者ドライバーの事故も増えるのではないかと懸念され、番組でも一時停止をしない高齢者ドライバーが多いことが紹介されたが、事故を少しでもなくすために今後も高齢者ドライバーに安全運転を意識してもらう番組は継続的に放送してほしい。ドライブレコーダーのデータから割り出した危険地点を首都圏の地図に落とし込んでいたが、それほど何か所かに集中している感じがなかったのは残念だった。

○　いざ事故にあってしまった時のためにドライブレコーダーを付けていたが、番組を見て、データを解析すると、事故の予防にも役立つことが改めて分かった。危険な道路の事故防止に向けた動きや高齢者の運転の話題は分かりやすく伝えていたと思う。高齢者ドライバーの課題として、自宅に近くになり、地理がよく分かるところで油断が発生し、急ブレーキ、交通事故が多いことなどが紹介され、身に覚えがあると気づかされた部分があった。最近は報道機関も防犯カメラやドライブレコーダーの映像を使う機会が多くなっていると感じている。プライバシー保護の観点からぼかしなどで気を使っていることは分かるが、ぼかしをしていても、身近な

地域に住んでいると場所や人が特定されるのではないかと不安だ。ビッグデータをきちんと管理されると一人一人の行動がすべて把握されてしまうのではないかという恐ろしさも感じる。

（ＮＨＫ側）

最近はドライブレコーダー、防犯カメラが事件、事故が起き、警察が捜査するときの大きな材料になると共に、メディアにとっても瞬間をとらえた映像として重要になることがある。その案件を報じるにあたり、映像がいかに重要で、放送に値するかどうか検討してから、放送すべきかどうかを考える。プライバシーに極力配慮し、報じるようにしている。指摘いただいたことは重要なことだと思うので、今後もドライブレコーダーや防犯カメラなどの映像を使用する際には、そもそも使うかどうか、使う場合にはどう扱うかについても十分に検討していきたいと思う。

○　ビッグデータを分析することで、多発する交通事故対策の原因の究明にもなり、運転者の安全運転診断ができるなどドライブレコーダーのさまざまメリットが紹介され、大変よい番組だった。急ブレーキ、急ハンドルが発生するのはスピード３０キロ以下の場合が６５％を占めており、スピードが出ていない場合のほうが事故率が高いというデータは貴重だと思った。ドライブレコーダーが１つ５万円ほどするとの紹介があったが、高齢者安全運転診断サービスなども受けられるので、安全が５万円で買えると思えば付けたほうがよいと感じた。ますます高齢者ドライバーが増えているので、特番を組んでもよいくらい重要な問題だと思う。ただ、高齢者には番組の進行が少し速すぎるのでないかと思ったので、もう少しゆっくり進行するか、番組を２回に分けてもいいと思った。

○　身近な道路の危険地点の話題や高齢者ドライバーの話題などを取り入れ、分かりやすい構成だったと思う。高齢者ドライバーの運転傾向のところで右に寄る傾向が強いという指摘があったが、それを指摘したところでその人が本当に改善できるのかについては疑問が残った。交通リスクについて問題提起をしたことはすばらしいが、改善案の提示があるとなおよかったと思う。

○　リスクを伝えるだけでなく、解決策の提示があってもよいのかと思った。解決策の一つはドライバーへの対応を促す内容、もう一つは道路管理者側への対応があるかと思う。植栽を外すことで見通しをよくした事例が挙げられていたが、個別の例

を挙げるだけではなく、交通事故防止につながる全体的な解決策を提示したほうがよかったのでないか。高齢者ドライバーに対する注意喚起、道路管理者への改善意識喚起、全般的な交通安全啓もうなどいろいろと取り上げていたが、地方都市は車がなければ生活できない実態もあるので、首都圏だけでなくそういった地域の情報や、これをきっかけにドライブレコーダーを付けようと思う方が、どこへ行けば装着できるのか紹介するとなおよかったと思う。また、いろいろなところがビッグデータを収集しているので、将来的にどのようなことができるのかその取り組みも紹介してほしかった。冒頭で司会の女性タレントがドライブレコーダーの値段を聞いて「高いですね、最初から付いていればいいのに」とコメントし、機能性と効能は認めながらも、水を差されたように感じられたのは残念だった。

（ＮＨＫ側）

指摘されたような、プライバシーの問題や具体的な解決策をもっと提示するような番組も今後考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　４月２１日(土)のＮＨＫスペシャル　シリーズ金正恩(キムジョンウン)の野望第２集「３９号室　外貨獲得の闇」、４月２２日(日)の第３集「核・ミサイル　隠された真意」を見た。映像に映し出される一つ一つが今、隣の国で現実として起きていることでありながらも、深く受け止めずに普段どおりに暮らして無関心であることに怖さを感じた。連日報道される米朝首脳会談の行方をしっかり見守りたいと思う。この番組をＮＨＫオンデマンドで見たが、第１集「暴君か戦略家か　禁断の実像」は途中で映像がカットされていた。許可が出なかったとのことだが、その経緯を教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

可能な限りインターネットでも視聴していただこうということでＮＨＫオンデマンドに載せているが、テレビで放送するのとは別にインターネットに載せるために新たな権利処理が必要になる。一部について著作権がクリアできなくても音声は聞こえるので、その映像にフタをして、掲載している。

○　５月６日(日)のＮＨＫスペシャル　ブループラネット　第１集「大海原　青い砂漠を生き抜く」を見た。国際共同制作で４年かけて、世界の海を極地から熱帯まで

撮影していたが、特に水中の撮影技術がすばらしく、小型カメラをサメやクジラの背中に付けて海の中を撮影しており、見応えがあった。ハダカイワシの群れに集まる何千頭ものマグロ、イルカの様子、死んだクジラに群がるサメなど、これまでに見たことのない映像で迫力があった。ＮＨＫでなければ放送できない番組だと思う。続編も楽しみにしている。

○　５月１２日(土)のＮＨＫスペシャル「仮想通貨ウォーズ～盗まれた５８０億円を追え！～」を見た。仮想通貨とは何かがよく分からなかったが、番組で仮想通貨やホワイトハッカーの追跡、犯人は何者なのか、ハッカーたちの攻防など詳しく紹介しており、少しだけ理解できた。まだ知られていない、あるいは隠された出来事、争点を掘り起こし、問題提起するＮＨＫの調査報道は見事で、説得力があると大変関心した。

（ＮＨＫ側）

　そもそも仮想通貨がどういう世界なのか、実感がわかないところがある。警察、財団などの公的なところが調べるのとは別にホワイトハッカーと言われる人たちが犯人を追いかけていて、それもなかなか分かりにくい世界なのだが、今回の番組では仮想通貨の説明ではなくて、その追跡劇に密着した。警察、財団がそのフォローをあきらめ、仮想通貨が換金されてしまい、事件は終わったように受け止められたが、換金されてしまってからもホワイトハッカーの犯人捜しは続いており、番組はその経過を放送した形だ。事態が動けば続編を制作したい。

○　５月２０日(日)のＮＨＫスペシャル「縮小ニッポンの衝撃　労働力激減　そのとき何が」を見た。労働力が不足し、不足する労働力をどう補うのかというテーマだったと思う。労働力が不足し、これまで経済を支えてきたさまざまな仕組みが成り立たなくなっており、高齢者や外国人が支える鍵になっていることを紹介していた。棺おけ型の人口ピラミッドになっていく初の事例として、日本がどのように解決策を講ずるのか問いかけられていたように思う。今ある福祉政策のあり方、その根本の見直しが必要であることについて問われているのだろうと思ったが、その部分の言及が全くされていなかったのは残念だった。移民政策についても、もう少し掘り下げた取り組みがあってもよかったのでないかと思う。人、もの、経済が、国境を越え自由に動いている時代に、国のあり方、経済を支えるさまざまな仕組みのあり方をどうするのか今後掘り下げて放送していただければと思う。

（ＮＨＫ側）　人口減少は、日本が抱える大きな問題の１つで、継続して取り上げなければいけない問題だ。どこを入り口にして、どのタイミングで見ていくのか難しいが、２年前のＮＨＫスペシャルの続編として、今回の番組では、労働力が減少する社会の未来を占う上で、高齢者と外国人労働者を取り上げた。人口減少社会が抱える問題は極めて多岐にわたり、日本の社会のあり方自体が今後は問われるだろう。今回の番組の中で、すべてを指摘することはできないので、労働力人口が減る時代の中で高齢者が働くことに安全の配慮が求められることは考えなければいけないという指摘をした。移民政策については、移民も含めた外国人労働力にどう向き合うのか現時点で提示したということだ。今後も日本が抱える大きなテーマに向き合う番組は制作していきたい。

○　４月２４日(火)のクローズアップ現代＋「郵便局が“保険”を押し売り！？～郵便局員たちの告白～」を見た。われわれの世代は郵便局に大きな信頼感があったので、不適正な営業をしていることに驚くとともに、高齢者詐欺に近いものがあるという印象を受けた。日本郵便の役員が「信頼を裏切るような行為が起こっているのは会社として深刻」「営業の目標があるからお客さまに転嫁することがあってはならない」と言っていたが、厳しいノルマを課されている現場と経営側とで大きな乖離(かいり)があると身につまされた。ゲストからは「郵便局と営業の現場が離れているのでないか」「郵便局が現場の実態をほとんどつかんでいないのでないか」「現場の声が本社に届いていないのが問題」というコメントがあったが、企業の倫理の問題は大きくなればなるほど原点をしっかりと考え、どこを向いて仕事をしたらよいのかも問われているような気がした。組織が巨大化することにより、実績至上主義が社会問題になっていると番組を見て感じた。

（ＮＨＫ側）

　クローズアップ現代＋「郵便局が“保険”を押し売り！？」はインターネットを活用する新しい形を目指した。「オープン・ジャーナリズム」と呼んでいるが、インターネットを活用し、どう番組を作るのかという一つのモデルケースだと考えている。ホームページに視聴者から寄せられた１通のメールをきっかけに、郵便局の不適正な営業について動画を制作し、放送前にインターネットで公開したところ、400 件

以上郵便局の内部関係者などから内部告発するメールが来た。それをいくつか取材し、インターネットで公開、さらに情報が寄せられ、またそれを取材し、それを元に郵政会社にも取材をした。郵政会社のインタビューも放送前にインターネットで公開したところ、郵便局内部の人から「言っていることが事実と違う」という指摘が来た。そういうものを全部合わせ、放送した形だ。視聴者の方からのいろいろな情報提供を積み重ね、番組を作るという新しい形で実態を掘り下げることができた。特に郵便局内部の方から多くの内部告発の声が寄せられたことが原動力となり、実態をあぶり出すことができた。放送後はさらに多くの情報が寄せられており、その数は900を超えており、取材を継続している。

○　オープン・ジャーナリズムのリスクについて、400通ぐらいの情報が寄せられたとのことだが、どのようにそれらの情報を精査して取材を進めたのか。たった一つの間違いですべての企画が台なしになる恐れがあるが、そのあたりのリスクはどのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

　インターネットを使って取材をする上で大きな課題だと考えている。フェイクニュースをＮＨＫが拡散するようなことがあってはいけない。今回は、来たメールを取材し、きちんと裏を取って確認し、取材したものをインターネットで公開した。インターネットを使った取材はさまざまな可能性を広げる一方で、危うさもあるので、いろいろなことを確認し、新たなやり方を切り開いている。今回オープン・ジャーナリズムをやって、かなり手応えがあったので、慎重に検証しながら可能性を深めていければと思う。

○　ＳＮＳを使い情報を得ることは取材側からすると予想外の内部告発みたいなものがどんどん上がり、今までの番組の作り方とはだいぶ違う切り口が出てくるのかと感じた。

○　「クローズアップ現代＋」は５月９日(水)の「ペットボトルごみがついに限界！？」や、５月１４日(月)の「“現金お断り”で暮らしが激変！？」、５月１６日(水)の「あなたの隣もごみマンション！？現役世代に広がる“孤立”」など、世の

中の大きな動きを時宜を捉え、短い時間で取り上げていて大変すばらしいが、世の中が大きく素早く動いていくことに不安も感じる。そんな中で救われるような番組が２つあった。

○　５月１８日(金)のドキュメント７２時間「島へ　山へ　走る図書館」は、スピードなどが優先される中で、スピード、効率とは真逆のような松山市の移動図書館の話題を取り上げていた。今どき移動図書館で借りる人がいるのかと思って見ていたが、２週間に１度、移動図書館が来るのを過疎地のお年寄りが楽しみにしていたり、東日本大震災後に移住してきた子どもの出会いの場となったり、５７年ぶりに同級生と再会するきっかけを作るなど、スピードや効率を追求するだけでなく、時間をかけて人とのふれあいを大切に育んできた様子が丁寧に取材されていて心打たれた。一見無駄とも思えるような時間の中でも、さまざまなことが育まれるのではないかと感じられる番組だった。

○　５月２３日(水)のあの日　わたしは～証言記録　東日本大震災～「福島県会津若松市　赤井光清さん」では、東日本大震災で福島県の大熊町から会津若松市に避難した８１歳の男性を紹介していた。赤井さんは、受け入れてくれた会津の人たちに恩返しがしたいと、小学校の通学路で交通整理のボランティアをしており、最初は車の運転手から怒られたこともあったそうだが、時間をかけてみんなに協力してもらえるようになったことが伝えられていた。その赤井さんが引っ越すことになり、ボランティア最後の日を取材していたが、お世話になった子どもが花束を持って行く様子や、やんちゃな子どもが会えなくなって寂しいと泣く姿など、子どもたちとの心のふれあいが５分という短い時間の中でしっかり伝えられており、希望が持てる番組だった。時代に合わせて何事も効率よく進めることばかり考えてしまいがちだが、人と人との心のふれあいを大切に感じられる、このような番組は、視聴率がたとえ低くても、続けてほしいと切に思った。

○　４月２５日(水)の探検バクモン「外務省　外交史料館」を見た。博物館、公文書館などは温度や湿度を２４時間一定に保つ必要があるので、普通は人やライトが入るのを断るのではないかと思うが、いきなり収蔵庫に入る映像が出てきて大変驚いた。導入として、チャールズ英国皇太子とダイアナ妃来日、パンダ一般公開、タイタニック号沈没事故など、一般の人にも親しみやすい公文書を紹介し、日米和親条約、日米修好通商条約など、外交史料館の展示室でもなかなか展示されない史料ばかりが出てきて、とてもワクワクする番組だった。特に昭和２０年のミズーリ号での降伏文書のサザランド参謀長による文書のエピソード、満州事変後の国連脱退のナンバリングなど、初めて知ることもあり、専門家でも楽しめる内容だったと思う。

また、途中で元公文書担当大臣の河野太郎外務大臣を出す演出も光った。今は公文書に関するさまざまな問題が取りざたされているので、とてもタイムリーな企画だったと思う。

○　４月３０日(月)のノーナレ「けもの道　京都いのちの森」(総合 後 10:45～11:30)を見た。京都に住み、兼業で猟師をする男性の生活をノーナレーションで紹介する番組だった。都市と森、ヒトとけものなど、いろいろな意味での“際”をとらえており、興味深く見ることができた。途中で男性がけがをしてしまったが、手術をせずに動物たちに向き合う姿に、人間にとって合理的に進んでいく現代の大きな流れとは異なる思想が感じられた。また、５月２日(火)の「“幸せホームレス”との１０日間」はお笑いで生活できなくなり、自分をネットショップで売り出した元芸人の１０日間に密着していたが、こちらもある種の“際”を捉えていると思った。すばらしい視点で番組を作っていると思うので今後も期待している。

○　５月１日(火)の茨城スペシャル「茨城ＭＩＣＨＩ知るべ～いばらきの“道”で新発見」(総合 後 6:10～6:40 茨城県域)を見た。茨城県内を通る国道を走りながら、その道にまつわる歴史や産業、観光スポットなどを紹介していたが、一本の道にもそれぞれ個性があることがわかり、意外な視点で地域の魅力を再発見できる番組だった。栃木、群馬にも続いている国道５０号線などもあるので、ぜひシリーズ化して３つの放送局が合同で制作することも期待したい。

○　５月５日(土)の土曜ドラマ「やけに弁の立つ弁護士が学校でほえる」を見た。学校というキーワードを見て、見逃せない番組と思い、期待を持ってドラマを見た。タイトルから主人公の若手弁護士が学校で起こるさまざまな問題をすっきりと解決してくれるのだと思ったが、実際見るとそうではなかった。例えば、第３回はバドミントン部顧問が毎日の仕事が大変すぎ、過労状態になり、練習中に居眠りしているときに生徒が大けがをしてしまうというもので、校長は事故の責任を正規職員でない顧問に押しつけ、退職させることで済ませようとするが、主人公が顧問の自宅を訪問し、学校を訴えるように説得したにも関わらず、最終的に顧問は退職することになるというストーリーだった。演出やストーリーについては疑問に思ったことがいくつかあり、答えが出ないままにエンディングを迎えたが、このドラマのおもしろいところはそこにあったのかと思い直した。弁の立つ弁護士が学校でほえたことや、その行動を「そのとおりだ」「いや、違う」など視聴者自身が考え、ドラマの登場人物の１人になれるという新しいジャンルのドラマだということならばこれはこれでありではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

委員の感想はまさに脚本家、制作現場のねらいの一つだった。現実はそう簡単には割り切れず、規則どおりでもうまくいかないところがあり、そういうものが全部積み残される感じのストーリーになっている。少し重いメッセージではあるが、そういうことも感じていただきたいと思っている。

○　５月９日(水)のあさイチ「子どもの部活とどう向き合う？」で中高生の部活のことを取り上げていた。部活のあり方も、土日もなく部活をする学生もいれば、全く運動しない学生もいて二極化しており、先生方の長時間労働にも大きくかかわる問題だ。部活にとどまらず、生涯スポーツという考え方で取り上げた方がいいと思った。

○　４月２５日(水)の又吉直樹のヘウレーカ！「サボる“アリ”はいないのか？」、５月２日(水)の「なぜ植物はスキマに生えるのか？」、５月１６日(水)の「月はなぜヒトの心を捉えるのか？」を見た。日常生活の中にある「なぜ」を視聴者に突きつけて、雑学のおもしろさを教えてくれるので毎週楽しみにしている。この番組と「チコちゃんに叱られる！」は、クイズバラエティ番組として比較して見るといろいろな発見があり、大変おもしろい。

○　５月５日(土)のくうねるあそぶ　こども応援宣言「ちゃんと遊べてる？」(Ｅテレ後 9:00～9:54)を見た。尾木直樹さんも出ており、親しみを持って見られた。ほとんどの公園で野球、サッカーなどのボール遊びが禁止され、公園でゲームをするしかないという子どもたちの実態や、中高生のけがが多いのは小学校低学年、中学年の時にしっかりと遊び込めていないからだということが紹介され、番組では遊びの重要性が指摘されていた。残念ながらＥテレで放送しても子育てに関心がある世代にしか見てもらえないと思うので、総合テレビなどでも取り上げてほしい。

○　５月１０日(木)の英雄たちの選択「日本史を斬る！刀剣スペシャル」を見た。毎回さまざまな角度からテーマに切り込む批評をワクワクしながら楽しんで見ている。今回のテーマ「刀剣」は、これまでとは違う視聴者層を広げるのに最適だったと思う。日本史を刀の視点で読み解く構成はおもしろかったが、司会の磯田道史さんが語りすぎている印象があり、金属工業、科学分野、デザイン分野などいつものように異分野、異業種のゲストを呼んだほうがよかったのでないか。また、元祖刀剣女子こと佐野美術館の渡邉妙子さんはＶＴＲだけでなく、スタジオにコメンテーターとして呼んでもよかったのでないか。今回のテーマは「歴史秘話ヒストリ

ア」や「先人たちの底力　知恵泉(ちえいず)」といった歴史を扱う番組には少し馴染みにくいので、この番組で扱ったと思うが、別の特集番組にしてもよかったと思う。

○　「チコちゃんに叱(しか)られる！」はわが家で今、一番話題にあがる番組だ。チコちゃんの表情の豊かさはとても良いのだが、「ボーっと生きてんじゃねえよ！」ということばづかいは心地よくも聞けるが、少し気になる。

（ＮＨＫ側）

　この番組はＮＨＫで長年課題となっている家族全員で楽しく見られる番組をゴールデンタイムに増やしたいという思いがあって開発した番組だ。チコちゃんのことばづかいについては、そういったご意見もいただいているが、ことばづかいがおもしろい、かわいらしいといった意見も多数ある。チコちゃんは生意気盛りで、大人にいろいろと突っかかりたい５歳の女の子という設定なので、そういう女の子の気持ちを利用し、私たちが普段ボーっと見逃していることについておもしろおかしく、ああいうことばづかいでキャラクターの魅力を伝えたいと思っている。

○　朝７時～９時ぐらいがＮＨＫを一番見る時間帯だが、「あさイチ」の出演者が変わったからか、「連続テレビ小説」が変わったからか分からないが、「あさイチ」が新しくなってから興味のある話題が少なくなったように感じている。朝の時間帯であっても、もう少し深い話題を取り上げていいと思う。

（ＮＨＫ側）

　連続テレビ小説「半分、青い。」の軽妙なタッチと「あさイチ」の司会者がお笑い芸人の方になり、おもしろいやりとりが増えたということで全体にそういう印象になっているのかもしれない。司会者が変わっても取り扱う話題のジャンルを変えたつもりはなく、妻の夫へのＤＶ、発達障害のことなども取り上げている。深刻に伝えるというよりは、多くの人に見てもらえるように工夫している。そういう意見があったことは現場に伝える。

○　大河ドラマ「西郷どん」を欠かさずに見ている。西郷吉之助が奄美大島に流され

「島編」に入り、景観、南国の雰囲気が出ており、ドラマの流れがだいぶ変わったと思う。大型連休中に鹿児島に行ったが、町おこしになっていると肌で感じた。「西郷どん」は鈴木亮平さん、渡辺謙さん、北川景子さんなど、すばらしい出演者が迫力のある演技をしており、今後の展開も楽しみにしている。

○　首都圏ネットワークの「ストップ詐欺被害」のコーナーで、女性アナウンサーが「私からお願いです」と言い、詐欺に遭った事例を挙げている。なぜ「私からのお願いです」という“私メッセージ”を使うのか。

（ＮＨＫ側）

「ストップ詐欺被害」は多くの方々に気をつけていただきたい、詐欺に引っかかってほしくないという思いで長く続けているコーナーだ。振り込め詐欺に関しては、自分は引っかからないと思っている例がほとんどで、放送する側と受け止める側の温度差がなかなか埋まらず、詐欺被害はむしろ増えている状況がある。自分に対するメッセージだとテレビの向こう側にいる視聴者に伝えたいと思い、いろいろと工夫をした中であの様な表現にしている。どうしたら視聴者にしっかり受け止めてもらえるのか、今後もいろいろと検討したい。

○　「にっぽん縦断　こころ旅」は、「朝版」と「とうちゃこ版」でそれぞれ違う映像が流れるので、両方を見ることでいっそう楽しめる。また、手紙の締め切りから撮影まで時間があまりない中でやっているので感心している。各県に入るときに「朝版」のお便りコーナーでは、物語があり、とてもおもしろいお便りが結構あるが、お便りだけが紹介されるもの、火野さんが実際に現地へ行くものはどういう基準で選ばれているのかを教えてほしい。

（ＮＨＫ側）　「にっぽん縦断　こころ旅」でお便りをどう選ぶのかは番組ディレクターが一番悩むところだが、心の風景なのでいろいろなエピソードがある場所を訪ねたい、というのが最優先だ。４日間、県内を移動する中で昭和の時代の思い出も、最近の話題も、いろいろなことがバランスよくバラエティ豊かにうまく紹介できるように工夫している。

○　「Ｒの法則」が終わったが、青少年が視聴する番組として貴重だったと思う。視聴者から寄せられた意見にどのように対応されているのか。１０代の出演者につい

て、どのようにケアしているのかについても教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

「Ｒの法則」が終了したのは残念だが、引き続き１０代の情報、意見、思いを伝える番組が必要であると考えており、検討を始めている。１０代の出演者への対応について、「Ｒの法則」の出演者同士は連絡先の交換を控えるように事務所を通じお願いする対応を取っていた。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局

平成３０年４月ＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ関東甲信越地方放送番組審議会は、２０日(金)、ＮＨＫ放送センターにおいて、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、新潟放送局の取り組みと今後の予定について報告した。その後、金よう夜　きらっと新潟「電車はなぜ止まったのか～検証　ＪＲ信越線立往生～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　髙野孫左ヱ門（(株)吉字屋本店代表取締役社長）
副委員長　山口　晃平（(株)山口楼 専務取締役）
委　　員　大山　　寛（サンファーム・オオヤマ(有)取締役会長）
岡田　芳保（元群馬県立土屋文明記念文学館館長）
奥山千鶴子（ＮＰＯ法人びーのびーの理事長）
斉藤とも子（俳優／社会福祉士・介護福祉士）
杉山　正司（元埼玉県立文書館館長）
野老真理子（大里綜合管理(株)代表取締役）
原　　拓男（千曲錦酒造(株)相談役）

（主な発言）

＜金よう夜きらっと新潟「電車はなぜ止まったのか　～検証　ＪＲ信越線立往生～」
(総合　１月１９日(金)放送　新潟県域)について＞

○　大雪の影響でＪＲ信越線が１５時間もの間立往生し、乗客が車内に閉じ込められた問題について、とてもわかりやすく検証していたと思う。まず、前半で電車が止まった原因について、後半でＪＲの対応や車内の状況について検証するという構成がわかりやすかった。また、個々の検証についても、三条市からの代行バス手配の申し出にＪＲがうまく対応できなかったことや、ＪＲの本部と現場との対応の温度差、乗客への状況説明がうまくいかなかったことなど、重要なポイントを明確にしながらわかりやすく解説されていたと思う。これらの検証を通して、素早く対応するためにはＪＲ

が行政、消防などとスムーズに連携することが重要な課題であることが浮き彫りになっていた。こうした教訓を伝えることで、異常気象が想定外ではなくいつでも起こりうることを視聴者に知らせ、日ごろからそうした状況への心構えが必要であることを考えさせる番組になっていてよかった。また、長時間車内に閉じ込められながらも冷静に対応した乗客の姿を見て、日本人の辛抱強さを実感した。

○　１月１１日(木)の立往生から約１週間でこれほどの検証番組を制作したことに驚かされた。新潟局を中心に部局を超えて連携したからこそだと感心した。番組は、構成も個々の分析も非常にわかりやすかった。その後の大雪にはうまく対応できているようだが、そのことに少なからず影響を及ぼしていると思う。テレビの力を改めて感じた。ただ、番組の冒頭で、この日は６本の電車が止まり、1,600 人が車内に閉じ込められたことが伝えられたが、番組が検証したのはそのうちの１本、430 人の乗客についてだったので、他の電車や乗客はどうだったのかが気になった。例えばその中でスムーズに対応できた電車があれば、その例も紹介することでより今後の参考になると思う。この放送時間ですべてを伝えることは難しいと思うが、そうした視点があってもよかったのではないか。専門学校生が、１人で現場対応に当たる車掌を気遣うＳＮＳ投稿を行っていたことが紹介されたが、厳しい状況の中でも他人をおもんぱかる気持ちを持てる人がいることがうれしく感じられた。

（ＮＨＫ側）

　他の電車についても取り上げてほしいという声は視聴者からもいただいていた。他の電車も立ち往生の経緯はほぼ同様だったったため、冒頭で全体像を伝え、そのうちの１本の電車に絞って詳しく検証することで、今後の教訓や対策を導き出そうという形をとった。

○　３０分弱という短時間の中でよくまとまっていたと思う。当時の状況がよく伝わり、検証も分かりやすかった。スタジオでの専門家の解説も的確だった。こうした教訓を行政などに反映していくことはとても大切なことなので、今回の問題をニュースで伝えるだけではなく、さまざまな観点から検証したことを高く評価したい。乗客への情報伝達がうまくいかなかったことが紹介されていたが、このことは、最近は携帯電話やＳＮＳが普及発達し情報伝達に有効だと思われている中で、何が起こったかは伝わっても、その後の事態の進捗といった肝心な情報が現場には意外と伝わっていない実態を明らかにしていた。現場対応の十分な体制構築の必要性を感じるとともに、そこには自治体との連携が不可欠であることを痛感した。その意味で、ＪＲが三条市から受けた代行バスの申し出にうまく対応できなかったことはもっと深く追及した

方がよかったと思う。湿った雪によるトラブルは、温暖化などを考慮すると今後は東北や北海道で「想定外」として起きることも考えられるので、全国的に考えなければならない問題だと感じた。最近の自然災害は多くが「想定外」だ。想定外でも対応できる体制の必要性を教訓として伝える、非常によい番組だったと思う。

○　想定外の災害が多発している今、全てのことが「想定内」という前提で考えることが重要になってきていると思う。その中で、今回の大雪をまだ「想定外」と表現していることにまず違和感を覚えた。湿った重たい雪だったことや、最新の除雪機能を装備した電車だったことへの過信など、長時間電車が止まった原因の“入り口”はわかったが、自然災害が多い日本であればそれを上回る事態への対応は多様に準備されており、その中から状況に応じた最善の策で動く体制が用意されていると思っていた。そのため、除雪車の到着が遅れた経緯や、自治体との連携がうまくいかなかったことなど、あの時何が起きていたかはよくわかっても、なぜこれほどの事態になってしまったのかという疑問は解けなかった。また、いつ何が起きるかわからない今だからこそ、乗客を被害者としてではなく当事者として捉え、危機に直面したときへの備えとして、今回どのように行動したのかを情報共有するような視点も必要だったと思う。１人で対応した車掌を気遣うＳＮＳ投稿をした乗客の話はほほえましかったが、濡れた床に座ることもできない車内で乗客一人一人がどう協力しあったのか、何が辛かったのかなど、車掌本人の声や乗客の声をもっと伝えてもらいたかった。今回は課題の検証がＪＲの対応についてのみだったのでやや物足りなかった。

（ＮＨＫ側）

番組の制作に当たっては、車掌のインタビューや乗客の状況など、ＳＮＳの情報も参照しながらさまざまな取材を試みたが、放送までに取材にたどり着けなかったものもある。確かに、これらの内容があればより内容は深まったと思うが、今回は取材できた内容で構成した。

○　リスクマネジメントにとどまらずクライシスマネジメントの重要性を再認識させる非常によい番組だった。ただ、ＪＲの指揮命令系統の問題や、立往生する直前にある東光寺駅を発車した運転手の判断、積雪により除雪車の出動が遅れた長岡車両センターの判断など、もう少し掘り下げてもらいたい課題も多かった。特に三条市からの代行バスの申し出にＪＲが対応できなかった原因はもっと追及してもらいたかった。また、現場で１人で対応した車掌の声や、乗客が閉じ込められている間どのようにして情報を取っていたのか、ＳＮＳを含めた検証なども伝えてほしかった。短い時間でよくまとめられた番組だったが、もう少し時間を長くするか２回シリーズにする

ことで、個々の問題を掘り下げてもらいたかった。

（ＮＨＫ側）

今回は１週間で番組を作り上げたが、もう少し時間をかけた上で検証していくことも有効だと思う。今回の経験といただいた指摘は今後に生かし、より問題を掘り下げた番組を制作するよう努めていきたい。

（ＮＨＫ側）

今回の番組後に取材が実現したものについては「新潟ニュース６１０」で伝えている。例えば、三条市からの代行バスの申し出に対応できなかった経緯については、情報が責任者まで伝達されていなかったことがわかり、その教訓からＪＲは自治体と協定を結ぶ方向で動いている。こうした続報をニュースも含めてしっかり伝えていくことで、再発防止に貢献していければと思う。

○　１週間でこれだけの番組を制作したことに感心した。記憶に新しいうちに問題を検証する番組を放送することは報道機関として大切な姿勢だと思う。番組は、ＪＲや乗客とその家族、自治体など関係者を幅広く取材し、電車が止まったときの状況とそれぞれの対応を丁寧に検証しており、また、スタジオでの専門家の解説も的確な総括をしており、とてもよくまとまっていた。特に、車掌が１人で現場対応したことや、乗客を降車させる対応が全乗客に一貫せず一部の乗客にとどまったことは、本部の対応の課題や現場の混乱ぶり、現場判断の重要性を浮き彫りにしていた。現場の状況と思いを伝えることは今後につなげるためにも重要だと思うので、車掌のインタビューが実現できなかったことは残念だった。今回の大雪に限らず、ＪＲは首都圏でも地方でもさまざまな事故やトラブルに対応していると思う。そうした対応経験がマニュアルとして社内で情報共有されることが重要だと感じた。この番組は部局を越えた連携のもとで制作されたとのことだが、そうした取り組みはほかにも行われているのか。

（ＮＨＫ側）

特に災害報道では、以前から部局を越えた応援を行っており、そうすることで継続的に報道できる体制を整えている。ただ、番組という形で検証することについては、あまり例はなかったように思う。地域に暮らす方たちの安全・安心を守るために意味ある取り組みだと思っているので、今後も力を入れてい

きたい。

○　経営資源をどこに集中させるかという問題だ。ＮＨＫの地域放送は、夕方の地域情報番組や金曜夜間の番組に集中させるという話も聞くので、そうした取り組みの端緒となる番組だったように思う。

○　１週間という短期間で検証番組を制作した苦労は察するが、そうしたことは視聴者にはわからない。「見込みが甘かった」と語るＪＲの対応の悪さは見ていてよくわかったが、もう少し取材を掘り下げてほしいと思った。１人で現場対応した車掌の苦労に言及していたことについても、本人の声がなく中途半端な印象だった。番組冒頭で「ＪＲ信越線」「立往生」「なぜ―」と大きく表示した見せ方は、番組が取り上げる問題が端的に伝わってきてよかったと思う。また、スタジオでの記者と専門家の解説も、提言としてまとまっていてよかった。番組で乗客が持っていた食料をアップで撮影した視聴者提供の写真が使われていたが、商品名をそのまま見せていたので宣伝のように感じ、驚いた。

（ＮＨＫ側）

実際に車内でどのようなことが起き、乗客が厳しい状況をどのように耐えていたのかを伝えることも今後への備えとして重要だと思う。１週間後の時点では入手できる映像や情報は限られており、食料が配られたということ自体が新しい情報でもあったため、その状況をきちんと伝えるために今回はあえてあの写真をそのまま使用した。ただ、どれくらいの時間見せるかなど配慮の余地はあるかと思う。今後はそうしたことも気をつけていきたい。

○　個人が持っていたものでなく、乗客全員に配られたものであれば、その対応を事実として伝える意味で今回の放送は問題ないと思う。

○　３０分弱という短時間でも見やすく、わかりやすく構成されていた。ＪＲの対応について多角的に検証されていたと思う。ただ、ＶＴＲのナレーションについてはアナウンサーを起用した方が切迫感が増してより深刻さが伝わるものになったのではないか。

○　構成、内容ともにわかりやすくよくまとまっていたと思う。番組前半で、湿った雪の危険性に最初から気付いていた男性が紹介されたが、生活の実体験に基づいて的確

な想定をしていたことに強いメッセージを感じた。人間は災害に対して科学の力で解決しようとしすぎるきらいがあるが、一方で厳しい自然とどのように共生していくのかという視点も重要だ。この男性が番組で紹介されたことが、科学重視の社会のあり方に一石を投じる存在のように思えて深く印象に残った。最後のまとめの中で専門家が、雪の状況を見極めて電車の運行に対して適切に判断する必要性を指摘していたが、この指摘にも呼応した重要なメッセージだったと思う。

＜放送番組一般について＞

○　４月１５日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　金正恩（キムジョンウン）の野望第１集「暴君か戦略家か　禁断の実像」を見た。核・ミサイル開発など強硬姿勢を貫いてきた北朝鮮が、ピョンチャンオリンピック・パラリンピック後、対話路線に大きくかじを切ったことが気になっていたので、非常に興味深い内容だった。青年時代に交流があった人物から元幹部、脱北者まで幅広い関係者を長時間かけて丹念に取材して、キム委員長の実像に迫っており、ＮＨＫの取材力の高さに感銘を受けた。競争心を巧みにあおる経済成長戦略や、恐怖政治を上回る「恐怖先行統治」の実態など、かなり掘り下げた取材を行わなければわからないことを明らかにしていた。また、人工知能を使った分析では複数の専門家による解析から、これまでとは異なるキム委員長の思想と人物像を明らかにしていたと思う。第２集・第３集も、北朝鮮の戦略を明らかにする内容を期待している。

○　４月１５日(日)のＮＨＫスペシャル　シリーズ　金正恩(キムジョンウン)の野望第１集「暴君か戦略家か　禁断の実像」を見た。なぜ核・ミサイル開発路線だったのか、それがなぜ対話路線に変わったのかなど、今知りたい疑問に丁寧な取材で一つ一つ答えてくれる内容で、とても見応えがあった。極度の恐怖を目の前で見せ付けることによって民衆や政権幹部を統制する「恐怖先行統治」が、隣国で現実に行われていることに改めて恐ろしさを感じた。その現実を受け止めた上で、私たちは我が事としてどうするのかを考えなければならないと思った。多くの人に見てもらいたい番組だ。

○　４月１日(日)のＮＨＫスペシャル「ゴースト血管が危ない ～美と長寿のカギ　毛細血管～」を見た。血液が行き渡らない毛細血管が増えることで深刻な病や老化の大きな原因になることが伝えられたが、しわやたるみといった美容や、冷え性、認知症など誰にでも起こりうる病を入り口にして解説されていたので、非常に見やすかった。また、ホームページやデータ放送を活用したリスクチェックも行っていたことで、番組を見ながら自分の健康チェックができて楽しめた。さらに専門家がしっかり解説

し、簡単なスキップなど、誰にでもできる対処法も紹介されていたことでためになる内容になっていた。全体を通して、最後まで飽きずに、楽しみながら見ることができる番組になっていて非常によかったと思う。

○　４月７日(土)の「いまどぎゃんなっとっと？　熊本地震２年」(ラジオ第１　後 3:05～4:55 中断あり)、４月１１日(水)のハートネットＴＶ　シリーズ熊本地震から２年(１)「笑顔の裏にあるものは」、１２日(木)の同番組(２)「孤立させないために」を視聴した。およそ４万人がいまだに仮設住宅などで避難生活を余儀なくされている現状やその中でさまざまな問題が起きていることが丁寧に伝えられていた。復興が進む中、仮設住宅を出た人と、自宅再建のメドが立たないまま残された高齢者や低所得者などの差が開いたハサミの刃のように広がる「ハサミ状格差」と言われる現象が起きていることなどは、初めて知った。これから復興が進んでいく中でも、さまざまな問題が出てくると思う。もっと日常的に被災地の状況を伝えてもらいたいと思った。

○　３月２８日(水)のあさイチ「沖縄　母親たちが見た基地」を見た。去年１２月、普天間基地から 300 メートルほどの場所にある保育園の屋根から米軍機のものとみられる部品が見つかったことを受けて、不安を抱える母親たちの姿を見つめ、基地の問題について考える内容だった。母親たちは、生まれたときから基地があり、それを当然のことと考えてきた世代だ。その彼女たちが今不安を抱えているのは、子どもを守りたいという母親であれば誰もが持つ感情があるからで、そうした母親の目線から番組が作られていたところに強い説得力を感じた。

○　３月２４日(土)・３１日(土)の特集ドラマ「どこにもない国」(総合　後 9:00～10:13)を見た。戦後、旧満州に取り残された 150 万を超える日本人の帰国を実現するために奔走した３人の人物の実話を描いていたが、非常によかった。略奪や婦女暴行、栄養失調や伝染病など、当時満州に取り残された人を襲った現実の描写が残酷すぎるという感想を持った人もいるようだが、私が満州から引き揚げてきた方から聞いた話はこんなものではなかった。それをテレビで可能な限りの表現でリアリティを持ってよくここまで描いたと思う。また、マッカーサー元帥への直訴に至る道のりなど、役者たちの演技も迫力があってよかった。北朝鮮や韓国との関係が課題となる今、わずか７０年前にこうしたことが現実に起きていたことを伝えることは非常に意義深いと思う。すばらしいドラマだった。

○　３月２４日(土)・３１(土)の特集ドラマ「どこにもない国」は引き込まれた。私の周囲にも満州に行った方はいるが、私たちの世代以下になると現実がどうだったのかわからない。事実に基づいた内容をドラマとして放送することは、記憶を未来につな

げる意味でとても重要だと思う。

○　３月２６日(月)・２７日(火)に放送した「ノーナレ」(総合 後 10:50～11:15)を見た。いずれもナレーションのないドキュメンタリーのおもしろさが感じられる内容だった。解説が入らないことで、視聴者に映像そのものの迫力を感じてもらったり、問題を考えてもらったりする効果があって、視聴者とともに作る番組のような印象を受け、新鮮だった。

○　３月２６日(月)のノーナレ「津軽　雪空港」(総合 後 10:50～11:15)を見た。大雪の青森空港を舞台に、滑走路を除雪する精鋭部隊「ホワイトインパルス」の活躍を描いていたが、ものすごい迫力だった。まず、２０台以上の除雪車が一糸乱れぬ隊列を組み、すさまじいスピードで除雪する様を捉えたカメラワークが見事だった。また、その映像を、除雪車の音と雪の降る静寂との対比や班長が指示する声といった現場の音声だけで見せたことで、迫力が一層増していたと思う。まるでアクション映画を見ているようだった。

○　４月８日(日)のダーウィンが来た！生きもの新伝説「神社の島へＧＯ！青森ウミネコ物語」を見た。八戸は漁業の町で、長年に渡ってウミネコを大漁をもたらす“神の使い”として大切にしてきた。ウミネコもそれを理解しているのか、まったく逃げない。そうした人間とウミネコとが“信頼関係”を育んできた風土がよく描かれていたと思う。

○　４月１９日(木)のクローズアップ現代＋「受刑者逃走！塀の無い刑務所の実態」を見た。多くは松山刑務所大井造船作業場から逃走した平尾受刑者について伝えた内容だったが、それ以上に受刑者の更正と社会復帰の取り組みに関心を持った。松山刑務所大井造船作業場のように、塀がなく、寮に鍵も鉄格子もなく、一般の作業員と一緒に職業訓練を行いながら更正と社会復帰に向けた取り組みを行う「解放的施設」が全国に４か所もあることを初めて知った。番組後半では、元受刑者を積極的に受け入れている大阪市の飲食店から中継していたが、元受刑者が顔を見せて実名で出演していたことに驚かされた。普通なら仮名にし、顔を隠して出演するところだが、素性を明かして出演しているところに、彼が今の状況に自信を持てていることが表れていてよかった。ただ、この元受刑者が今月から正社員になったことを紹介するために名刺を映す場面があったが、見えにくかった。彼が懸命に更正した証しでもあるので、きちんと映した方がよかったと思う。この飲食店では社長が直接面接をし、全国で９人の元受刑者を採用しているという。社長の話も聞きたかった。

○　連続テレビ小説「半分、青い。」の放送が始まった。北川悦吏子さんのオリジナル脚本とのことでとても楽しみにしていた。初回の冒頭、雨の中を左耳が聞こえない主人公が折れた傘を差して楽しそうに歩くシーンには、一見よくないと思えることも別の角度から見るとおもしろく見えるというメッセージが込められていて、番組タイトルの意味もストレートに伝わってきた。主題歌とタイトルバックにも同じメッセージが感じられてすばらしい。障害の有無に関わらず、日常生活にはさまざまな不便や不安は潜んでいるものだ。全ての人の一日に元気を与えてくれるドラマだと思う。今後も楽しみにしている。

○　４月９日(月)からスタートしたアニメ「ピアノの森」を見た。音楽番組なのかアニメーションなのか判然としない印象を受けた。ピアノの運指のアニメーション表現は見事だったと思うが、一方で、キャラクターがしゃべっているときの口の動きにはもどかしさを感じた。運指があれだけ見事なのになぜこの口の動きなのか疑問に思った。物語はこれからショパン・コンクールに向けてさまざまなピアニストが登場するとのことで、楽しみにしている。

○　３月２５日(日)にＮＨＫのど自慢「茨城県牛久市」の放送があったが、前日の予選会の見学に会場に行ってきた。予選の歌唱だけでなく、来場者を対象に舞台裏見学ツアーを行ったり、ステージで歌った自分の姿をロビーで見られるように時差再生したり、さまざまな来場者サービスが行われており、会場全体がお祭りのような盛り上がりを見せていて驚かされた。それだけでなく水戸放送局としては初めての試みとして、出場者の許諾を取った上でホームページに動画掲載も行っており、今も見ることができる。日曜日に放送されている番組は全体のほんの一部に過ぎず、「ＮＨＫのど自慢」自体がお祭りのようになっていることがよくわかった。地域活性化の意味でも非常に重要な取り組みであり、長寿番組として存在し続けてきた理由がわかった気がした。これだけの取り組みはドキュメンタリーで放送してもおもしろいのではないか。もっと多くの人に知ってもらいたいと思った。

○　４月７日(土)のＥＴＶ特集「極夜　記憶の彼方へ～角幡唯介の旅～」を見た。厳冬の北極圏で何か月も太陽が昇らない「極夜」の世界をたった一人で旅をするという一見無謀とも思えるドキュメンタリーだったが、暗闇と極寒の世界で繰り広げられた壮絶なサバイバルを見て、生きることの根源的な意味を考えさせられた。天体がもたらす光や自然そのものとの関わりを忘れた中で生きている私たちに、その存在がいかに大切かを伝えてくれる秀逸な内容だった。

○　４月１４日(土)のＥＴＶ特集「ラーマのつぶやき～この社会の片隅で～」を見た。

４年前、戦乱が続くシリアを逃れ、日本で初めて難民認定された女子高生、ラーマさんとその家族を見つめたドキュメンタリーだった。難民認定を受けることで生活保護も受けられ、一見恵まれた家族のように思えるが、異国で暮らすことの大変さが家族それぞれの立場からきちんと描かれていたと思う。なかなか日本の環境になじめない中でも懸命にことばを覚え、働く両親の姿などを映し出しながら、社会に順応しているように見える子どもたちも実際にはさまざまな悩みや不安を抱えて暮らしていることがよく描かれていた。難民の人たちがどのような思いで生きているのかがかいま見られる内容で、受け入れる側の日本人は当事者としてどのような社会を作っていくべきか、考えさせられた。

○　３月１３日(火)の先人たちの底力 知恵泉(ちえいず)「事業は現場で起きている！～“鉄道の父”井上勝　プロジェクト成功の知恵～」、４月１１日(水)の「ニッポンに蒸気機関車が走った日」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)、４月１２日(木)の英雄たちの選択「汽笛一声！文明開化を決めた資金調達～若き大隈・伊藤の挑戦～」を見た。いずれも明治５年の新橋～横浜間の鉄道開業にまつわる内容だったが、それぞれが、鉄道建設現場の苦労、鉄道開業当日の１日、資金調達をめぐる対立といった全く異なる視点で描かれていて、３本とも大変興味深く見た。どの番組にも明治村のＳＬの場面が出てくるのだが、同じ映像を使っていてもよさそうなものだが、それぞれ独自に撮影した映像だったところにも好感を持った。どの番組も単体で見られることを想定して制作されていたが、３本まとめて見ることで明治初期の鉄道建設の歴史的経緯が非常によくわかる内容になっていたことに感心した。３本のうち「先人たちの底力　知恵泉(ちえいず)」だけは、１か月前の放送だったが、こうした関連した内容の番組は近接した時期にまとめて放送した方が効果的だと思う。

○　４月１２日(木)の英雄たちの選択「汽笛一声！文明開化を決めた資金調達～若き大隈・伊藤の挑戦～」を見た。ばく大な予算を必要とする鉄道建設の資金を、植民地化の懸念のある海外列強に求めるのか、それとも国内に求めるのか、軍事力と経済発展とのせめぎ合いの中で下された決断の裏に、さまざまな葛藤があったことがわかりやすく描かれていて、大変興味深い内容だった。線路の３分の１が海上に敷設された理由が鉄道反対派の立ち退き拒否にあったためという話には驚いた。他にも鉄道開業を取り上げた番組が放送されたことには気付かなかったので、関連した番組はまとめて放送してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

特集番組については情報を出し合い、関連させて編成するのか、それとも時期を離して編成するのかなど、議論しながら放

送している。定時番組も含め、放送波を越えて全体を見るのは難しい部分もあるのだが、重要な指摘だと思うので、検討していきたい。

○　３月１９日(月)のスーパープレミアム「蘇(よみがえ)る太陽の塔～“閉塞する日本人”へのメッセージ」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:59)、３月２１日(水)の同番組「完全中継　復活　太陽の塔」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:00～8:59 中断あり)を見た。「太陽の塔」再生プロジェクトに密着したドキュメンタリーや、「太陽の塔」制作に苦闘する岡本太郎さんを支えたパートナー、敏子さんの文章を再現したドラマ、そして復活した「太陽の塔」からの中継など、充実した内容ですばらしかった。「太陽の塔」は、大阪万博のテーマ「進歩と調和」を体現するシンボルなどではなく、「縄文の怪物」として科学技術の祭典・大阪万博に突き立てたのだという。科学技術や資本主義の行き詰まりを予見し、縄文文化の精神性こそが必要だと考えた岡本さんが、当時の日本人に訴えたかったメッセージが具体的に伝わってきた。塔の内部は初めて見るもので、真っ赤な壁面や４０メートルもの「生命の樹」で「怪物の内臓」が表現されていて驚かされた。その「生命の樹」には 300 もの「生き物の造形」があったことなど、初めて知ることが数多くあった。大阪万博から４８年が経過してなお新たな発見があることに感心した。

○　「ニュースチェック１１」でＡＩを使って発話する新人リポーター「ニュースのヨミ子」が４月４日(水)から登場し、注目している。初回の読みは、抑揚のある人間の語り口ではなく機械的な発声だった。これからどのような学習をさせ、どのように育てていくのか興味深い。一方で、人間の仕事の多くがＡＩに取って代わられることも指摘されている中、プロのアナウンサーの存在価値を問う取り組みのようにも感じており、その意味でも興味深い。ＡＩリポーターも人間のアナウンサーもともに成長してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「ニュースのヨミ子」はインターネットなどで事前に話題になったこともあり、かなり注目してもらえていると思う。基本的に毎週水曜日に出演しているので、これからＡＩリポーターとして成長していく過程も視聴者に見ていただきながら、皆さんと一緒に育てていきたいと考えている。

（ＮＨＫ側）

アナウンサーの仕事は、対人できちんと取材をして裏付けを

取ったり、原稿の内容を理解して読んだり、視聴者の皆さんに安全・安心を届けたりする部分もあれば、ある種決まった原稿を定時のお知らせ枠などで読むといった部分もある。現在はそれら全てに人間のパワーがかかっているが、例えば後者を自動音声で賄えるようにすることで、アナウンサーのパワーをサービスの一層の充実に投入できるようになるので、そうしたことを検討しているところだ。放送の環境はこれから激変していくと思う。その中でＡＩリポーターも生身のアナウンサーもよりよい放送を届けられるように切さたく磨していきたい。

○　この１か月はＮＨＫ－ＦＭをよく聴いた。ふだんはラジオ第１ばかり聴いているのだが、音声波でチャンネルを変える行動は意外と抵抗感があると思った。放送内容については、とても幅広いジャンルの音楽が紹介されていて驚かされた。ふだん聴くことができないような世界の珍しい合唱曲なども放送されていてとても楽しめたのだが、今を感じるコメントが少ないことに物足りなさも感じた。タイムリーな呼びかけがあればよりよい放送になるのではないか。例えば総合司会を設けるなど、検討した方がよいと思う。

（ＮＨＫ側）

ＦＭの番組は音楽番組が中心のため事前収録するものが多いが、司会者がいて生放送でお届けするものもある。全ての番組に司会者を設けることは難しいが、指摘については検討していきたい。また、ＮＨＫの音声放送はインターネットの「らじる★らじる」や民放ラジオの配信プラットフォーム「ｒａｄｉｋｏ．ｊｐ」で聴くことができる。ここで聴くとチャンネル選択しやすいと思うので、ぜひ試してもらいたい。

○　大谷翔平選手のＭＬＢでの活躍をとてもうれしく見ている。地方では電車よりも車が使われることの方が多く、ラジオは結構聞かれていると思うので、ぜひ大谷選手の活躍はラジオでもしっかり伝えてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

大谷選手は相当注目を集めている。ニュースや試合の中継など、できるだけ取り上げていきたいと考えている。

○　茨城のプロバスケットボールチームがＢ２リーグ中地区で首位に立ち、県民の期待

が非常に高まっている。水戸放送局は、これまでも試合中継のほか、「いば６」や「いばっチャオ！」のコーナーでチームの練習風景や地域とのふれあいなどを積極的に紹介してくれているが、茨城県民としてはまたとないチャンスなので、ぜひ全国放送で取り上げ、茨城県を全国に発信してほしい。日ごろからスポーツを幅広く、きちんと取り上げているＮＨＫにしかできないことだと思う。ぜひ検討をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

前回の審議会で、ピョンチャンオリンピックのカーリング中継の際に、解説者が次にストーンを投げる位置などを直接画面上に書き込んで予想するような演出が見られなかったのはなぜかという質問をいただいたので、お答えする。オリンピック会場からの中継は機材面でのさまざまな制約がある。その関係で、画面上に直接投石予想を書き込む「チョークボード」というシステムは、今回持ち込むことができなかったため、投石軌道を画面上に書き込みながら解説する演出が行えなかった。

ＮＨＫ編成局
番組審議会事務局